

---

# 七英雄物語 3

七英雄

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

七英雄物語3

### 【Zコード】

Z3577B

### 【作者名】

七英雄

### 【あらすじ】

混乱を極めたガルド会議は前代未聞の終結となつた。大神官は暗殺され、その息子が指名手配される。各国はそれぞれの思いを募らせて帰国する。そんな中、ルキボル国王王子オークランドがある一行と遭遇する。政権争いに巻き込まれる一行を待つものは！？壮大なファンタジー小説第3弾！

### 第3部 癒しの瞳に奇跡輝く プロローグ 医療大国ルキボル

世界は疫病で苦しんでいた。医師というものは存在していたが、目に見えるほどの力不足のために、数々の人人が死んでいった。

そこに現われたのが、ルキシー・ボルという一人の男。彼はどこで覚えてきたのか人の身体に詳しかった。後に彼は太陽神から授かって知識と言うことになる。

立ち寄る町や村で次々に人々を診て治す。当時は奇跡とさえ言われた。

ルキシー・ボルの知識を教えてもらおうと多くの人が教えを乞いにやってきた。彼は断ることもなく、丁寧にそれを教えた。彼の希望は世界の人々が元気に生きていくこと。病魔という悪しきものに殺されるのではなく、安らかに天に召されることを望んだ。

そして、集つた人達で集落ができる、村ができる、町ができる、城ができる、国ができる。

ガルド歴743年、医療国ルキボルが建国した。国の名称の由来は、当時の王となつたルキシー・ボルからきている。

知識を得た人達は、医師として各国へ出向き、現在に至る。

ルキボルという国は世界バロゲニアガルドに間違いなく必要な国となつた。

そのため他国と争うということを過去の歴史上聞いた事がない。

その代わり、国内での霸権争いが多く、外での華やかな歴史とは逆に内では血生臭い歴史が繰り返されている。

現在、ガルド暦910年。

ルキボル国はまたしても後継者を巡つて歴史に汚点を残すことになろうとしている。

数ヶ月前、国王が突然死去した。次期の国王を決めなければいけ

なくなり、本来あるはずの遺言状が見当たらなかつたことにより、残された3人の王子が、政権欲しさに動き出す。1人が動いて残り2人が認めれば何の問題も起こることがない話だが、1人でも反対者がいれば、国内戦争へと発展することになる。

長男のミストラス、次男のオークランド、3男のズッケルア。

次男のオークランドは欲のない男のため、この争いからは除外される。だが長男と3男は、次なる王は自分だと考えているために、戦争は避けることができない。いつの時代も欲に溺れた者は醜いものだ。

真っ先にお払い箱となつたオークランドは、先の事件のあつた会議、ガルド会議に出席させられていた。

邪魔者が1人消えた。今の間に、必ず政権を我が物にしようと、ミストラスとズッケルアの2人の王子は、野望を高め、策略を練る。全ては自分の私利私欲のために。

ルキボル国[王子]オークランドは愛馬ストラングと共に、國へ帰つてゐるところだつた。

ガルド会議に1人で出席させられ、警備や側近を付けることができなかつた。襲われてもし死んでも兄弟達から見ればそれはそれで好都合なのだろう。

ガルド会議の出席が國の代表者ということなので、逆に王になりたいのであれば、出席した方がいいのではとオークランドは思つていたが、實際國を留守にしている間に乗つ取られるかもしれないといふ心配で、兄のミストラスと弟のズッケルアは動くことはなかつた。

オークランドには王位に就くという使命感はない。平和に日々を暮らせるだけで満足なのだ。なぜ、そこまで争う必要があるのだろうか、それも、血の繋がつた兄弟同士で。

そもそも、普通は長男であるミストラスが継ぐべきであった。それを、なぜ、3男のズッケルアがでしゃばつてきたのか。

理由は2つある。

1つは、ズッケルアの性格が野望の塊、行き過ぎた向上心のために芽生えているからであつた。

もう1つ、これが最大の原因なのだが、ミストラスが王位に就くと、他の親族や家族の地位もそれなりの場所を与えなければならぬ。ミストラスはそれを拒否した。オークランドとズッケルアの地位を、地区の警備長程度のものしか与えなかつたのである。

オークランドはともかく、それに反発したのはズッケルアであつた。そのはずである、自分が望んだ地位は王の右腕となる場所だつたのだ。それが王宮にすら入れない。憤慨するのは当然のことだ。ミストラスは自分の意見に反対を述べそうな者を傍には置きたくなかった。身内だと平氣で言つてくるだろう。

そのことを、王位に就いてから発表すれば良かつたのに、ミストラスは最後の詰めが甘い男だった。側近の誰かにそのことを洩らしたのだ。噂というものは広がるとあつという間である。ミストラスが洩らして半日もせずに、その噂はズツケルアの耳に入ることとなつた。

反発したズツケルアはミストラスに言い詰め寄つた。こうなれば、引く引けない状況となり、ミストラスは訂正せずに開き直つた。よほど、傍にて欲しくないのであろう。

そして、お互いが同時に王位継承を宣言し、お互いがお互いを罵り合い、裏切り、策略。民はいい迷惑である。

欲のなかつたオーランドは除外された。とりあえず、王宮に入ることができる地位を貰えることになる。それは兄弟2人の意見であつた。早くに脱落した者など害はないという判断だつた。

オーランドもそれでいいと思つていたのだが、彼には一つ秘密があつた。

父である国王が亡くなる寸前に託された1通の封筒。

これが遺言状であることは明白であつた。

誰も知らない、存在していないと思つてゐる遺言状。それが、オーランドの手元にある。

書かれているのは間違いなく次期国王のこと。そんな大事な物をなぜオーランドに手渡したのか。答えは一つしかない。次期国王がオーランドなのだ。

自分が死ねば、政権争いになると判断した国王は、自分の意志を伝えても破棄される恐れがあり、信頼できる、もしくは、国王となる当の本人に渡すのが得策と考えたのだろう。

まさか、本人にとつて最高の権利が貰える証拠を破棄することはないと思つてのことだつた。

だが、父である国王もオーランドのことを全て理解しているわけではなかつた。オーランドは本当に欲のない男なのだ。

遺言状が重荷になつてゐる。兄弟に狙われる恐怖。溜息だけしか出

てこない。

ガルド会議が長引けば長引くほど嬉しかったのだが、大神官が暗殺されるという事態のため、急遽帰ることになった。

オークランドは白き馬ストラングを撫でた。

この愛馬はオークランドの気持ちを察しているのか、駆けることはなく、ゆっくりと進んでいた。なるべく早く帰らないようにしている。

ルキボル国は城が4つ、町が4つ、村が8つで成り立っている。国王が滞在していた城が1つ。あとの3つは、各王子達が住む城。町は城下町として付いているので4つ。周りに村が2つずつ付いているので8つとなっている。

オークランドが向かっていたのは一番近い村、バファ村である。ここは長男ミストラスの傘下にある村。立ち寄っただけで、ミストラスに知れるのは当たり前になる。それだけでオークランドの心は憂鬱になってしまつ。

通り過ぎたいところだが、ストラングの疲れも溜まっている。休ませないわけにはいかない。

村まであと少しだ。不本意ではあるが、立ち寄るしか道はない。ちょうど同じように村へ向かっている人が見えた。

黒い衣を着ていたために、黒点のようだつた。

10代前半の少年だった。

1人で旅をしているのはこの国では珍しくはない。誰もが医療を勉強すべく、この国へ入国していくのだ。

オークランドは興味がわき、少年の方へと馬を走らせた。少年は歩いてここまできていたのだろう、酷く疲れていた。

「大丈夫かい?」

オークランドは馬から降りて、水の入った革袋を少年に渡した。恐らく途中で水を切らしてしまったのか、少年は美味しそうに水

を飲み干した。

「あ…ありがとうございます…」

少年は微笑んだ、生き返ったような笑顔だった。

綺麗な黒髪に透き通るほどの瞳。整った顔立ち。美しい…が、少年を見たオーランドの第1印象だった。

「もうすぐ、村がある。そこまで一緒に」

オーランドは少年をストラングに乗るように勧めた。さすがに疲れていたのか、少年は遠慮することもなく素直に乗った。

「僕の名前は、オーランド。…………この国の者だ」

王家の者だとはなぜか言えなかつた。

「オーランドさん…。僕の名前は…。ルシアといいます」

黒衣の少年、ルシアは言つた。

ついで

「ルシアか…。よろしくな」

オーランドは爽やかに言つた。何が目的かはわからないが、話し相手ができたことに少し嬉しさを感じる。

「今日はあの村で泊まろう、これも何かの縁だ、良かつたら食事でもしないか」

オーランドの誘いに、少年ルシアは微笑んだ。

「ありがとうございます」

「よし、決まりだ」

2人は、そのままバファア村へと入つていった。

夕暮れ近いバファア村は、食事の支度や、今日一日の仕事の終わる時間と重なつたため、活氣づいていた。

その賑やかな笑い声や客引きの大きな声が次第に消えていく。

オーランドが通つているからである。

長男のミストラスの持ち土地であるこの村は、全ての情報が上がつてくるように伝言がされている。不穏な輩、不穏な動き、ズッケルアの動き、オーランドの動き。

村人も正直兄弟喧嘩に巻き込まれることに嫌気をさしていたが、逆らえる立場でもないため、言つことを聞かざるを得ない。逆らいさえしなければ、快適に過ごせることが出来るのだ。

その政権争いの状況がわかつているため、村人の態度が余所余所しい。

たまらず、村長が話しかけてきた。

「これは、これは、オーランド王子、よくぞいらっしゃいました」

ルシアの驚いた顔がオーランドの目に入ったが、仕方ない。

「ああ、遅くにすまない。突然ですまないが、宿を2人分頼めるだ

ろうか」

「ええ、ええ、それは勿論、用意をさせて頂きます」

村長は指示を始めた。横目に村から素早く走り去る人の影を確認する。きっと、伝令に行つたのだろう。程なく兄のミストラスの耳に届くことになる。焦ることはない。ヒツキは既に王位継承を手離してるので。

夜。

呼ばれた宿での夕食。

狭い部屋。

オーランドとルシアは向かい合いながら食事を進めていた。ルキボルは野菜や果物が多い国である。医療という部類ではないが、自然と健康という言葉が頭の中に入るため、栄養のある野菜などは必要不可欠な主食となつている。

幸いルシアは好き嫌いがないようなので、オーランドはほっとした。

「オーランドさん。王子様だったんですね」

食べながら唐突にルシアが言った。

「あ…うん。そうなんだ、僕はルキボル国の3人いる王子の1人なんだ」

申し訳なさそうにオーランドは言つ。最初の自己紹介にそいつた説明がなかつたことに後ろめたさを感じている。

耐え切れず自分から切り出した。

「ルシア、すまない、自分で王子だといつことが、なぜか抵抗があつて…」

切羽詰つた表情のオーランドを見て、ルシアは笑つた。なんと見惚れる笑顔だった。

「そんなこと気にしなくて良いですよ、オーランドさん。僕にはそんな身分は関係ありません。僕に話しかけてきたのは王子様だから

「うじやないでしょ？」「

「そう言つてもらえるとありがたい」

「まあ、でも、王子だからこそ、この宿に泊まることが出来たのでしょうけど」

2人は大声で笑つた。オーランドからすれば、笑うのは久しぶりだつた。身分に左右されない話し相手が出来たことが心地良かつた。

風の音でカタカタと窓が音を立てる。

「そろそろ寝ようか」

「ええ」

寝床の準備をしようとした時。

バンッと扉が開かれた。人影と涼しそぎる風が一緒に流れてくる。オーランドは緊張で強張つた。まさか、ミストラスが放つた刺客か？殺害命令が下されたのか？

影の数は、4つ。

4人もいるのか？

飾りのような剣に手を伸ばすが、目の前に短剣を突きつけられてオーランドの動きは止められた。

「動くな」

男の声。

高い声。

まだ声変わりしていない子供のような声。

子供？

異様な光景だった。

良く見ると、短剣を突きついているのは男の子である。この子も緊張した顔だ。

短剣が震えている。

男がもう一人いるが、これも子供。しかも、右腕がない。その時

点で危険度が高まつた。

残りの2人は女の子である。

1人は男の子と同じような年齢の大人しそうな子。

もう1人は3人より少し年上の女の子というより、少女である。視線は虚ろで自分の意志で来たより、引っ張られてきたようだつた。

男2人、女2人の4人が突然部屋に飛び込んできたのだ。

危険ではあるが、子供ということでオークランドの緊張は若干解けた。刺客ではないことに安心感すら抱く。

ルシアは普通の表情で眺めている。

「な……なんだい？」

オークランドは優しく言つた。それでも短剣という武器を持つているのである。まだまだ危険には変わりない。

その優しい物言いに、安心したのか、男の子は短剣をすぐに引いた。

「僕の名前はボズ。こいつはステュー、あの子はアリシエ、あの姉ちゃんはリサ」

突然名前を言い出した。意外と礼儀正しい。反対に紹介された、ステューとアリシエ、リサは全く何も喋らないし、会釈もしない。どういう繋がりなのかとオークランドは不思議に思った。

「あの……」

ボズは俯き加減で訴えるように言つた。

「腹が減つて死にそうなんだ。なんか食わせてくれ」

つづく

乱入してきたおかしな4人組に、オーランドは食事を『えた。かなり腹をすかせていたのだろう、ボズは飛びつくように食いついた。

ステューは器用に左手だけで食べている。

アリシエはその大人しい外見通り、大人しく食べていた。少食のようだった。

虚ろで心配だった少女リサは、一応一人で食べることができるようだ。しかし、その食べ方は操り人形のようであった。

ボズが名乗つてきたので、オーランドも名乗り、ルシアを紹介した。その際には今度はちゃんとルキボル国王王子だと言った。

「どうしてこんなところに？」

聞くべきか迷つたが、最大の疑問だった。子供なぜこんな所にいたのだろうか。

ボズは特に言い難そうでもなかつた。

「はぐれたんだ。大人達と」

「へえ。この国でかい？」

「違うよ。え…と。バロゲニア神殿つてとこ」

オーランドはギヨツとした。自分も先田は同じところにいたのだ。『はぐれた』という理由は一つしかない。

「僕もそこにいたんだよ。もしかして…怪物が出た時かい？」

「ええつ！うん、そーだよ。そいつらから逃げているうちにさ、大人達とはぐれたんだ。俺達は仲間なんだけど、そのリサ姉ちゃんは1人だつたんだ」

ボズはリサを見る。変わらず虚ろだ。

「リサ姉ちゃんを1人に出来なかつたから、付いていくことにしたらさ、いつの間にか何処歩いているのかわからなくて…。しかも何も食べてなくて…」

「そうか…」

「オーランドはしばし考えて、思いつくように言った。

「ボズ、良かつたら、みんなで城へこないかい？そこの方が安全だし、何かと便利だと思うんだけどね。人探しも楽になるし、保護者の人も探しやすいと思うよ」

「えつ…いいの？」

ボズはステュー達を見る。なにも読み取れない表情。

だが、ボズの顔は完全にオーランドを頼っている顔だった。人に頼られたことがないオーランドはその表情に照れ臭さを感じたが、嬉しかった。

今、ここでは自分が最年長なのだ。しつかりしないといけない。

「ルシア、君も良かつたら…」

オーランドは振り返る。

「ええ。いいですよ。僕も、城へ用があつたので」

どんな用か気になつたが、無理に聞けない。ともかく全員の承諾を得たようだ。

話はまとまつた。

随分と大人數になつたが、6人は明日に備えて寝ることになった。

朝。

村長を含めて、村人は驚愕の表情だった。

昨夜、招き入れたのは、オーランド王子とその連れであるルシアの2人だけだつたはずだ。

それが、一夜明けてみると、なんと4人増えて6人になっている。オーランド、ルシア、ボズ、ステュー、アリシェ、リサ。

それも、子供ばかり。突然変異でもこんなことはありえない。村長の目は丸くなつた。

「あ…あの、オーランド王子。これは？」

既に出発の準備を整えていたオーランドに村長は話しかけた。

「ああ、昨日知り合つたんだ。これから一緒に城へ行く」とした

オークランドは何食わぬ顔で言つた。

昨日伝令に行つたはずの男が、この有様を見て、慌てて引き返して行つた。再度伝令に行くのだろう。「苦労なことである。この状況を兄ミストラスはどう思つのであるつか。疑り深い彼のことだ、きっと何か企んでると思うのだらう。

それよりも今まで孤独な生活だったオークランドにこんなにも話し相手が出来たことの方がよっぽど嬉しい。…といっても、話すのはルシアとボズの2人だけだが。

「長、ありがとう、助かつたよ」

オークランドは礼を言つ。

「いえ、いえ、そんな」

「国がこんな状況ですまない。一刻も早く解決できるよう努力する『村人の』お前に出来るのか』『お前がいなくなつたら解決する』と言つてるような視線にオークランドは先程の言つたことを後悔した。

この国には味方はいない。この村はあくまでも兄ミストラスの村なのだ。

自分の城へ行くには、まずは、ミストラスの城を抜けなければいけなかつた。

そのことがオークランドの不安を搔き立てる何か嫌な予感がする。

「それでは出発しよう」

愛馬ストラングにアリシエとリサの2人を優先的に乗せた。残つた者は歩きである。

「よおし〜。行こう〜！」

ボズの大きな声がバファ村内に響いた。

オークランド一行が出発してから、数時間後のバファ村。

再び、村がざわついた。

騎士の男が現われたのだ。名前を、サー・ポーといった。サー・ポーはこのバファ村出身の騎士であった。

しかし彼は招かざる客であった。

何故なら、このサー・ポーは、3男王子ズッケルアの配下だつたらだ。

「何しにきた！ サー・ポー！」

村長が怒鳴つてきた。ここにはミストラスの村である。そこにズッケルアの者がいるところを見られたら、ミストラスの怒りを買つことになる。

「残念だなあ、長、そんな言い方ないっしょ。確かにズッケルア様の仕えてるけどよ、この村生まれなんだぜ」

「黙らんか、裏切り者のお主などこの村の者ではないわ

吐き捨てるように村長は言つた。

「オーランド王子が来たんだって？ 情報は入つてるよ」「し、知らん」

村長は焦りを消すために言つが、声が震えている。

「ま、いいか」

そういうとサー・ポーは素早く剣を抜き、村長の首を一瞬で切り飛ばした。

村人の叫び声が木霊する。

「さて」

…とサー・ポーは村人を見回す。

「命が惜しければ、俺の言つことを聞け。俺も故郷の人間を殺したくはない」

恐怖に縛られた村人を見て、言つことを聞くなど確信する。

「村長が殺されたと早くミストラス王子に報告するんだ。殺したのは…わかってるな？」

剣をおさめて、振り返りながら言つた。

「…オーランド王子だ」

卑しい笑みをサー・ポーは浮かべた。

第1章 出会つ 終り 第2章につづく

### 第3部 第2章 疑い その1

ルキボル国の長男王子であるミストラスの城にバファ村から伝令がきた。

これで3度目だ。

1度目は弟のオークランド王子が、バファ村に現わされて泊まつたこと。その際1人の連れがいたこと。

2度目の報告は、オーカランドが出発したこと。だが何故か、連れが4人増えていたこと。全員子供。全員を連れて自分の城へ向かうこと。

ここまでが聞いている伝令である。それが更に追加の報告があるという。

今度も連れが更に増えでもしたのだろうか。ミストラスは面倒臭そうに伝令の報告を聞いてくるよう部下に命令した。  
「全く、次から次へと何なのだ。今はオーカランドなど、どうでもいい。問題はズッケルアの動向だ」

ミストラスは仰々しく何枚も着込んだ衣を邪魔者扱いするように左右に動いた。

立派に、王としての器を見せるためなのか、派手な衣装である。外見を派手に見せている反面、内面的な自信が薄いように感じられる。要は見栄つ張りなだけだが、ミストラスは自身のことに関して気づいている様子はない。

思っていた反応よりも遙かに違う表情で部下が戻ってきた。  
ミストラスは怪訝な顔をする。

「どうした?」

「はっ、はい。先程の、伝令ですが。バファ村の村長が、殺害されました

「なつなんだとお」

予想だにしなかった報告に、ミストラスは身を乗り出した。

「殺害したのは…」

そうだ、それが知りたい。ミストラスは部下の次の言葉を待った。心の奥底では、ズッケルアの配下の者だと報告が出るのを期待したが、状況からいって有り得ないと思っている。

「オ、オークランド王子です」

信じられないといった表情で部下は報告した。

それと同様の表情をミストラスもしていた。

「本当なのか、それは」

震える声でミストラスは改めて聞いた。

「はい、村人からの証言であります。当然目撃者もいます」

「そうか…」

ミストラスの脳裏に浮かぶ疑問。

ただ一言。『なぜだ?』

それも当たり前である。父親である王が亡くなり、政権への意欲を見せようかと思っていた矢先に、早々にその争いから、いうなれば逃げだしたのがオークランドである。そんな者を相手にしている暇はない。ミストラスの思考もオークランドのことはかすりもしなかつた。

オークランドに対して、恨まれるような、何か害になるようなことはしていないはずである。それは当然、弟のズッケルアも同じであつた。

それが何故、今になつて、そういう行動に出たのか。バファ村はミストラスの土地内だということは知らないわけがない。それを承知で村長を殺害することに意味はあるのか。ミストラスは考える。

「……作戦だったのか…？」

放棄しているのは油断させるためだったのか?ミストラスの頭の中は混乱し始めていた。

真実は。

真実は、オークランドの仕業ではない。

3男王子ズッケルアの配下、サー・ポーが村長を殺害したのだ。村

人達を脅し、嘘の報告をさせていたのだ。当然疑心暗鬼にさせるための策略である。オークランドは利用され、巻き込まれたのだ。

「オークランドは今どこだ？」

「はっ、オークランド王子自身の城へ向かっているのですが、そのためには、この城を通過せねばいけません。このまま何事もなければ、夜遅くにでも城下町へと到着するでしょう」

ミストラスは深呼吸をした。何かを覚悟し、決断した顔つきに変わっていた。

「もう一度聞く。オークランドが村長を殺害したのは間違いないのだな」

「はい、間違いありません。村全員の証言であります」

ミストラスは下を一瞬だけ向き、意を決して命令を出した。

「わかった、オーケランドの身柄を確保しろ」

オーケランド一行の道中。

6人いる割にはとても静かな旅路である。それもそのはず、話す人間が、ボズとオーケランドだけなのだ。ルシアも喋らないわけではないが、口数が多いわけではない。あとのステュー、アリシェ、リサの3人は言葉を知らないのかと思うくらい話さない。

初めは話題も尽きなかつたが所詮は2人だけの会話である。次第に内容も乏しくなつていき、最終的には会話がなくなるということになつた。

しばらく無言が続いた後に、オーケランドは気になつていたことをルシアに聞いた。

「ルシア、君はどうしてこの国にきたんだい？」

「人探しです」

ルシアはすぐに答えた。迷いもなく答えられるということは、自分の行動に誇りをもつてているということである。

「この国にいるのかい？」

「そうですね、どんな人かというのはわからないのですが、この国にいます」

すぐには理解できない言い回しだった。オーランドは耳を疑い聞き返す。

「え？誰かわからないのかい？」

「ええ。僕が探しているのは英雄なんです」

はつきりとした口調で力強く答えたルシアの言葉にオーランドはポカンと口を開けたままだった。英雄？ますます理解できない。

そんなオーランドを横目に、ルシアに対し意外な視線を送っていたのはボズだった。かつて滅亡した故郷ゲルニア国で、命の恩人である白き髪の戦士ハッシュの目的だつた言葉と同じだったからである。

ボズは奇妙な親近感をルシアに抱いていった。

つづく

### 第3部 第2章 疑い その2

「英雄つて…つまり…」

話し難そうにオークランドは言つた。

ルシアは何事もないように涼しい顔で話す。

「はい、英雄です」

言い直すにも、それしか言うことはない。英雄は、英雄なのだ。あまりにも自信を持つて話すルシアにオークランドは少し気圧される感覚を持った。

「…そうか」

これ以上、話すこともないと想いかけた時、横からボズが口を出してきた。

「僕の知り合いにも、英雄を探しにきたって人がいるよ」

「へえ…」

ルシアは優しく微笑んだ。そして、思い出したように言つた。

「もしかして、ボズは、ゲルニア国の人間かい？」

「うん、そーだよ、この中では…僕とアリシェの2人だよ」

オーケランドは驚いた。まさか、滅亡した国の生き残りがここにいたなんて。慌てて問うた。

「え、ゲルニア国は…たしか…」

ボズは少し寂しそうな表情になつた。

「うん、壊されちゃつたんだ。アリシェも…目の前で家族が殺されて、喋らなくなつたんだよ」

「そうだったのか」

オーケランドは思わずアリシェを見た。呆けた表情で、ただ歩いているという人形のような状態だつた。

ステューが黙つて下を向いたのが目に入った。恐らく切り落とされたのであろう、片腕がないのも、もしかしたら、ゲルニア国の滅亡と関係しているのかもしない。

そうなると、もう1人の女のリサが何者なのか余計に気になる。彼女の表情はアリシェよりも酷い。アリシェは言うなれば、ショックのため陥ったものである。だが、リサは違う。生まれながら、それが運命であるかのように、心を閉ざすことが導かれていたかのような感じがするのだ。

「それで…ゲルニア国では見つかったのかい？英雄は」

ルシアは続けて言った。

「うん、探しにきた、ハッシュュつていうお兄ちゃんと、僕達の国の將軍、ファミリストンさんの2人だよ」

「そうか、ではボズは彼らとはぐれてしまったんだね」

「そりなんだよー」

自分の故郷が滅亡したことを子供ながらに気持ちの整理をしたのか、ボズは前向きで元気よく話す。オークランドはそれが羨ましかった。

遠くから馬の駆ける音が聞こえる。地響きがたつ。  
オークランドに不安が過ぎる。ここはまだミストラスの領地なのだ。

数頭の馬が向かってきた。間違いなくミストラスの兵士である。「なんだなんだ」

ボズが焦つて言った。

兵士達は勢いよくオークランドの前で止まった。

仕える人間は違つても、オークランドは王家の、ミストラスの弟だ。無礼があつてはいけない。兵士は馬から降りて深く頭を下げた。

「失礼致します。オークランド王子」「嫌な予感が走る。

「…どうしたのだ」

「バファ村に滞在していたと思いませんが」

「それがどうかしたのか」

「…その際…」

兵士は話し難そうな顔になる。

「村の長を…殺害しましたね」

何を言つたかと思えば訳のわからないことを。

「何を言つてゐる」

オーランドの声に怒りと驚きが混じつていた。  
ルシアも、ボズも、そしてステューですら、顔を見上げる。そんな事実はないからだ。

「我が主、ミストラス様から連行するようひととの命令です」

「待て」

「どうか抵抗なさりずに城へ…」

「待てと言つてる！」

怒鳴り声になつていた。兵士の言葉は詰まる。

「もう一度言つてくれ」

オーランドは冷静に落ち着かせながら言つた。

兵士は一息ついて、もう一度口を開いた。

「はつ、オーランド様がご滞在されていたバファ村の長が殺害されました。村人の全員の証言で、犯人は…オーランド様だとの報告です」

「そんなどはずはない…！」

叫んだのはボズだった。

「だつて、僕たち一緒だつたじやないか、そんなことはしてないし、

村長さんは元気だった」

ボズはルシアを見る。

ルシアは何も言わずに頷いた。

「申し訳ありません。そういう話は城でお聞きします」

兵士は聞く耳を持つていらない。ミストラスの命令を遂行する」とが最優先事項なのだ。

「待つんだ、話を聞いてくれないか」

「…連行しろ」

「待つ…」

あつという間に6人は捕まつた。

オークランドに手を出せるはずもなく、ルシア、アリシェ、ステューリサに至っては抵抗すらなく、手足をバタつかせて、もがいていたのはボズくらいだった。

そのまま、ミストラスが待つ城へ連れていかれた。

物陰に隠れて、一部始終を見ていた者がいる。

3男王子ズッケルアの配下、サー・ポー。

この男が、バファア村の長を殺害した犯人。ミストラスを混乱させるためにやつたのだ。

「予定通り、オークランド王子がとつ捕まつたね。じゃつ、次はズッケルア様の出番だな」

サー・ポーは笑いながら後を追つた。

つづく

### 第3部 第2章 疑い その3

鉄格子のついた馬車にオークランド達は乗せられた。行き先は長男王子ミストラスが待つ城。

あらぬ疑いをかけられた一行。それがズッケルアの策略だとは知らない。一刻でも早く容疑が晴れることを祈るしかない。

「酷いよ、オークランドさん何もしてないのに」

「恐らく、何か不穏な動きがあるようだ」

オークランドは言った。

それを聞いてルシアも続けて喋る。

「そうですね、僕たちが出発した時には間違いなく村長は生きていました。それが死んだという報告、そして村人全員の証言が逃れようもないこと。誰かが殺害して、村人を脅していることは明白です」「そんなの…、そんなこと、誰がするんだよ」

ボズの問いに、オークランドは一人で思う。兄ミストラスか弟ズッケルアの2人しかいない。そこまでして権力が欲しいのか。オークランドは悔しくて拳を握り締めた。

しばらく揺られて、本来の目的地である城に到着した。

まさかこんな形で来ることになるとは思いもよらなかつた。

城に辿り着くまでに城下町を通り過ぎたが、町人は驚きの眼差しだつた。軽蔑、同情、悲しみ、中には罵声を浴びせる者もいた。やはりここはミストラスの城、町の人間もミストラスに洗脳されたかのように、まるで神の如く崇めている。

そんな彼らから見るとオークランドなど異教徒のようなものなのだろう。

その視線に耐え、ようやく着いた。

「王子はこちらへ

迎えにあがつた1人の兵士が案内をする。オークランドを別室へと連れて行くためだ。

「断る、僕は、彼らと一緒にいる」

オークランドはルシア達を見ながら言った。

「それはミストラス様からの許可は得ていません」

「僕の命令だ」

「申し訳ありません」

ここでは、もう、王子という身分などは関係ない。権力争いの今となつては、服従すべきは自分の主のみである。

「オークランドさん、僕たちは大丈夫です。ご心配なさらずに」ルシアは優しく言った。こんな状況でも不安を見せないその姿にオークランドは尊敬の念を抱いた。

「…すまない。必ずなんとかする」

オークランドは兵士に連れられてその場から消えた。

残つたルシア達5人も、地下の牢屋に閉じ込められてしまった。

城内。

ミストラスは、部下の報告を聞いていた。

オークランドを捕らえたことを。

明日の朝に緊急会議が開かれる。オークランドを前にし、バファ村との関わり、真実を問いただすためである。

ミストラスは未だに事件そのものを疑っていた。オークランドは弟である。幼い頃から一緒だった。性格をよくわかっている。人を殺せるような人間ではない。そんな事を犯す者は…ズッケルアしか思いつかない。

野心という欲望に身を包んだ男、笑顔で国で一番になると談笑していた頃が懐かしい。あれは冗談ではない、本気だったのだ。牙をむいた、もう1人の弟に恐怖すら抱く。

扉が突如開かれた。

ミストラスは驚いて振り向く。

そこには。

道化師と見間違える軽装、足に羽でもついてるかのような足取りで、男が入ってきた。

明るい服装には似合わない、一目で邪悪だと判断させるような鋭い視線。

ルキボル国3男王子、野心家のズッケルアだつた。

「やあ、ミストラス、元氣かい？」

人を食つた言い方にミストラスは不快感を覚える。10代とは思えない。この男には兄弟という概念はない。兄に對して呼び捨てを始めてもう何年になるだろうか。

「何したきた、ズッケルア、よくも、来ることができたな！」

ズッケルアは怒鳴るミストラスの顔に手の平を出して制した。

「そりゃあ、来るさ、大事な大事な、お兄さんのオークランドが、人を殺したんだからねえ」

「…っ！」

あまりにも早い情報にミストラスは言葉を失つた。いや、情報と  
いうか、首謀者、張本人ならば、情報などいらないではないか。ミ  
ストラスの疑いは混乱を極める。

「それで。未来の国王になる人の、ご立派な裁きを見学にきたんですよ」

皮肉たっぷりにズッケルアは言った。昔から弱味を見つけて突くのが得意だった。

「お前には関係ない、これは俺とオークランドの問題だ」

「それはないでしょ。王家の人都が殺人を犯したんですよ？これ  
は國を巻き込んだ大問題ですよ」

ズッケルアは両手を広げながら近くの椅子に座り、脚を組む。

「どうするつもりですか？ミストラス。オークランドの処罰は？」

「…まずは明日の会議でその真偽の程を探る。罰はその後だ」

ズッケルアは微かな笑みを浮かべる。

「そうですか、そうですか。いや結構。では、その眞偽にもう一つ  
付け加えてもよろしいですか？」

「なんだ？！」

もつたいたいぶつた喋りに嫌気がさす。自然と声が大きくなっていた。  
「オーランドが持つていると、噂の…」

ミストラスの顔色を見ながらズッケルアは話す。

次に出た言葉は、ミストラスを心の底から驚かせた言葉だった。

「…父上の遺言状のことを」

つづく

朝。

オークランドが捕らえられてから1日が経つた。いよいよ、真相を確かめるための会議が行われる。

朝早くから城内は忙しく人が動いていた。

別室にいたオークランドにお呼びの声が掛かる。

ボズやルシア達と違つて牢屋ではない。部屋だ。この辺の配慮は、やはり王家人間だからだろう。

「オークランド様、どうぞこちらへ」

言われるがままにオークランドは進んだ。頭の中は、ルシア達の安否でいっぱいだった。

長く赤い絨毯がひかれている廊下を歩く、ようやく違和感のある光が射す。

廊下を抜けると、広い講堂に出た。ミストラスの城自慢の『裁きの間』である。

全ての進行を司るのは田の前にいるミストラス。

右隣には、兵士、よく見るとバファ村の人人が座つている。これは証人の席なのか。

左隣には、椅子もないただの空間であった。そこを囲うように柵が建てられている。

そして、その全て覆うように傍聴席があつた。隙間がないくらいに座っている人間達は、貴族であつたり、町人であつたり、村人であつたりした。

オークランド行為の真実を確かめにきているのだ。

傍聴席の中に、弟のズッケルアが混じつているのをオークランドは田ざとく見つけた。何かの陰謀を感じる。しかしそのおかげで、今はまだ冷静を保つて自分の自分を確認することができた。

講堂内が静寂に包まれる。

ミストラスはその場を確認して声を出した。小さな囁きですら確実に響いてきそうだ。

「裁きの間である。人は生まれて必ず何かの罪を犯す。その罪を裁き洗い流す場である。どんなに偽りを言おうとも、太陽神は眞実のみを照らすであらう。全ては神の意志である。さあ、罪深き裁かれる者よ、前へ」

オークランドが絶対に犯人だと言つてゐるような宣誓で幕を開けた。これは、会議でもなんでもない。まさに一方的な罪人を作り出すだけの裁判だ。

オークランドはゆっくりと前へ進み出た。

「裁かれる者よ、名を名乗れ」

「ルキシー・ボル・フォン・オークランド」

静かに言つた。まだ落ち着いているのが認識できる。

「お前は、我がルキボル国忠実なる村、バファア村の長を、殺害した罪でこの場にいる。それに間違はないいか?」

「いいえ」

ミストラスの問いかけに返答した。講堂内がざわつく。そんな言葉は予定通りかのようにミストラスは続けた。

「それは、神を偽つてゐるぞ、オークランド。なぜなら、眞実を見ている証人がいるのだ」

右側に指示を出す。

座っていたバファア村の村人が立ち上がり、震えるように喋りだした。

「わ・わたしは見ました。ま・まちがいなく、我々の目の前で村長を切り殺したのは…」

躊躇つてゐるようにオークランドの耳には映る。ゴクリと生唾を飲み込む音が聞こえてきた。

「…オ…オーカランド…王子です。これは我々バファア村全員の証言

です」

最後は一気に吐き出した。村人はやり遂げた表情で椅子に崩れた。  
「**IJ**の真実の声を聞いてお前の意見を聞こうではないか」

ミストラスが言った。

オークランドは強い意志を持つてミストラスを見た。

「何度も言います。僕は無実です。何もやってはいない。何を言わ  
れても僕の言っていることが真実です」

更に大きくざわつく。

ミストラスはがっくりとうな垂れた。

「うつ…うつ…なんてことだ。ここに罪を償うことすらも拒否す  
る者がいます。それが我がルキボル国の血を継いでいる者だとは…  
おおつ、神よ、お許し下さい」

そう言つてから、ミストラスはもう一度、右側の証人台に指示を  
出す。

今度は兵士が出てきた。オークランド達を捕らえに来た時にいた  
兵士だ。

兵士も村人と同じような表情のまま言わされているように喋りだ  
した。

「…我々がオーカランド様に真相を聞いたところ、非常に取り乱し  
て、その場からすぐにでも離れようとしました。剣を抜き、我々を  
威圧し、なんとか取り押さえた次第です」

オーカランドは目を丸くした。ありもしない証言に動搖を隠せない。

「何を言つてるんだ」

兵士は後ろに下がり、再びミストラスが話す。

「では、罪深き者と共に行動していた裁かれる者達を、ここに  
そう言つと、左側の柵に囲まれた空間に、ルシア、ボズ、アリシ  
エ、リサ、ステューの5人が現われた。

「オーカランドさん」

ボズが叫んだ。虚しく響く。

ルシアは相変わらず冷静に、リサは呆けて、アリシエとステュー  
は無言で辺りを見回している。

「彼らもまた裁かれる者達です。君らに問う。今までの話を聞いて  
いただろ？ 真実を話せ……」

ミストラスが話し終わる前にボズが大きな声で言った。

「そんなわけないだろ！ オークランドさんは無実だ。お前ら無茶苦  
茶嘘ばっかり言いやがって！」

ひゅつ。

捲くしたてるボズの頬を横切った風。

ボズの目にオークランドの驚いた顔が入る。

ゆっくりと首が動く。振り返る。

ステューも同じ方向を見ていた。

ミストラスの邪悪な瞳が凝視していた。

ボズの頬を横切ったのは。

1本の矢だった。

その矢は。

無情にも『彼』に刺さった。

オークランドの悲痛な叫びが講堂を駆け抜けた。

「ルシアーアアアー！！！」

つづく

### 第3部 第2章 疑い その5

「どうつ…。

黒い衣を身に纏つた少年は、胸に矢を刺したまま、倒れた。

「ルシアさん！」

「ルシア！！」

ボズとオークランドの叫び声。同時にミストラスを睨みつける。その瞳にはかつてない怒りの炎が燃え広がっていた。

「どういうことだ！兄上！」

ミストラスは冷静に見下した視線をオークランドに投げかけた。どこか憐れみが浮き出ている。

「彼らは裁かれる者。そして、神に偽りを示した者。この矢は、神の『意志である』

怒鳴りかけた時、動搖したボズがルシアに刺さっている矢を抜こうと手をかけた。

「やめろっ！ボズ！抜いちゃ駄目だ」

「えつ…」

気づいた時には遅かった。ボズは矢を勢いよく引き抜いた。血が溢れ出した。刺さった矢などはむやみに引き抜いてはならない。戦場や医療では常識的なことを、当たり前ではあるが、ボズにはその知識がなかつた。

「がふつ…」

ルシアの口から血が出る。矢が肺に達していたのかもしれない。治療が必要だ。

「うわあっ！ごめんなさい！大丈夫？ルシアさん！ど・どうしたらいいんだ！」

ボズが目に涙を溜めて大声を上げるが、周りの観衆達は冷ややかな態度を崩さない。それはミストラスへの忠誠か、それとも恐怖か。このままだと、ボズだけだと、ルシアは手遅れになる。助けなけ

れば。

ここは医療大国だ。オークランドは医師の知識はある。今ならルシアを助けることができる。

「兄上、治療を。治療をさせてください！」

悲痛の願い。オークランドはミストラスに言つた。

その言葉を待つていたかのよつて、ミストラスは口を開いた。

「真実を述べよ

「し・真実？！」

「そうだ、オークランドよ。潔く罪を認める。それが真実」  
なんという卑怯な選択であろうか。やつてもないことをやつたと認めないとルシアを見捨てる事になる。かといって、殺人は大罪だ。オークランドには相応の罰が用意されるであろう。  
だが、オークランドの脳裏には1点、ただ1点のことしかなかつた。そのためには自分がどうなろうが構わない。

「僕がやりました」

講堂が騒ぎ始めた。こつもあつさりと罪を認めたことに驚きを隠せない。それが真実だろうが、真実じやなかろうが、1人の命を救うために、オークランドは自分を捨てたのだ。

「何を言つんだ、オーケランドさん」

ボズがルシアの傷口を必死で押さえている。流れ出る血を止めようと手の平が真っ赤に染まっている。

「バファア村の長を殺害したのは…」

「駄目だ！ オーケランドさん！」

心の奥から出してくれているボズの声が温かい。オーケランドは決意を込めた。

「この僕です」

証人席の兵士と村人が顔色悪く下を向いたのが見えた。奥で座っているズツケルアのニヤけた顔が想像出来る。

「神の前で認めるのだな？ 自分の罪を」

「…認める」

言つが否やオークランドは走り出した。ルシアの元へ。

だが。

2人の兵士がルシア達へ続く道を遮った。

「なつ」

話が違つとオークランドはミストラスの方へ振り返る。

「もう一つ。眞実を教えてもらおうか」

「あるわけないだろう。早く治療に行かせてくれ」

「いいや、ある。我が父、亡き国王の遺言状を持つてゐるのは本當か？」

戦慄が身体を駆け巡る。誰も知るはずのない情報。オークランドは言葉を失つた。その態度が伝えるのは、遺言状の話は眞実だとうことを認めていた。

「あるのだな？なぜそれを開示しなかつた。それが神への反逆だといふことがわからぬのか」

オークランドは迷わず封を開けていない1通の手紙…遺言状を兵士に差し出した。

「本当にあつたのか」「国王様の遺言状」「後継者の名前が書いてあるのか」

次々に囁かれる言葉を無視して、オークランドは言った。

「中身は見ていないから内容がわからない。…もうこいだろう。通してくれ」

遠くから見る限り、ルシアの血が止まつてゐるよつには見えない。ボズが一生懸命押さえてゐるのがやつとだ。オークランドに焦りが出る。

ミストラスは兵士から手渡された遺言状を見ながら考え込んだ。

「…無理だな」

ミストラスの声。

「えつ？」

オークランドの頭の中が真っ白になつていぐ。

「そつはいつても殺人者達の命を救うということは許可できないな。

それではバファア村の長の魂が安らかに眠ることが出来ない」  
ガタガタと身体が震える。これが怒りからだということは誰の目にも明らかだ。

「卑怯だ！！兄上！！…いや…ミストラス…！」

「卑怯ではない。これが神の意志なのだ」

ミストラスは両手を広げる。

「血が…血が止まらないっ」

ボズの雄叫びのような声。

「ルシア…！」

オークランドは兵を押しのけて進もうとするが、強靭な肉体の兵士2人は怯まず壁を作り上げている。

突破できない。ルシアの元に行くことが出来ない。治療が出来ない。死ぬ。ルシアが死んでしまう。

「くそおおおー！」

「仕方ないことだ。諦めろ、オークランド。これは神の意志。太陽神、アル＝ヴァースの意志なのだ」

ミストラスが勝ち誇った表情でオークランド達を見下ろした。瞬間。

講堂にいる全ての人間が凍りつくほどの声が響いた。

『私の意志は、そんな行為を許しはしない』

沈黙。静まりかかる。その威圧感ある声に全員が反応していた。  
『私には無実の者を裁くことは出来ない』

発する声の位置を確認する。全員が、兵士達が、ズッケルアが、ミストラスが、オークランドが、その方向を見た。

『私に真実を教えるのであれば』

立ち上がった少年を、ボズは呆気に取られて見上げていた。ステューもその姿を眺めていた。アリシエ、リサでさえ、見つめていた。立ち上がり、声を発している者を。声の主を。黒衣を纏ったその少年を。

『その者は無実である』

オーランドを指差して、立ち上がった少年は言った。

「ルシアさん…？」

ボズが静かに呟いた。

（第2章 疑い 終） 第3章につづく

講堂内は静まり返っていた。先程のざわつきすらも聞こえない。起き上がるはずのない者が、起き上がり、しかも別人のようになってしまっているのだ。驚きと共に恐怖すらしたであろう。それはミストラスも同様だった。

弟オークランドの連れだつたルシアと呼ばれていた少年を矢で射抜いた。もちろん見せしめのために殺すつもりだった。急所は外れたとはいえ、簡単に起き上がるような傷ではなかつた。だが。

ここからの展開はミストラスの予想を大きく反することになる。ルシアは息絶えるどころか立ち上がつた。それも簡単に。ありえない。立ち上がれるような状態ではない。それは、オークランドや隣にいた子供のボズの表情で読み取れる。それだけではなかつた。

ルシアは口を開き、言葉を発したのだが、明らかに別人の口調、別人の声だった。

聞く者全ての動きを無理矢理停止させるような絶対的な意志を感じさせる声。

その言葉も、ミストラスが太陽神を語つたことを否定する内容。ルシア自分自身が、太陽神のように。

「ル・ルシアさん? どうしたの?」

ボズがやつとの思いで喋つた。

講堂の隅々まで声が伝わる。ボズはここにいる全員の気持ちを代弁していた。

『質問する』

ルシアは…。別人となつたルシアは、ボズの言葉を無視して、ミ

ストラスを見据えて話しかけた。

ミストラスは一瞬後ろに下がりかけた。その瞳に魂が吸い込まれそうだったからだ。

『私が、いつ、どこで、その者への裁きを決めたのだ』

ルシアはオークランドを見た。

ミストラスの身体は緊張の汗でいっぱいである。裁きを決めた理由などない。根拠などない。あるとすれば、村人の証言だけだ。それも村人の態度を見ていればわかる。眞実、オークランドは無実なのであるう。

ズッケルアの手の上で遊ばれていたのだ。どこからか仕入れてきた、遺言状をオークランドから奪うために、ミストラスを利用したのだ。

そんなことを告白するわけにもいかず、ミストラスは後に引けない状況に追いやられていた。

「な・何を言うか。バファア村の者と我が兵士の証言が全ての事実を物語ついているではないか」

ルシアの声が、素早く返す。

『質問と違う答えた』

「うつ……」

そう。質問は「私」がつまり「太陽神」がオークランドを有罪にしたのかということだ。質問に対しても証言は関係ない。

言葉に詰まりかけたミストラスだったが、負けずに返す。

「神、太陽神アルニーヴァースからのご意志を受け取ったのだ、オークランドが罪人だということを」

『私はそんな結論など出してはいけない』

「黙れ！貴様は一体何者だ！？自分が太陽神を騙り、貴様が神だとでも言いたいのか」

ミストラスは叫んだ。

ボズはルシアを見上げた。

オークランドは次の言葉を待つ。：全員が待っていた。ルシアの

返す言葉を。

ルシアは何者にも揺るぐことがない強い意志を持つて言った。

『私は、太陽神、アルニヴァースである』

ルシアの口からはつきりと出た。自分は神であると。

「…なつ…なつ…」

顔を真っ赤にしたミストラスは講堂全体を眺め回す。全員が呆れたような、どうこう態度をとつていいのかわからないようだつた。目の前で、「神だ」と名乗られて、簡単に信じる者がどこにいるのだろうか。真つ先に思いつくのは詐欺まがいの偽善者だ。人々の脳裏には神などは、結局は空想の世界の物だとの認識が強いことを浮き彫りにしていた。

神を崇めてるのは昔からの風習のみで、後はミストラスのような野望に使うことがほとんどなのだろう。

「ふざけるな！いいか貴様、何を言つてはいるのかわかつてはいるのか！偉大な太陽神の名を貴様は騙つてはいるのだぞ！」

ミストラスは手を大きく振りながら怒鳴る。手を振つたのは、狙撃手にもう一度ルシアに矢を放つようとの合図であつた。

『騙るもなにも、本人がそう言つてゐるのだ』

「ま・まだいうか！」

ひゅつ。

矢が再び放たれた。

その音に素早く反応したのはオークランドだつた。

「ルシア！危な…」

ルシアの身体が一瞬光つた。すると、矢は、ルシアの目の前で跡形もなく消え去つた。

おおつ…という觀衆の声。

かつてない恐怖がミストラスの全身を突き抜けた。雷にでもうたれたような衝撃だつた。

思いが巡る。

まさか。そんな。この世にそんなことが。本物？いや馬鹿な。

考えれば考えるほど深みにハマる。

ルシアはオークランドを見つめた。オークランドもルシアのその視線に気がついた。

『脱出しましょう』

「えっ？」

そういうとルシアは目を閉じ、瞑想に入った。

「とつ、捕らえろ！早く！何をしている！捕まえろ！」

ミストラスの無茶苦茶な命令が出される。彼らは既に捕らえられているからこの場にいるのだ。ミストラスは隠しようがないほど動揺している。

「いや、殺せ、殺すんだ、直ちに実行せよ」

突然の処刑命令に兵士達は、お互いが顔を見合させながら困惑していた。

その間に、ルシアの瞑想が終わった。ルシアの目が開かれた。

同時に、講堂内に亀裂がはしり、崩れ始めた。

つづく

ミストラスは物心ついたときから、次期国王だと言われ、王としての知識や礼儀を叩き込まれて育ってきた。まともに遊ぶこともできず、ただただ勉学に励んでいく毎日、外ではオークランドやズッケルアの2人の弟がじゅれ合いながら走り回っている。ミストラスにはそんな息抜きなどは与えられず、父である国王の期待を受け、裏切つては駄目だと精一杯してきたつもりだった。

そんな父の期待が一変したのはある出来事が原因だった。

医療大国ルキボルの王家はその血筋から、回復の魔法を扱えることができる。医療の知識のほかに、傷口を治したりと魔法が使えるのだ。回復魔法が、王家の血という見方になり、出来て当たり前という風習になつている。

ミストラスは、その肝心の魔法が扱えなかつた。どんなに努力しても魔法を使えることができなかつたのだ。

悪い噂は早く伝わるもので、このことは国中に知れ渡り、小さな小さな不安と不信がでるよくなつた。

国民が思うのは仕方ない。魔法を使えない者はその血筋ではないのだということが昔から伝承されていたのだから。

しかし、間違いなくミストラスは王家の者である。それは疑いようがない。王妃が産んだ長男なのだ。

それを、父王は疑つた。本当に自分の血筋の者なのか？ 身内からの疑いの眼に当時のミストラスは相当にショックを受けたことだろう。

運が悪いことに、オークランドとズッケルアは魔法をいとも簡単に扱つた。父王の期待は、この2人に乗り変わつた。

この出来事はミストラスの心の奥に黒い負の憎悪を忍ばせることになる。

父王から、氣にもとめられなくなつて数年後。

突然、王が急死してしまった。

その時、ミストラスの心の奥底に着実に芽生え、成長していた黒い憎悪が一気に目覚めることになった。

瞬く間に自分の地盤を確立し、次期国王になるべく準備を始めたのだ。

次男のオークランドは元々欲がないような人間だったので、自ら国王への道を辞退した。

問題は3男のズッケルアだつた。まだミストラスが期待された頃であれば何も問題はなかつたのだろうが、父の期待が移つてから、ズッケルアの野望が膨れ上がつた。自分こそがルキボル国の王となるべき人間に値する。ズッケルアはミストラスの次期王宣言に納得いかず、現在まで続く霸権争いへと進んでいった。

そこで、眼中にもなかつたオークランドが浮上してきた。ズッケルアにそそのかされてオークランドを犯人仕立て上げたのだ。もちろん、オークランドが犯人ではないということはわかっている。ミストラスの気になつたのはオークランドが持つている遺言状だったのだ。

この遺言状が本当に父の物ならば、そこにミストラスの名がないのであれば、どう足搔いても勝ち目はない。

方法は一つ。遺言状を偽物とし、破棄するしかない。これがミストラスの計画だった。

だが。

その計画が音を立てて崩れしていく。

たつた1人の少年によつて。矢で射抜き、息絶えるはずの少年によつて。自分は神だとつてのけた少年によつて。ミストラスの思いは崩れ去る。

今この崩れゆく講堂のように。

「うわあああ！」

人々の悲鳴が響く。講堂にヒビが入り、崩れ、上から壁が落ちてくる。混乱したこの状況ではもはやルシアやオーランドを殺害せよ、などと出来るわけがない。

出来ることは、逃がさないように再度捕らえるだけだ。

ミストラスはズッケルアの方をみた。既にズッケルアはその場にはいなかつた。素早く逃げたのだ。

「くつ…おい、貴様、オーランドを、あいつらを捕りえよー。」

ミストラスは近くにいた兵士に言つた。

「むつ無理です。あいつは神です。私にはできません」

「何を言つてゐる！そんなわけないだらう」

「ですが、現に、この状態です。それはあの男の力です」

そういつて兵士はミストラスを振り切つて逃げた。

「くつ…くつ…オーランドオオオー！」

ミストラスは叫んだ。その声は地響きをたてて崩れる音で搔き消された。

「オーランドさん！」

ボズが手を差し出した。

その手をしつかりと握り、オーランドはボス達の元へあがつた。

「ありがとう、ボズ」

礼を言つてすぐにオーランドは動いた。

アリシエとリサの手をとつた。

「さあ、みんな、ルシアの言つとおりだ。ここから脱出しつ

『いえ。まだです』

ルシアが静かに言つた。

「え？」

『あの遺言状が必要ではないのですか？』

「…あ」

内容はどうであれ、父に託された遺言状、この状況ならば、取り

返した方が良い。だが遺言状を持つミストラスは遙か遠くにいる。  
取りにいってもこのまま講堂の崩壊で生き埋めになるだろう。

「駄目だ。諦めるしかない。今は君達の安全が大事だ」

オーランドは自分に言い聞かせるように言った。

「俺が行くよ」

突然、ステューが言葉を発した。今の今まで何も喋らなかつた子

供が。オーランドは驚いた。

「俺の…パール族の能力でなら…なんとかなる

「パ・パール族なのか？」

オーランドは更に驚いた。

つづく

ボズと一緒に旅をしていたもう1人の男の子、ステューはパール族の人間だった。

パール族とは、魔法の国ニゴラスで生まれた一族であり、差別され続けた一族である。

身体能力の異常な高さ、腕などの一部を刃に変化させることができの能力を持つていて、忌み嫌われ、のけ者にされていた。それでも国を想う気持ちは同じで、先の大戦、「ドリムオン作戦」の勃発の際に、一族を挙げて戦争に参加した。彼らの活躍は随分の助けになつたのだが、その力を利用する者が現われた。

それが、後にゲルニア国の王、セラミスだった。ニゴラス出身であつたセラミスはパール族の力に目をつけ、なんとか自分達のモノにしようと研究を始めた。セラミスは実験台として、生贊として、次々とパール族の人間をさらつては殺していった。

国を追われたセラミスは、遙か北の孤島でゲルニア国として立ち上げた。

それから数年、セラミスに恨みを持つパール族は復讐の鬼となつて現わされた。

僅か3人のパール族によつてゲルニア国は壊滅状態になつた。その3人のうち、1人がこのステューだった。

目にも止まらぬ速さで動くこと。これがステューの身体能力。ステューには右腕がない。その戦いで失つた。失つたのは腕だけではなく、兄姉だった残り2人のパール族も死んだ。ステューはゲルニア国で生き残つたパール族なのだ。

ゲルニア国の人間であるボズから見れば、ステューは仇である。家族も殺されたのだ。許せるはずがない。

だが、ここで恨みのため、ステューを殺せば、自分も同じではないか。ボズは悩み、ステューと一緒に行動することを選んだのだ。

幸い、ステューも兄姉を失った悲しみで、無口になり、心を開こうとはしなかつた。ボズに危害を加えることなく、素直に何も言わずに付いてきている。

そんなステューが、喋つた。

それも、自分のためではなく、誰かのために。

「……しかし」

オークランドはステューの申し出に難色をあらわにした。  
子供に危険なことをさせるわけにはいかない。真っ先に頭に思い描いたことがあつたりと消えてしまう。

止める前に、ステューは既に、行動していた。

「あつ……」

ステューは軽く地面を蹴ると、ぽんつ、と飛んだ。次の瞬間ステューの姿が見えなくなつた。

「ステューって、すごい速く動けるんだ」

驚いているオークランドの隣で自慢気にボズが言った。  
「これが、パール族の能力……」

オーケランドは呟いた。

「くつそお、ビニにいつたあ、オーケランドー！」

崩れる講堂内で、部下の兵士に引かれながらミストラスは叫んでいた。

危険だからと何度も言つても、その場から離れようとしないミストラスを兵士達は数人がかりで引きずつてゐる。

手にはオーケランドから取り上げた遺言状がある。

早く内容を確認しなければ、次期国王が自分であれば、高々とこれを揚げて宣言すればよい。もし自分の名前がないのであれば、破棄してしまえばいいのだ。

「離せつ」

ミストラスは兵士を振りほどき、遺言状に手をかけた。

ぴつ。

風を切る音がしたかと思うと遺言状はミストラスの手にはなかつた。

「…なんだと」

目の前に右腕のない子供が立っていた。オークランドと一緒にいた小僧である。

その男の子の左手にはなんと遺言状があつた。

「おつ…お前…」

「…これは、あの人間の物だ。返してもらひ」

それだけ言うとステューは素早く去つた。

ミストラスの身体はガタガタと震えだした。

「ぐつ…攻め込むぞ、オークランド！まずは貴様の城へ、最大数の兵を使つて滅ぼしてやる！覚悟しろ！オークランドオオオオオオオ！」

ミストラスの声に憎悪が乗り移り、悪魔の響きとなつて講堂内を駆け巡つた。

オーケランド達6人は混乱に乗じて講堂から抜け出した。

ステューが帰つてきてすぐに脱出し、目指すはオーケランドの城。ボズはアリシェの手を引き、オーケランドはルシアとリサの2人の手を引いていた。ステューは大事に奪い取つた遺言状を持つて走つていた。

「追つ手…こないかな？」

心配そうにボズが言った。

「…大丈夫だと思つけど…」

オーケランドが続けて言う。ルシアが何も喋らないことに不安を感じる。

あと少しで森に入る。そうなれば、追っ手を撒くことができるはずだ。

ルシアの変貌には驚かされる。後でゆっくりと話したい。…といつてもオークランドにはある程度の想像がついている。

：2重人格。

本当にルシアの中に太陽神がいるのであれば、それはルシアの身体を借りて、のり移っているというべきか。

人格が替わったとしか表現のしようがない。ルシアが太陽神へと替わったのだ。

今、一緒に逃げてる、その本人はルシアなのか、それとも太陽神と名乗っているルシアなのか、オークランドやボズにはわかるわけがなかつた。

「…駄目だ。くる」

ステューが小さな声で言つた。

「えつ」

オークランドは振り返る。

そこには後ろから迫ってくる数頭の馬。ミストラスの追っ手だつた。

つづく

馬の速さと、走る速さ、最初から比べることすら問題外である。瞬く間にオークランド達は追いつかれた。

ルシアの異常な変貌と、偶然が引き起こしたのか、謎の講堂破壊。恐れる兵士もいれば、恐れるに足らずと意気揚々と討伐にくる兵士もいる。

「うわあ、オークランドさん、どうじよひ…」

「話し合いで解決は…」

「無理だよう！」

ボズとの会話を交わしたあとにオークランドは剣を抜く。ボズも続いて護身用に持っていた短剣を出した。

「…パール族の君、ステュー、君も戦えるか？」

話しかけられたステューはコクリと頷くと片腕を刃に変化させていった。

今、一番頼りになるのは、このステューだけだ。あれだけの動きならば兵士を翻弄できるだろう。だが、さっきの動きで疲れたのか、ステューは苦しそうに息をしている。そうなると戦力にはならないかもしねれない。

…といっても本当に恐いのは…オークランドはルシアを見た。先程の破壊力であるならば、こんな状況などあつという間に逃げ切れるのだが、実際ルシアの正体が掴めないので戦略にも入れられないと。

「…申し訳ありませんが、オークランド様」

兵士の1人が剣を抜いた。残りの4人の兵士も同様に剣を抜く。兵士の声は何の感情もない冷たい声に聞こえた。

「ミストラス様の命令です。大人しく捕まつてください」「できるわけないだろ…」

ボズが叫んだ。

「逆らうよつであれば、仕方なしに処刑も命令に出でています」「あのような、一方的で理不尽な審議をかけられておいて、大人しく捕まると思うか?」

力強くオークランドは言つた。

兵士達はお互いの顔を見合わせながら言つ。剣を握る手が動く。「では…返答は…」

「断る」

「仕方ありません。全員死んでもらいます」

5人の兵士は戦闘体制に入つた。

「くつ…」

オークランドはリサ、アリシエ、ルシアを守りながら少しずつ下がつていく。

状況は絶対絶命である。たとえ戦つたとしても、1・2人傷つけることくらいはできるだろうが、結局はここで全滅してしまつ。

オークランドは、ルシアを見る。

「…」

ルシアはアリシエのように呆けて何を考えているのかわからない。

今は、ルシアなのか、それとも、太陽神のルシアなのか。

兵士の1人が剣を掲げた。

「かかれ！」

そして、命令を下した。

ぱあん。

何かが破裂した音が大きく鳴つた。

オークランド、兵士、ここにいる全員は起つたことが理解できなかつた。

1人の兵士の上半身が跡形もなく消え去つていたのだ。後に残つたのはフラフラと崩れ落ちた下半身のみだつた。

「うつうわあああああ」

兵士達とボズの叫び声が響く。

「おっ落ち着け、落ち着くんだ」

必死で体制を立て直そつと兵士が言つ。  
ぱあん。

だが、その兵士も破裂音と共に、身体が消え去つていた。

「ちよつ…なつなんだああああ」

残された3人の兵士は混乱するばかりで、剣をオークランド達に構えてはいるが、完全に逃げ腰になつていた。

「…う」

オークランドも何が起こつたのか、全くわからなかつた。

【くつくつ、全く、何年経つても、相変わらず、弱つちい生き物だ  
な、人間は】

汚い言葉。悪を感じる。その声に殺意も感じる。

声はオークランドの後ろから聞こえた。

男の声。

面白がつて、ふざけていよいよつな、人を殺すことを生き甲斐にしている、楽しみにしている口調。

まさか。そんな。有り得ない。オークランドは振り返る。

オーケランドの後ろにいる男は、1人しかいない。

【あ?なんだ、てめー、俺様の顔が珍しいのか?】

「…う…嘘…」

ボズの驚愕の声。

「…ル…ルシア…?」

オーケランドは言葉を搾り出した。

悪意の声の主は。

ルシアだった。

【へえ、俺様、ルシアって名前かよ。…まあ、いいさ、ルシアで】

混乱する。そんなことがあるのだろうか。

初めて出会い、一緒に旅をしながら、英雄を探しているルシアという存在と。

ミストラスの審議で、自分は太陽神アル＝ヴァースだと宣言するルシアという存在と。

更に、今この場にいる、『もう1人』のルシアの存在。ルシアは2重人格ではない。3重人格なのだ。

「そ…そんな」

驚いているオークランド達の隙を突いて3人の兵士は逃げだした。  
【おっ、あいつら、逃げるぜ、なあ、おい、あいつら敵か？俺様が  
退治してやるよ】

そう言つと、悪のルシアは兵士を追いかけた。

【ひやつほおお～！人間狩りだあ～～！】

「なつ…まつ待て！！」

オークランドの静止は遅すぎた。

【俺様を誰だと思つてる！絶望の神、メンデルゴス様だぞ～～～！】  
「なつなんだと！？」

つづく

世界の神話。

このバロゲニアガルドという世界は、太陽の神、アルニヴァースが創造した。

それまでは絶望の神、メンデルゴスの絶大なる統治の中、人々を恐怖に陥れていた。

太陽神は絶望神を封印すべく立ちはだかつた。世にいう伝説の「太陽聖戦」

「太陽」となつてているのは、勝者が太陽神だったからである。

太陽神は人間界の7人の英雄達と一緒に、絶望神を打ち倒し、封印した。絶望神はいつかくるであろう復活の叫びを発しながら消え去つた。

世界に平和が戻り、現在に至るわけなのだが…。

オークランドの目の前に信じがたい出来事が表れていた。

何度も子供の頃聞かされていた伝説、神話、神々。その伝説の神が、今、現実にいるのだ。人の身体を使って。それも1つの身体に2つの神が存在しているのだ。

ルシア。まだ10代の少年。オークランドが自国へ戻る際に会つた少年。澄んだ綺麗な瞳の持ち主で、英雄を探すのが目的だった。その純粹な少年の中に、太陽神アルニヴァースの意識が入つていた。改めて思えば、英雄を探す、という目的は太陽神の目的ではないのだろうか。かつて一緒に戦つた7人の英雄。この時代の英雄を7人、探すつもりなのではとオークランドは思った。

2重人格。不可思議だが認めるしかない。ルシアの中に太陽の神が存在する。それはそれで素晴らしいことではないのか。太陽神アルニヴァースを崇める者としてはそう考えるのは当然だ。

だが、しかし、展開はオークランドの予想を大きく覆す。

もう1人。

更にもう1人の人格がルシアの中にいる。

3重人格。

そのもう1人は名乗つた。

自分は絶望の神、メンデルゴスだと。

1人の少年の中に敵対する同士の神が宿っているのだ。こんな信じられない状況はあるだろうか？

オークランドはキュッと口元を引き締めた。

本當か嘘かは今にわかる。ただ、この目の前にいるルシアは、明らかに今までのルシアではない。行動、声、顔つきに悪意が満ちている。そつ、ならば、このルシアはまさしく絶望神のルシアなのだ。

「ひいい」

【おらり、おらあ、逃げんじゃねーよ、人間どもお】

絶望神ルシアは逃げ惑う兵士に飛び掛った。

「やつやめろ！」

オークランドの止める叫びも虚しく、ルシアの手が兵士の顔に掲げられた。

【はつ、はつ、はあ～】

嬉しそうにルシアは言つと、先程の音が鳴つた。  
ぱあん。

兵士の頭が破裂した。ルシアの黒衣を引っ張つて抵抗していた腕が力なくダラリと垂れた。

【へつ、あと、ふうたあ～りい～】

ルシアは残つた兵士に振り返つた。

兵士はもはや動くことすらできない。きっと死を実感しているだろう。

「ひつ…たつ…助け…」

命乞いをする兵士にルシアは何も言わずに手を掲げ、閃光と破裂音と共に消し飛ばした。

【無理、無理、あつと、ひとつりい】

最後の兵士を見据え、ルシアは近寄っていく。邪悪な笑顔。最後の1人は思い切り苦しめて殺すのだろう。

「まつ、待て！ルシア」

兵士の前にオークランドが立ちはだかった。

【あ～？なんだてめえ、てめえらの敵を排除してやつてんだぜ、俺様はよ】

「目の前で人が殺されるのを黙つて見てられるものか！」

ルシアは少しオークランドを見つめて、下品な声で笑い出した。

【ひやははは】

「何がおかしい！」

【いいが、小僧、無理してそんな良い人のフリなんてしなくていいじゃねーか、たかが人間の1人や2人、どこの国でも関係ねー、自分さえ生きていればよ。他の奴なんてほっとけよ。本当は自分が一番可愛いくせによ】

「黙れっ」

オークランドは剣をルシアに向けた。瞬間ルシアの表情が変わった。

【… てめー。この絶望神メンデルゴス様によ、人間如きが、そんなモン向けるたあ、どういうつもりなんだ】

「ぐつ」

太陽神ルシアの時とは違う威圧感を覚えた。全く異質なものだ。気圧される。怯えが出る。

【はつ、まあいい。先に死んどけ、お前】

あつさりと言つたルシアは手をオークランドの前に掲げた。

「…」

【じゃあな】

ぐる！オークランドは目を閉じた。覚悟が死の恐怖を上回る。こ

れで、もう、辛い政権争いに巻き込まれなくてすむ。それいいのか?  
?やるべきことがあるのでないのか?  
ぱあ…。

音が途切れた。

オークランドは目をゆっくりと開ける。

攻撃をしかけたはずのルシアが頭を抱えて蹲つていた。

【ぐつ…ぐぐつ…てつてめえ…】

怒りの視線をルシアは向け、そのまま意識を失つてその場に倒れた。

「…?」

ルシアの視線はオークランドを見ていかつた。視線はボズ達の方向を指していた。

オークランドはルシアの視線の余韻を追う。  
その先は。

驚きで動けなくなつているボズ。

疲労も含めて苦痛を我慢しているステュー。

変わらず呆けてるアリシエ。

そして…。

一言も声を出さず、自分の意志とは無関係だった、何を考えているのかわからない、少女、リサ。

大きく広げたりサの両手はルシアの方に向けられていた。  
ルシアの視線はリサを見ていたのだ。

「一体どうなつているんだ」

思わず呟いたオークランドの言葉が、この場の全てを物語つていた。

## 第7回　いぼれ話

皆さんの久しぶりです。

作者です。

なんかすごい久しぶりの気がするのですが。

お元気ですか。

さて、僕の今の現状はというと、実は本業の仕事が結構忙しくなつてきています。

それによつて、4日毎の更新が厳しくなつてきているのです。

それでも頑張りますけど、もし更新できなかつたらごめんなさい。

…ってそんなに楽しみにしてない？

小説世界の話ですが、今回の第3章の部分は（きっと読んでくれるかもしないのでネタバレ伏せます）昔から決めていた部分で、楽しく書けたつもりです。

これから表現方法に僕の情けない執筆能力がどこまでついてこれるのか不安ですが、一応彼は主人公ですから…なんとか乗り切ろうと思います。

僕の予定では「いつ」要所要所を各部で考えていまして、気の遠い先の話ですが最終部のことも頭にあります。

まず国を分けたときに、必ず島を舞台に書いつと決めて、それが第

1部の話なんです。余計な他国も出てきませんから書きやすいかな  
と。

続いて、低い執筆能力のせいで、読者を大混乱に導いた伝説の第2部へと繋がります。ここでは、とにかく僕自身が主要人物をはつきりさせたくて登場人物を出しまくったんですよね。読者からは忘れ去られてもいいという覚悟で書きました。

そして、第3部、ルキボル国のお話。展開的には今のところ予定通り、ですが、次の大きな展開は第7部くらいまで先なんです。じやあ、その間の4・5・6部は？…いま検討中です。

これからは、3兄弟の戦争が加速化していきます。あのキャラクター やこのキャラクターが登場して、また・・・すみません・・・混乱を・・・。

いいや！

頑張る！

頑張りますよー！

皆さん、続きまして、第4章、よろしくです。

ルキボル国3王子、3男ズッケルアの城。

今後の作戦を会議している。

円卓のテーブルを、ズッケルアと側近である騎士のサー・ポー、老騎士で気難しそうな顔つきのブルガス、ズッケルア側の政権の責任者であるガルヌの4人が囲んでいた。

ズッケルアは脅威を感じていた。ミストラスにではない。オーランドにだつた。もつと詳しくいえば、オーランドではなく、その連れのルシアへの恐怖。

圧倒的な力を講堂内で実際に見たズッケルアはその戦力に恐れを抱いていた。

「本当ですか？王子」

ブルガスが信じられないように言った。

「こんなことで嘘なんてつかないですよ、ブルガスさん」

不機嫌な声で、ズッケルアは言った。

「オーランドの仲間のルシアとかいう奴：極めて危険です」

思い出したのか、目があらぬ方向を見ていた。

「本当ですよ、ブルガス殿、あの力が出てくるとなると、まだまだ情勢はわかりませんよ」

隣にいたサー・ポーも口を出した。彼もルシアの力を目撃していた1人だ。

「もう…」

半信半疑なブルガスではあるが、ここまで断言されると大げさではないのだろうと思った。事実、ミストラスの講堂が粉々になつた報告はきていた。

「どう思う？ガルヌ殿」

ブルガスは考え込んでいるガルヌへ質問した。

ガルヌはしばらく黙っていたが、静かに話しだした。

「まず、間違いなくミストラス王子はオークランド王子へ報復行動の準備をするでしょう」

全員が頷いた。ガルヌは続ける。

「我らが今、動くのは得策ではありますん」

「なるほどな、2人の王子が潰し合いをしてからでも動くのは遅くない」と?さすがはガルヌ殿だ

ブルガスは感心した。そして、身体をズッケルアに向き直った。  
「ガルヌ殿の意見に賛成ですな、我々はしばらくは高見の見物といこうではありませんか。弱りきつたところを我らが叩く!それが一番ですぞ」

「うん、そうだね、そうしよう。でも、見抜かれいかな、そんな単純な作戦」

ズッケルアが言った。

「大丈夫でしょう。ミストラスは怒りで誰の意見も聞きませんし、オーランド側に、そんな指示を出すような者はおりません」

自信たっぷりにガルヌは言った。

「ですが、偵察だけは怠らずに。サー・ポー、引き続き頼む」「了解しました」

ガルヌの指示でサー・ポーは軽く頭を下げた。

「ルキボル国の次期王…時間の問題だな…ふふふ…」

ズッケルアは未来を想像したのか、不敵に笑つた。

瓦礫と化した講堂を田の前にして、ミストラスは顔を真っ赤になつて震えていた。

ミストラス自慢の講堂だった。計画を練りに練つてようやく造り上げた。それが瞬く間に、たつた1人の少年に、跡形もなく破壊されたのだ。

医療先進国のおかげで、その時にでた怪我人の治療は素早く対処することができ、民の被害は比較的酷くなかった。

「攻め込むぞ」

ミストラスは怒りを込めて言った。それは、オークランドへの報復を意味する。

それを聞いた腹心達は慌てた。

「ミストラス様、それは賛同しかねます。今は、ズッケルア王子の動向も気になりますゆえ、ここで軍力を削ぐと、もし攻め込まれてもしたら、壊滅してしまいます」

しかし、ミストラスは聞かない。

「黙れ、ズッケルアにそんな判断できるわけない。攻め込むといつたら、攻め込む！準備をしろ！」

ミストラスの命令に誰も意見を言ひ者もおらず、軍はオークランドの領地へ攻め込む準備を着々と始めた。

「待つていろ、オークランド、貴様を、必ず、血祭りにあげてやるぞ！」

憎悪のこもつた声が大地を揺るがした。

森の中。

追つ手からなんとか逃げ切ったオークランド一行。  
しばしの休憩。

といつても、全く進んでいない。

ルシアは意識を失い倒れ、リサはまた喋らなくなり、動きようがなくなっていたのだ。

重い空気が流れる。

ルシアの身体の中に、太陽神と絶望神が宿っているという事実と、暴走した絶望神を封じ止めたリサの謎の力。

わからないことばかりで、オークランドはどうしていいのかわからなくなっていた。

「う…」

「あっ、ルシアさん」

ボズがルシアの目覚めに気がついた。

全員が息を呑む。太陽神なのか、絶望神なのか、緊張が過ぎる。

「……う……。こ……ここは……」

ルシアは頭を押さえながら起き上がった。いつものルシアの口調に皆は安心した。

「ルシア……なにも覚えていないのか?」

オークランドが慎重に聞いた。

「なにを……って……なにかあつたのですか? 確か……矢が……僕に……どうやら、講堂裁判での出来事しか覚えていないようだった。

「ルシアさん、実はね、その後にね……」

説明しようとしたボズをルシアが制した。

「しつ。誰かがいる」

「えつ」

皆が辺りを見回す。

静寂。気のせいいかと思いかけた頃、草むらから人影が現れた。

「あ……あなたは……」

意外な人物の登場にオークランドは絶句した。

つづく

草むらから出てきた人影は。

茶色の長い髪を後ろに束ねていた男だつた。  
かつて、バロゲニア神殿に仕えていた人物。  
最高責任者大神官デスペラドの息子。4人の息子の内の末っ子。  
騙されて、父である大神官殺しの汚名を着せられ指名手配された  
男。

それは。

グリークスだつた。

「…」

「あなたは…バロゲニア神殿の…」

「…グリークスだ。そういう君は、ルキボル国のおークランド王子  
グリークスは警戒しながら言つた。

ここへくるまでに、見つからずの行動をし、なんとか抜け出し、  
逃亡生活を強いられていた。見つかるということはどこで情報がも  
れるかわからない。

今のグリークスにとって、周り全てが敵なのだ。  
「無事だつたのですね」

オークランドの言葉にグリークスは予想外の気持ちを覚えた。  
オークランドは全くグリークスを警戒していない。それはオーク  
ランドにしてみれば当然だ。ガルド会議のあの場で、デスペラドが  
殺害されたあの場で、最も怪しかつたのは、グリークスではなく、  
彼の兄のヴィジョンズであり、聖國ドルコルドのマルーン教皇であ  
つたことをいち早く感じ取つていたからである。

なにをいわれよつとも、グリークスが犯人だとは思うはずがない。  
グリークスも、正直オークランドに対しては悪い印象はない。

大神官デスペラドが倒れた時に、真っ先に治療のために飛び込ん  
だのはオークランドである。いくら医療大国とはいえ、自分の命の

危険がありながらのその行動は誰にもできるわけではない。心の中にオークランドへの感謝と尊敬の気持ちが芽生えていてもおかしくはない。

逃亡先をルキボルにしたのも、自然とそういう思いがあつたからかもしれない。

「…

ルシアはグリークスをしつこいくらいに見つめていた。

「あなたは…。あなたには…強い意志を感じます。もしかして、あなたが…私の探していた…」

「えっ？」

オークランドは思わず振り返った。

「…な…なんの話だ？」

グリークスも突然の話の進みように驚いていた。

「は…はい、実は…」

オークランドはこれまでのことを話した。

ルキボル国の王位継承争い、ルシアとの出会い。ボズ達との出会い、ボズがゲルニア国の人間。そして、濡れ衣。ルシアの太陽神としての覚醒。更にはルシアの中のもう一つの人格、絶望神の覚醒。ルシアが英雄を探していることを。全てを話した。

初めはグリークスも半信半疑だったのだが、ボズ達の意見も加わり、完全ではないにせよ、嘘ではないと判断した。

なにより、ルシアはそういうた雰囲気を漂わせている何かがあつた。

「話はだいたいわかつた。…ってことはなにか？俺が、あんた…ルシアの言う英雄だつていうのか？」

「…はい。直感ですが、そう思いました」

ルシアは表情を変えずに言つた。自分の意見に自信を持っている顔つきだった。

「僕の中に、太陽神が宿っているかもしないということは、知り合いの人から聞いていました」

それは、アーガス国のクラシヨイカのことを語っている。

「まさか…絶望神までが…」

ルシアは胸を押さえながら苦しそうにした。

「…で？俺はどうしたらいい？」

溜息をついてグリークスが尋ねた。

「はい。僕と一緒にきてください。英雄は7人いるのです。残りの英雄も探さなければいけません」

「おいおい、俺がそんな大それたモンじゃないと思うぞ」

「それはおのずとわかつてくるものです」

ルシアの瞳は強く、頑固な瞳だった。

グリークスは少し考える。今のままだと、仇を討つどころか、何の動きもできない。ここはルシアを利用するわけではないが、仲間は必要だと思った。

「仕方ない、俺はお尋ね者だ、今のままだと何もできない。ここはルシア、お前に付いていくしかないようだ」

ルシアは一コリと笑みを見せた。

「ありがとうございます。よろしくお願ひします」

「と…とりあえず、いつまでもこの場所は危険です。早く、城へ行きましょう」

全員立ち上がり、オーフランドの城へ向けて歩き出した。新しい一時的な仲間、グリークスを加えて。

2人の人間が、ルキボル国にひつそりと入国してきた。

1人は金髪の男。

1人は赤髪の女。

「カインド～、本当にグリークスはここにきたの～？」

「うつさい、シール。あたしの情報に間違いはない」

「ふうん」

「あたし達の任務の邪魔をした奴は生かしておくわけにはいかない。

グリークスはマルーン教皇もためにも抹殺せねばならないんだ

「あいあ～い、わかつたよ、カインド」

聖国ドルコルドの戦士、金髪の男シールと赤髪の女カインド。

この2人こそ、グリークスの父であるデスペラードを殺害し、グリ

ークスに罪を被せ様とした任務遂行犯である。

グリークスを殺すために追ってきたのだ。

2人はゆっくりと歩き出した。

つづく

進みだしてからは、オークランド達の行く手を遮る輩は出てこなかつた。順調に歩いて、オークランド領地に入つたらある程度の安全は確保できる。

「もう少しだ、頑張れ」

ボズやアリシエには疲労感が漂つていた。子供の体力でこの道のりは厳しいだろう。まして、これまで逃げることばかりが重なつていたのだ。

別格なのはパール族のステューである。多少は疲れているのだろうが、無表情で歩いている。とても子供には見えない。

ルシアと途中で加わったグリークスはなんとか歩いてこれるが、無言のリサが読み取れないが、普通に考えて疲れていると判断するしかない。

「ルシア……」

唐突にグリークスが話しかけてきた。

「はい」

ルシアがグリークスを見る。

「君の身体の中に……。その、神がいるとしても……だ」  
言いにくそうにグリークスは話す。

「君自身は何処からきたんだ？つまり、君の出身つてことなんだが

……」

「わからないんです」

ルシアは即答した。

「わからない？」

「もつと詳しく言えば、覚えていないです。小さい時の記憶が全くないのです」

2人の会話はオークランドやボズ達にも聞こえていた。聞き耳をたてている。

「僕が、気づいた時には、1人でした。どこかの国にいたんですね」

ルシアは淡々と答える。

「ですから、僕は親の顔も知りません。だけど、頭の片隅に残っている意識があつたんです。『英雄を探せ』…と

恐らくそれが、太陽神の声なのだとすることは理解できた。

「英雄を探すことで、僕が何者なのか知りたいのです

ルシアの強い意志を、オーランドは感じた。

ようやく。やっと、一行はオーランドの領地へ到着した。

「あっ、オーランド王子だ」

子供の叫び声が聞こえた。

その声で辺りの民衆が集つてきた。

「王子、よくぞ、ご無事で」

「よくも、まあ、1人で行かせるなんて、危険ことを」「ミストラス王子に城の方で暴動があったそうですよ」

オーランドは自分の城に戻ると安心感を覚えた。

民の喜びようはとてつもない。

「す…すごいんだね、オーランドさん」

ボズが感心したように言つた。

「いや…そんなことはないよ」

照れくさそうにオーランドが素早く抜けようと動いた。

城内。

オーランド達は入城した。

最初に慌ててやつてきたのは、白衣を着た若い綺麗な女性だつた。

「まあ、王子、おかえりなさい。随分遅かつたわね。ストラングだけが帰ってきたから心配していたのよ」

オーランドがミストラスの兵士に捕らわれた時に、愛馬ストラ

ングだけが取り残されたのだ。行き場を失つた白い馬は、なんとか先に城へ戻っていたのだ。ストラングのことを心配していたオーランドは、ほつとした。

「すまない、ジョルイ。ちょっと状況が変わってね」  
ジョルイと呼ばれた女性は、チラリとオーランドが連れてきた団体を見た。

「こちらは？」

「ああ、道途中で出会った人達だよ。あの男の子がボズとステュー、そして、女の子がリサとアリシェ。彼がルシア、それと…」

「グリークスです。ジョルイさん」

オーランドの紹介を遮り、グリークスが自ら自己紹介した。どうやらグリークスは女好きなようだ…とオーランドは思った。自分は今、追われてある身だらう、溜息が出た。

「まあ、じ十寧に。王子の身の世話をしています。ジョルイと言いますわ」

「いや、こんな綺麗な女性に世話をしてもいいなんて、オーランド王子は幸せ者…」

歯の浮くようなグリークスの台詞が終わる直前に、大きな男の声が突如発せられた。

「オーランドオオオオ！」

その声に、オーランドの身体に緊張が走る。

「せつ先生」

大柄の黒髪を生やした男がオーランドに突進してきた。

オーランドの恩師、教師、そして愛馬ストラングを託した人物。「お前、ストラングをほつたらかしにしてどういうつもりだ！あれはお前が楽に旅ができるように、ワシが丹精込めて育て上げた名馬だぞ、それをお前…」

「すみませんでした、ペッチャエル先生」

オーランドは素直に頭を下げた。

「ふん、まあ、無事に帰ってきたから、良しとするか」

ペッチャエルは踵を返して、戻りうつしたが、思い出したように振り返った。

「おい！ストラングとお前のことを言つたんだからな！勘違いするなよ」

オークランドは心から笑みがこぼれる。さつきの台詞をストラングだけだという意味と取られるのをわざわざ訂正したのだ。その極端なほど氣にする性格をオークランドは大好きだった。

「…む…」

ペッチャエルはグリークスの顔を見て動きが止まった。

「お主は…」

何か言いかけた時、もう一つの別の声が奥から聞こえる。

「彼は…バロゲニア神殿の大神官デスペラドを殺害した犯人ですよ、  
ペッチャエル殿」

奥からジョルイと同じく白衣を着た男が現れた。

つづく

オーランドの城を守ってきた男。影の指揮者。政治方面的担当をしている男。

奥から現れた白衣を着た者は、ニヒュアスだった。

「ニヒュアス…」

オーランドは氣まずそうに咳いた。神経質に何事にもしつこいくらいに納得しないと動かないこの男のことをオーランドは苦手だった。そういう者も必要かもしねりないが、まるで尋問を受けているように感じる会話は嫌いであった。

「確かに、ニヒュアス！ この者が…あの…」

大きな身体を動かしながらペッチャエルはグリークスを指差した。

「ええ。デスペラドの『子息…。グリークス…ですよね』

ニヒュアスは冷静に話す。

グリークスにも動搖はなく、物静かな態度を保っていた。

「なぜ、そんな奴が、王子と一緒になんだ？」

ペッチャエルはグリークスを見んだ。

「聞いてください、先生、そして、ニヒュアス、彼は犯人ではない」  
オーランドは間に入つたが、グリークスが止めた。自分で話すという素振りだった。

「…噂が1人歩きしているのは事実だ。はつきりと言つ。俺はやつていな。誰が自分の親を手にかけることができるんだ」

兄のヴィジョンズの顔が一瞬過ぎる。

「私が聞いているのは、貴方が先導して大神官殺害の指図をした」と。貴方が犯人ではないという証拠がありません」

ニヒュアスは冷たい顔で言つた。

「ああ、証拠は…ない」

「では、何を信じればいいのですか？私は目に見えない物は信じない主義です。はつきりとした何かがなければ、貴方を危険人物とし

て扱うしかありません」

グリークスは俯いたまま決心したように顔を上げた。

「何もない俺に、出来ることは…。誓つしかない」

「え？」

「太陽神の名の下に。自分の無実を誓う」

ニヒュアスは呆れたように息を吐いた。

「それこそ、目に見えない物の代表ではないですか。それで私を…ドオーン。

耳を塞ぎたくなるような音と地響きが鳴った。

「なつなんだあー！」

ペッチャエルが急いで兵士を呼んだ。

兵士は、ぜえ、ぜえと息を切らせて報告を始めた。

「てつ、敵襲です！」

「なにいー！」

「…王子の…。ミストラス王子の軍隊です！」

その場にいた全員が絶句した。

ニヒュアスが、はつ、とオークランドへ向き直る。

「ミストラス王子の講堂が半壊したとの報告を聞いています。まさか…貴方達ですか？ 貴方達の仕業ですか？」

青ざめた表情のニヒュアス。

信じられないという顔のジョルイ。

まさか…自分の教え子が…という絶望の顔色をしたペッチャエル。それ以外にミストラスが攻めてくる理由がわからない。

更にオーカランドやボズの沈黙が、真実だということを物語つていた。

「なんてことをしてくれたのですか、貴方は。王位継承は諦めるとうことで話がついたはずです」

ニヒュアスはオーカランドを責め立てた。

「我々は戦力がないのですよ。あんな圧倒的な軍でこられたら、ひとたまりもありません。わかっているのですか？なぜ、今頃になつ

て。そんなに王の地位が欲しいのですか？

オークランドは何も言えない。言えるわけがない。ミストラスの講堂が半壊したのは本当のことだし、ミストラスの怒りは間違いなくオークランド本人に向かっている。

自分のせいで、民が危険な田にあつてしまつ。考えたくない未来だった。

「それで？お前はどうしたいんだ？オークランド」「

グリークスが突然言った。

「貴方は黙つてください！これは、我々の…」

「あんたには聞いていない。俺は、オークランド王子に聞いているんだ」

グリークスはヒュアスを押しのけた。

「ぐつ…」

「さあ、お前の意見を聞かせてくれ、オークランド。お前は王になりたいのか、なりたくないのか？」

グリークスはオークランドの田を見つめた。その力強い瞳にオーケランドは思わず目を逸らす。

「僕もそれが聞きたいです」

ルシアが言った。

オーケランドはルシアの目を見る。綺麗で澄んだ瞳。心が癒される。

「…ぼ…僕は…」

オーケランドは目を閉じた。

「王には…なりたいとは…思わない」

「…そうか、王にはなりたくないといつことだな」

グリークスが言つ。

「はい。僕は王にはならない」

唇を噛み締めた。

「だけど」

目を開く。

「今は。民を。民の命を救いたい！そこには王位など必要ない」

オーランドは叫んだ。

「僕にどうしたいのかという問い合わせに答えるならば！僕は、民の命を救いたい！！」

「わかった」

グリークスはニヒュアスとペッチャエルの方を向いた。  
「状況を報告していくように各兵士に指示をするんだ  
「なつ…なにを？貴様なんぞに偉そうに…」

ペッチャエルは憤慨した。

グリークスは大きく息を吸って怒鳴った。

「俺はオーランドの願いを今から叶える！ここでいがみ合つても意味がねえ！戦闘体制をとれ！戦うぞ！」

その気迫に、全員が動かない。

「オーランド！」

グリークスが呼ぶ。

「は…はい」

「守り抜くぞ」

グリークスの笑みは、全てを任せることに十分すぎる笑みだった。

### 第3部 第5章 怒りの先の絶望 その1

オーランドの城は、大して工夫もない普通の状態だった。

城があり、続いて町があり、門がある。

それも、入口というだけで、周囲は壁で囲っているわけでもない。つまり、四方八方から攻められれば、終わりという戦争をするには非常に困難な構えであった。

それは、分配される時に、意図的に一番悪い場所を持たされたようなものであつたが、争いの嫌いなオーランドはそれでも良しとしていた。

仮に国を挙げての戦争になつたとしても、この場所は一番最後の位置なので、ここが攻められる時は戦争も敗北しているはずである。しかし、バロゲニア神殿を中心として8国の協定の中、そんな戦争も起こらない。

普通に生活するつえでは、そんな戦争不利な構えでも気にすることはなかつた。

だが。

今となつては。

オーランドは後悔する。自城の最悪の現状に、どう対応していくのか皆田見当が付かなかつた。

「すみません」

そんな状況の後ろめたさからか、オーランドは謝りを入れ始めた。

「いや、いや、気にするなオーランド。誰が兄弟同士で喧嘩するなんて思う?」

慰めるように、教育係だつたペッヘルが言つた。

報告を聞いていたグリーケスは、振り向いてオーランド達に問うた。

「ミストラス側には、優秀な人材はいるのか?争い事に関して的確

な指示を出すような人間は…」

その質問には、オークランド領地の政治を任せているニヒュアスが悔しそうに答えた。彼はまだグリークスの介入を認めていない。彼にとつてグリークスは指名手配の犯罪者なのだ。

「…ズッケルア王子には、非常に優秀な人間はいるが、運が良いのか、ミストラス王子にはそんな人間はない。ミストラス王子は、決断するような大事な時は、人の意見は聞かない人だ」

グリークスは頷いた。

「…だろうな。報告の中で、最初に威嚇するためなのか、大砲の音がなつただろう？それは正面の門からだつたらしい」

門の方向を指差す。

「皆もわかる通り、こんな城の構えであれば、周囲を固めてから一気に攻めてくれば終わりだ。それをわざわざ正面から來ること自体戦略のなにも感じられない」

ペツチエルのなるほどと感心した顔に、咳払いをするニヒュアス。グリークスは続ける。

「それと、ここにくる途中、森であつた出来事を知らないはずがない。生き残りの兵士がいたんだからな」

ボズが、あつ、と声に出した。

オークランド達が、ミストラスの兵士に追い込まれた時に、3重人格であるルシアの悪の人格が目覚めた。それは絶望神だとルシアは名乗る。その悪のルシアが兵士を次々と葬り去つていき、最後の1人が殺される瞬間にオークランドは間に割つて入つたのだ。

その時の兵士は逃げるようになぞえていつたとグリークスは聞いていた。当然戻る先はミストラスの元である。ルシアの変貌を報告しないわけがない。

「その報告を聞いていても、こういつた攻撃しかできないってことは、報告を重要だとは思っていないし、それに苦言をする人間がないってことだ」

グリークスは腕を組んで考え込む。

「…であれば…なんとかなるかもしない…」

演説のようなグリークスの独り言に皆は耳を傾けていた。

「オーランド、直ちに、町の女、子供、老人を優先して城の中、もしくは安全な場所を確保して引き入れるんだ。男は一緒に戦うのあれば良し、もし出来なくても責めはしない」

グリークスはオーランドの方を向いて言った。

「リサ、アリシェ、ボズ、ルシアも同様に安全な場所へ行ってくれ。ステュー…君はすまないが戦力になる。戦ってくれ」

それを聞いたボズが慌てて言い寄った。

「な、駄目だよ、グリークスさん！僕も戦う。僕だって男だ。ステューが出るなら僕だつて！」

「そうです、グリークスさん、僕だって戦えます」

ルシアも一緒になつて口を出した。

「いや、ルシア。君の例の話が本当であれば、戦場にいるのは危険だ。いつ目覚めるかわからないからね。君はここにいるべきではない」

ルシアの人格が変わるという話を完全に信じているわけではない。だが嘘だとも思えない。それほどボズ達の言葉には信頼できる響きがあつた。そのことを考えたらいつその目覚めがくるのかわからぬいのであれば、ルシアをこの場に留まらせるわけにはいかないとグリークスは考えた。

その意見には、オーランドやボズも同意見だった。

「グリークスさん！ぼつ、僕は…」

「…危険だぞ」

「大丈夫！」

「死ぬかもしれない」

「大丈夫！」

ボズのその大丈夫という根拠がわからないが、強い意志を感じた。

ボズはこの場に残ることが許された。

「では、速やかに行動しよう。今はまだ威嚇だけのこの間に

グリークスは言った。

オーランドは、ペッチャルヒュアスの元へ歩み寄った。

「グリークスさんは信頼できると僕は思っている。色々と言いたいことはあると思う。だが一刻を争うのだ。すまぬが力を貸してくれ

オーランドの懇願に2人は断ることもできなかつた。

「わかつた、全くしようがないのう」

「…不本意ですが…仕方ありません、すぐに手配します

オーランドはグリークスに向き直る。

自信に満ちたその表情がとても眩しく見えた。

つづく

### 第3部 第5章 怒りの先の絶望 その2

ミストラス陣営。

オークランドの城の前へ到着したミストラスは、威嚇のために砲撃を命令した。

慌てる人々を見ながらミストラスは満足そうに笑った。

「くくく…。この俺に逆らつたらどうなるか教えてやるつぞ、オークランド」

早くも勝利を確信しているミストラスに兵士の一人が進言してきた。

「ミストラス様、勝手ながら意見を言わせて頂きます。このまま正面から攻め込むのは止めてもらえませんか」

その兵士をミストラスは睨んだ。

「何を言っているのだ貴様。まさかこの俺に口ソ口ソと後ろから攻撃するような真似をさせるのではないか。オークランド如きに」「これは、戦争です、王子。どんなに圧倒的な力をもってしても、何が起こるのかわかりません。念には念を入れて必ず勝つ方法を…」  
進言していた兵士をミストラスは剣で両断した。

「ぐああっ、おっ王子…」

「俺が負けるというのか、この愚か者がつ！」

ミストラスは狂い始めた。誰の意見も受け入れなくなっていた。  
「もう少ししたら、攻め込むぞ、いいなつ！」

息絶えた兵士を蹴りつけながらミストラスは叫んだ。

「ねえ、ねえ、カインド～。何かすごいことになつていない？」  
「そうだな、だが、あのオークランドの城の中にグリークスがいるんだな」

グリークスの命を狙う2人の刺客。シールとカインドはこの状況

を見ながら話し合つ。

グリークスの親であるテスペラドを殺害したのはこの2人である。グリークスが逃亡するという予想外の展開が起こり、グリークスの命を奪うために追いかけてきたのだつた。

「さて……と。どうするか…」

カインドが腕を組みながら言つた。

「これつて余計なことしたら、巻き込まれそだよね〜?」

シールが困つた顔で言つ。

「こままだと、戦争がすぐにでも始まるな。その隙を見て素早く入り込むしかなろう」

「うん、それしかないよね〜、さすがカインド」

2人の姿は森の中へ消えていった。

オークランド陣営。

「状況はどうなつてゐる?」

グリークスが報告を求めた。

「現在、指示通りに動いています。女、子供、老人を最優先で安全な場所へ移動させています。もつあと少しです」

「わかつた、急いでくれ」

グリークスは、ペツチエルへ向き直つた。

「ミストラスはまだか?」

グリークスの言葉に不機嫌を感じながらも話す。

「ああ、まだだな、動きはない」

「ふん、余裕だな、本当に何も意見が出来る奴がないと見える

「一体どうする気なんだ?」

苛々してペツチエルが言つた。

それを聞いて、ニヒュアスも同意見だと口を出した。

「そうだ、この戦力では到底勝ち目がない。どうする気なんだ」

グリークスは、わかつたと具体的な説明を始めた。

「簡単だ。別部隊を編成し、氣づかれないように後ろへ回り込むだ。そして後ろから叩く」

拍子抜けだった。誰にでも思いつくような簡単な作戦に、周りの皆が呆気にとられた。

「そんな、攻め方でなんとかなるのか？」

「ヒュアスが大声で言った。彼はもつと奇抜な戦法を期待してかもしれない。

「間違いなくなんとかなる。奴は真正面しか見えていない。そこにオーランドの軍が現れたら、きっときり立つて進軍してくるだろう。よもや後方を攻められるなんて思つてゐるわけがない」

「待て、待て、その後方への攻めは誰がいくんだ？もしバレたら命はないぞ」

ペッチャエルが言った。

「勿論、俺が行く」

「そんな…グリーケスさん、危険です」

オーランドは心配な声を出す。

「いや、俺が先頭立つていかなければ周りが納得しないだろう。但し、ステューには一緒にきてもらひがな」

グリーケスはステューを見る。静かにステューは頷いた。ボズも一緒にと行きたがったがさすがにここは断られた。

「その代わりオーランド、君にはミストラスを挑発するために正面に現れてもらう。君が直々に現れると必ずミストラスは激高するだろう」

「いかん、いかんぞ、そんな危険なことはさせんわけにはいかん！」

ペッチャエルが叫んだが、オーランドはそれを制した。

「いえ、先生、ここで僕が命を張らずにどうやって民を救えるのでしょうか」

オーランドは言った。

「行きます。グリーケスさんの作戦に僕は乗ります」

「オーランド…」

オークランドの覚悟に嬉しさを感じつつ、ペッチャールは不安な気持ちに襲われた。

つづく

日が沈み、そしてまた日が昇る。

ミストラスの軍隊は動かない。それは彼の作戦であった。いつ攻めてくるかわからない恐怖を植えつけようといつもりなのだが、その作戦はミストラスの自己満足に近い。

もはや、町中には人はいない。避難をしているために、そんな恐怖など知る由もないだろう。

逆に緊張を強いられたのはミストラスの方だった。いつ反撃にこれられるかわからない。ミストラスはくるはずもない反撃を待つている。

部下の1人がたまにかねて進言した。

「ミストラス王子、ここは今一度会議を開くべきです」

「必要ない」

「でつですが、軍の士氣にも関わってしまいます」

「ええい、うるさい、消える」

ミストラスは部下を退けた。

「ふん、我慢もできんのか、もつ少ししたら、奴らも根を上げて…」

ミストラスの視線の先、門の前。複数の人影が見える。憎つきオーフランドの軍。

「ほらみろ！ 出でときおつたぞ！ 降伏しても絶対に許すなよ、皆殺しだ！」

「危険です！ 王子！ わざわざ危険を背負つてこんな所に出てくる」と自体が怪しいです。もう一度よく…」

先程の部下がミストラスの馬にすがりつく様に必死に訴える。

「黙れ！ 貴様！」

ミストラスはその部下を斬り殺した。肩で息をするミストラスの目前に。

1人の男が現れる。

「…」

ミストラスの顔が真っ赤になり怒りに震え始めた。

「オークランドオオ…！」

その場に立っているのは、オークランド本人であった。  
ミストラスはいきり立つた。

「行けえ！ 攻めろお！ 今がその時だ！ 殺せえ！」

その号令に兵士達は戸惑いながらも気合を入れながら突進を始めた。

だ。

「…つ…き…きます！ オークランド王子！」

完全に逃げ腰になつていてる兵士の1人がオークランドに向けて情けない声を出す。

オークランドも兵士の気持ちと同じであつた。だがそれを顔に出すわけにはいかない。グリークスを信じたのだ。オークランドは口元をキュッとしめた。

「大丈夫だ、落ち着け、グリークスさんを信じるんだ」  
自分に言い聞かせるようにオークランドは言った。

地面が怒涛の如くうねりをあげて、ミストラスの軍勢が迫つてくる。このまま立つても、踏み潰されるだけである。

今更何をどうするなどと作戦はない。グリークスを待つだけなのだ。

だ。

ミストラスの軍隊が動き出した。

夜が明けるまでにグリークスとステュー、そして数人の兵士達は、ミストラスの後ろに回りこんでいた。

「もうすぐだ…」

緊張が走る。

オーケランドの命を預かっているという責任の重さを感じていた。

全く後ろに気づいている様子はない。

突如、雄叫びが響き渡る。同時に兵士が動き出した。

予定通りオークランドがミストラスの目前に現れたのだ。

「いくぞ！！」

グリークスは一斉に馬を駆け出した。

グリークスの剣が舞う。

ステューのパール族としての能力、身体を刃に変化させる能力で、刃となつた腕を振り下ろす。

残りの兵士も勢いよく剣で切りつけた。

予想通りミストラスの軍は混乱を極めた。

予期せぬ攻撃に軍はたちまち乱れに乱れた。

だが、さすがにグリークスの少数の部隊に対しては限界がある。

1人、また1人とオークランドの兵士が倒される。

「こらえろっ！一気に突き抜けるぞお！」

だがその声がかき消される。

かすり傷だが、グリークスとステューも切り刻まれていく。

「ぐつ…」

ステューの体勢が乱れた。

「ステュー！」

グリークスは手を差し延べ、ステューを抱きかかる。もはや逃げ道はない。グリークスは囮まれつつあつた。

「…あー、あー、もう駄目だねー、あれ死んじゃうよー。ねえ、カインド」

金髪の青年シールは、戦闘の一部始終を見ながら嬉しそうに言った。

シールの相棒である赤髪の女、カインドは逆に不機嫌そうにそれを見ていた。

「どうしたのー？カインドー。これでもうあのグリークスって奴や

つつけなくていいじゃんかー」

シールとカインドの2人は聖国ドルコルドの戦士であり、暗殺部隊である。大神官デスペラド暗殺作戦でグリークスを取り逃がしてしまったために、グリークスを追つてきたのだった。当然始末するためである。

このまま、ほっておけば、グリークスはミストラスの兵士によつて殺されるだろう。

2人の仕事は終了したようなものだった。

しかし、カインドにはそれが納得いかない。

「…あたしたちの任務は、グリークスを始末することだ

「うん、だからさ、死ぬじゃん、あの人」

「…ちつ

カインドは走り出した。行く先はグリークスの元である。

「あれー…どうしたのさー、カインドー」

「うつさい。あいつはあたしの手で始末するんだ。あんな雑魚に殺されるのは納得がいかない」

「えー！何言ってんだよー！」

シールがカインドの後を追う。

「あたしに狙われる程の奴は、こんな所で死ぬような奴じゃ困るんだよつー！」

カインドは吐き捨てるように叫んだ。

「うそー…まさか助ける気なのーー！」

シールが信じられないと声を張り上げた。

つづく

### 第3部 第5章 怒りの先の絶望 その4

カインンドは赤髪をなびかせながら、素早く兵士の網を搔い潜つていぐ。すり抜けざまに短剣で兵士達を突き刺すといつおまけ付きである。

カインンドが走り抜けた後には兵士がどんどん倒れていく。どんなに鈍感な人間でもありえない自体だということは認識できるだろう。

「うわー、やりすぎだよ、カインンドー！」

後に続く、カインンドの仲間であるシールもさすがに叫ぶ。

「うつさい。文句あるならついてくるな」

「え、ひどーい、なんでそんなこと言つのか～。わかつたよ～、ついていくよ～」

金髪の男シールは、カインンドと同様に短剣で兵士を切りつけ始めた。

ミストラス兵士の叫び声が段々と大きくなる。近づいてくる。それは、まさに殺される寸前だったグリークスとステューの耳にもはつきりと聞こえた。

「なんだっ」

剣をステューに振り下ろそうとしていた兵士が振り向いた。瞬間。その兵士の首が飛んだ。

「…」

「やあ」

シールが笑顔でステューを飛び越えた。

グリークスも寸前のところでカインンドが出現し、兵士を切った。

シールとカインンドの顔を初めて見るグリークスは気づかない。この2人が父である大神官テスペラドを殺害した2人だということに。

「…」

カインンドは無言で兵士を切りながら、目で訴える。「早く立て」

と。

「あ…、ああ」

グリークスは素早く立ち上がった。

そのままシールとカインドは突き進み始めた。グリークスとステューはその後に続く。

「どうした！後ろで何があった！」

ミストラスが叫んだ。

いや、オーランドの方へ軍を向けたかと思うと後方からの敵襲だと報告を受ける。周りが取り乱すのは無理もない。後ろからの恐怖を感じながら前へとは進めない。

「ぐつ、オーランドめ、こしゃくな真似を…こいつなつたら怯むな…恐れるな！オーランドだけの命を奪え！」

ミストラスの号令に、言うことを聞く人間はいなかつた。兵士達は武器を捨て逃げ始めたのだ。

「きつ 貴様ら、何をしておる…」

「ミストラス様、ここは一旦引くべきです。今の士気ではもはや攻め込むことはできません」

「黙れ！黙れ！」

部下の忠告を受け入れないミストラスは単騎でオーランドに向かつていった。

「うおおおおおー…オーランドオオオオ…！」

「オーランド王子…ミストラス様が単独で突っ込んできまゆ

「どうやら…グリークスさんがやつてくれたみたいだ」

「どうしますか？王子」

「捕りえろ。殺すことは許せん。興奮しているようだから気をつけ

る」

オークランドの兵士達はミストラスを捕らえるべく動き出した。

あの圧倒的な戦力差だったのだが、ただ1点の綻びでこいつも崩壊してしまったのか。オークランドは恐ろしく思う。

止まることがないミストラスの馬は突進していく。

だが。

更にミストラスの後方から4つの影。

グリークスとステュー。

あと2つは？

赤い髪の女と金髪の男だった。2人は飛び出すや、ミストラス曰掛け飛び掛った。

「なっ…やつやめろ！」

オークランドの叫び。

グリークスの驚いた顔。

2人の男女は、そんなことなどお構いなしだった。

一閃。

ミストラスの背中から鮮血が舞う。

「ぐああっ、なんだ貴様らつ！」

ミストラスの体勢が崩れる。

「…」

赤髪のカインドは相変わらず無言だ。

「へつへへ～、正義の味方だ！」

金髪のシールが調子に乗って口を開いた。

その声にオークランドとグリークスが反応する。どこかで聞いたことのある声だつたからだ。

「やめるんだつ！殺すことは認めないぞ！」

いがみ合つても、殺し合いをしても、命を狙われようとも、同じ血を分けた兄弟であり、兄である。父国王の王家の血が流れている。オークランドは見殺しにするることは出来なかつた。

「駄目だ、オークランド」

後ろから声がする。

振り返るとペッチャエルがいた。

「先生…」

「お前の気持ちはわかる。兄だ。兄弟だ。だが、今は戦争なんだぞ。お前一人がどんなに助けたくても、それは止めることはできない。運命なんだ」

「ですが、先生、僕には…」

「ならば止めにいくがよい。もつ…間に合わないが…な  
オーランドはミストラスを見る。その目には恨みと、憎悪と、  
そして絶望が混じっていた。

「オ…ク…ラン…ド…」

カインドの剣がミストラスを貫いた。

つづく

### 第3部 第5章 怒りの先の絶望 その5

カインンドの剣は、ミストラスの胸を貫いた。

「がつ……」

ミストラスの口から血が溢れ出る。そのまま、ミストラスは馬からもつれる様に落ちた。

その様子をオークランドは田の当たりに見た。

「ミ…ミスト…。に…兄さん…」

絶句して言葉が出てこない。

ペッチャエルもその光景を見ないように下を向いたが、仕方がないと割り切っていた。

「あ…あいつら…」

グリークスも驚きで言葉が出ないのが、もう一つの疑問がグリークスの脳裏を駆け巡っていた。手際の良さ。2人組。聞き覚えのある声。父殺しの汚名を着せられ、逃げるだけの毎日だったグリークスが頭から離れない声。結論は一つしかない。この2人が父である大神官『デスペラド殺害の真犯人。

「…」

ステューはグリークスの方へ寄り、小声で話しだした。

「あいつらは…暗殺のためだけに訓練された奴らだ。こういう場に慣れているし、腕が良い」

ステューのこの意見にグリークスの疑問はますます確信へと変わつていく。

警戒はしないといけない。グリークスは身を引き締めた。

ミストラスの兵士達は全員逃げ出していた。我が主であるミストラスを助けに行くという選択肢を選んだ者は1人もいなかった。

「おつ…おのつ…おのれつ…オーケ…がふつ…ラン…」

ガタガタと身体を震わせながらミストラスは胸から出る止まるこ  
とない血を押さえながら必死に立ち上がるうつとしていた。どんなに  
踏ん張つても手遅れだといつことは誰の耳にも明らかだった。

「兄さん」

オークランドが手を差し延べたが、ミストラスはそれを振り払つ  
た。

「同情……なん……か……いるか……殺して……や……。オークランドオ  
オ！」

ミストラスの身体はクルクルと回り、力が抜けたのか仰向けに倒  
れた。

「……がつ……がつ……。……はあ……はあ……」

透き通る朝の空を見ながらミストラスの気持ちが段々と落ち着いていくのをミストラス本人も感じていた。

「……」

「兄さん……」

「オークランドよ……」

静かにミストラスが喋りだした。

「どうして……こんなことに……なつたのか……俺は……ただ……国のため  
に……」

ミストラスは思い返したように、ふつと笑う。

「違うな……。結局……自分のため……か……。自分のことしか……考えてい  
なかつた……な。狂気に走つた俺を……止めてくれて……礼を言つぞ……」  
「そ、そんな兄さん何を言つてるんだ、今すぐに治療する。医療大  
国ルキボルの名にかけて必ず命を救つてみせる！」

オーカランドは回復魔法の詠唱を始めたが、ミストラスが震える  
手でそれを止めた。

「そんなことはいい。しなくていい。罪を受け入れなければいけない。俺は父王の元へ先に行つて……怒られておく……よ」

ミストラスはオーカランドの手を握り締めた。

「最後の……頼みだ……。父の遺言状を見せてくれないか……。父の本

当に言いたかつたことが…知りたい…」

「あ…うん」

オーランドは懐に納めていた遺言状を取り出して封を開けようとした。

「オーランド」

「え?」

ペッチャエルの呼びかけで理解できた。兄ミストラスは既に目を閉じていた。深い深い永遠の光を求めて旅立つたのだ。

「…兄さん…」

オーランドの瞳から涙が零れ落ちた。

「泣いている暇はない、オーランド。辛いだろうが。まだ問題があるだろ?、お前なら気づいているはずだ」

グリーケスが言った。

そのことは理解できる。兄ミストラスの命を奪った謎の2人。グリーケスの命を救つた謎の2人。それよりも、もっと重要なこと。この謎の2人が大神官デスペラドを殺害した犯人。男の声に覚えがある。その場に居合わせたグリーケスとオーランドの疑問は同じ事柄だった。

オーランドは2人組を見る。

涼しい顔をしている2人、カインドとシール。

オーランドは彼らに話しかけた。

「君たちは何者なんだ?」

もう一度、男の方の声を聞けば確信できる。

シールが調子に乗つて話し出そうとしたが、カインドがその口を力強く塞いだ。

「むぐっ」

「…通りすがりだ」

シールの代わりにカインドが口を開いた。

それだけ言うとカインンドはシールを引きずるように離れようとし  
た。

「待つてください」

オーランドが引き止めた。

「あなた方は我々の命の恩人です」

ミストラスの顔がちらついて胸が痛む。

「どうか、今日はこちらで泊まりください」

オーランドとしては、得体の知れない2人を何処かへ行かせることは危険だという判断だった。

「……」

変なことになつたとカインンドは心の中で思つた。

＼ 第5章 怒りの先の絶望 終／ 第6章 へつづく ／

ルキボル国内を駆け巡った衝撃。長男王子であるミストラスの戦死。オークランドへの遠征に向かい返り討ちにあつたという噂が触れ渡つた。

いよいよ、王位継承戦争が本格的になつていいくのを民は感じ、不安を覚える。

事実、オークランド討伐に動いて、逆に討たれたのは本当の話である。國から逃げる者もいれば、戦争反対と抗議に立ち上がる者も現れた。

残るは、次男オークランド、3男ズッケルアの2人。民達は避けられない戦いの運命に対応できるのであるうか。

ミストラスの城や町は静かにその最後の状況を佇みながら様子を窺つている。

「まさか、オークランドが勝利するとはね…」  
ズッケルアの城内。作戦会議。

驚きを隠せないという表情でズッケルアが口を開いた。彼の頭の中では、ミストラスの圧倒的な勝利だと予想していたからだ。その場合、オークランドの連れであるルシアの謎の力で、ミストラス側もある程度の損害が出ると踏んでいた。それでも結論はミストラスの方に軍配が上がるのだと思つていた。

それが、オークランド側には、皆無といつていいほど損害はない。更には、謎の力ではなく、謎の2人組の出現。そして、止めを刺すかのように、大神官テスペラド殺害容疑のかかつているグリークスの存在。聞けば、この度の作戦はグリークスの指示によるもだとう。

「予想外のことが起こり過ぎましたね」

政権責任者であり、軍師であるガルヌが冷静な口調で言った。

「そのグリーケスという奴は手ごわいのかい？」

ズッケルアが聞く。

「噂でしかありませんが…かなりの頭脳の持ち主です。この男がオーランド王子の下へ何故入ったかはわかりませんが…。脅威だと思います」

「恐らく…あれだな」

老騎士のブルガスが話しあした。

「ガルド会議に出席していましたから、その時に知り合つたのでしよう。人は見かけによらないものですな、オーランド王子はその辺のことを見越していたのでしょう」

「それと…実際ミストラスを討つた謎の2人組とは…サー・ポー？」  
ズッケルアが戦士サー・ポーの方を向く。偵察として、サー・ポーが一部始終を見ていたのだ。

「はい。この2人は、男女で、女は赤い髪、男は金の髪でした。なかなかの腕前の2人組です。一瞬にして、ミストラスの背後に回りこみ、一突きでした」

サー・ポーが一礼して答えた。

「その後…その2人組はどうなつたのですか？」

「オーランドと一緒に城へ戻つていきましたよ。そうなると仲間ということになりますね」

沈黙が流れる。強力な助つ人がオーランドに集つた。そして、未知なるルシアの謎の力。ズッケルアの戦況は悪くなつていいように思えてならない。

「さて…どうするか？ガルヌ殿？」

ブルガスが言つた。

ガルヌは動搖も焦りもなく答えた。

「全てはズッケルア王子の考え方次第です。王子が戦わないと言えば、その策を。戦うと言えば、勝つ策を」

その場全員の視線がズッケルアに注がれる。

それを受け、ズッケルアが微笑む。

「聞くまでもありません。次期国王は、このズッケルアです」

「わかりました。全力で、王子を必ずや・ルキボル国王にしてみます」

す

ガルヌは礼をする。サー・ポー、ブルガスもそれに続いた。

「では、これから作戦を話し合いましょう」

ガルヌは笑顔で言った。

オーランドの城や町は暗かつた。ミストラスとの戦いには確かに勝利はしたが、兄のミストラスの死が城や町を暗くしていった。城の数多くある部屋の1室。

半ば強引に招待され、客としての扱いを受けている2人。カインドとシール。

これから食事が始まる。カインドからしてみれば、この場には出席したくない。どうしても離れたかったが、必要以上に厳重な警備を見てさすがに簡単には抜け出せないことを確信した。

「くつそ、なんてこんなことに…」

悔しそうにカインドは言った。

「え～別にいいじゃん、早く肉が食べたいな～」

軽いシールをカインドは睨みつける。

「うつさい。あんたが早く逃げないからだよ」

「ええ～！僕のせいなの～？」

カインドは服を脱ぎ始めた。汚れた身体を洗うためだ。

女性がそういう行動に出れば、気を使うのが男性のあるべき姿であるが、シールにはそんな心使いは全くなない。じつと、その動きを見ている。

「こおら、シール！あっちを向け！なに見てんだ」

「あいあ～い」

気づかなかつたのだろう、興味なさそうにシールは、逆方向を向

いた。

「…つたく、なんで別々の部屋じゃないんだ」  
それは当然、オーランドの配慮である。別々にするとその分警備の数も使ってしまうし、一人でも逃げ出しそうだと思つてのことだつた。

突然。

コンコン。

扉を叩く音。

「なんだ」

カインドは慌てて服を着ながら言つた。

「…」

無言。カインドには全てが理解できた。扉の向こうに誰がいるのかを。どういうつもりで扉を叩いたのかを。

「開いている。…入れ」

カインドの指示で静かに扉が開いた。  
そこに立っていたのは。

グリークスだった。

つづく

日も暮れ、町は未だに厳戒態勢であった。ミストラスの脅威は彼の死で消えたが、もう一人、ズッケルアの存在が残っているため、安心していつも生活に戻す訳にはいかない。

城の中も慌しく動き始めていた。奇襲への対応準備で兵士のほとんどは招集されており、はつきり言うと人手が全く足りていなかつた。

それでも出来る限り多くの兵をカインンドとシールの警備に当てたのは正しい判断であり、やはりあの2人は最重要危険人物として扱われている。

そんな危険な2人だとしてもあえてグリーグスは会いにいった。ある確信と共にどうしても確認しないといけないことがあるからだ。グリーグスが来るだろうということはカインンドも察していた。いや間違いなく来ると思っていた。カインンドとシールに投げかけられる視線を見て何も思わない方がおかしい。

強い風が窓の戸を震わすように何度も揺らす。開かれた扉の奥から光るグリーグスの瞳はカインンドの表情を逃すことなく捉えていた。「食事の準備が…出来たようだ」

グリーグスは部屋に入りながら言つた。まだ何か言葉が続くことを意味していた。

「… 聞きたいことがある」

「… なんだ？」

カインンドは答えた。シールの方を向いて目で余計なことは言つないと訴えている。それを見たシールは両手で口を覆つた。

「单刀直入に聞くが、大神官デスペラドを襲つた賊は、お前らだな確固たる自信を持つた気持ちを込めて、グリーグスは言つた。  
怯まずカインンドは素早く答えた。

「知らんな、そんなことは」

「そつちの男の声に聞き覚えがある。賊の声にそっくりだ」

グリークスはシールを指差した。シールはますます意固地に口を塞ぐ。その行動が怪しすぎて、もつと疑われることは間違くなつた。カインンドは心中でシールに悪態をつく。声色を変えて話したりと他にも方法はあるだろうに。

「知らないと言つているんだ。あたし達はあなたの命の恩人だぞ。疑いをかけられること自体不愉快極まりない」

カインンドは怒りを露わに怒鳴つた。

…が、演技だと見抜いているグリークスには効かない。

しかし証拠がない。グリークス本人は憶測で言つてはいるだけだ。例えオークランドが同意しても証拠がなければどうにもならない。「では、なぜ、あの場にいたんだ？」

しつこくグリークスは食い下がる。

「あの時も言つたろう、通りすがりだ。旅をするのに理由はいるのか？大勢でお前達を殺そうとしたのを助けようと思った」

お前の命を狙つてここまできた…、自分で手で殺すために助けた…、とはカインンドには口が裂けても言えない。まさにそう言いたそうなシールを睨みつける。只でさえ疑われるのだ、これ以上意識をシールへ向けるわけにはいかない。

この場でグリークスを襲うことができたが、たちまち兵士に取り押さえられるだろう。シールかカインンドのどちらかは逃げることができるものはないが、一人でも捕まれば、聖国ドルコルド出身もバレてしまい、マルーン教皇に被害が及ぶ。

「…わかつた…早く大広間に來い」

これ以上グリークスも追求することは出来ない。諦めて部屋から出て行つた。疑いの眼はそのまで。

「危なかつたね~、カインンド」

グリークスが去つた後、シールは陽気に言つた。

「馬鹿、考える。」そのまま食事に行つたら、危険だぞ「

カインンドが怒る。

「なんで？ なんで？」

「更に根掘り葉掘り聞かれるに決まつてゐし、あんたがいつボロだすのか不安でたまらないんだよ」

シールが意外そうな顔をしたが、實際絶対にボロを出す自信は本もあつた。

「む……やばいよ、カインンド、どうしよう、でも、お肉が食べたいよ~」

「うつさい。いいか、このままノコノコと大広間に行くわけにはいかないだろ、なんとか抜け出すんだよ。それも、今から大広間までに行く間に……だ」

カインンドは覚悟を決めた。逃げなくとも、逃げても、同じ疑われる所以であれば、逃げた方が良いに決まつてゐる。なんとしても、ここから脱出しないといけない。

「う~、わかったよ~」

シールは残念そうにボヤいた。

部屋から出たグリークスを待つてゐたのは、オークランドだった。

「どうでした？ グリークスさん」

オーケランドも現場に居合わせていた結論として、シールとカインンドが、大神官デスペラド殺害の犯人だと思つてゐる。グリークスが直接2人の部屋に行くのは知つてゐたので、心配で待つてゐたのだった。

歯切れ悪くグリークスは答えた。

「ん？ ああ……間違いない……奴らが犯人だ。……だがそれは俺の確信であつて証拠がない。だから、何も出来なかつたよ」

「そうですか……確かに、確信してゐるのは僕達だけですけど、それを証明しろと言われば非常に難しいですね」

「とりあえず、大広間での食事には誘つておいたよ」「わかりました。ではルシア達を呼んできましょう」オーフランドは足早にルシアやボズがいる部屋に走つていった。

ルシア、ボズ、アリシェ、リサがいる部屋。そこに戦場に出でいたステューも戻つてきて、そこそこ賑やかな人数になつてはいるが、3人は確実に口数が少ない、もしくは喋らないので、部屋の中はしんと静まり返つていた。

口を開いたのはボズだった。…といづか彼しかまともに話さない。「ところで…前にルシアさんが、悪者、えつと、絶望神になつちやつたことがあつたよね？」

ミストラスの軍勢から逃げていた出来事のことと言つてはいるのだった。

「その時…リサがルシアさんの暴走を止めたんだけど…そつなるとリサって何者?って思うんだけどわ…」ルシアを見る。

「わからないよ、ボズ。だつて僕は、僕という人格は、その場にいなかつたわけだから。そんなリサ見た事ないし、僕達がリサのことを全然知らないのだから」

ルシアが両手を挙げながら言つた。

「そうだよね…」

ボズは腕組みし、首を捻りながら、リサの方を見た。

そのボズの疑問を察したのか、今まで無口だつたりサが突然口を開いた。

「…絶望…神…」

「え?」

「絶望紳に仕える…者」

リサの透き通る綺麗な声が、沈黙の部屋に響いた。

ウニバ

リサの生まれは、8国の内の1つ、女傑の国ガシーベだった。だが、リサはほとんどが謎であった。生まれはガシーベ。しかし、父親、母親が誰かもわからない。孤児院に預けられたのを、城の人間に選ばれて招かれた。

その理由は新しい血をガシーベに取り入れるため。つまり、各国の重役にリサを会わせ、既成事実を作るということであった。妊娠すれば、その責任問題の追及もできるし、優秀な血を授かるという政略であり、ガルド会議にリサを連れてきたのはそのためであった。偶然か、その会議は突然の事件が起こったために、ガシーベ国マリークレール女王の策略は崩れ消えた。

そのリサは、言葉を知らないと思われる程頑なに喋らず、何を考えているかわからない。ガルド会議の事件で混乱している最中に抜け出して、行く当てもなく彷徨ついているところをボズ達に見られ、一緒に行動することになった。

一度だけ、リサはボズ達に不思議な力を見せたことがある。それは、多重人格者であるルシアが、絶望神の人格に変わった時、暴走したルシアを止めたのはリサである。無言で両手を向け、ルシアの暴走を止めたのだった。

「え？ 今なんて？」

ボズがリサにもう一度聞く。

喋らないリサがやつと話し出したかと思ったら、理解不能の言葉だつた。

不思議な力を出した理由に「絶望神に仕える者」がリサの答えたつた。

「私は…絶望神に…仕える者…」

「どうしたことかな」

ルシアも意味がわからないと聞き直す。

「あ…ああ…」

リサの身体がガタガタと痙攣し始めた。

「えっ、ちょっ…リサ？」

ボズは慌てた。

「あ…あ…ああ…」

身体の機能を失い、目が呆けて、胃液なのか涎が口から流れ落ちる。リサの痙攣は止まらない。

「どうしたんだ」

オークランドが部屋に入ってきた。食事の準備が出来たことを知らせに来たのだった。リサの状態を見てすぐに近寄った。医師としての知識があるオークランドなら何が原因かわかるだろう。

オークランドが診察をしようと傍に寄った瞬間に、痙攣はピタリと止まった。

「あ…止まつた」

「どうしたんだ、リサ」

オークランドが呟いた。

突如リサが目を見開いて立ち上がった。

ボズの身体が奮えた。霧囲気がいつものリサではない。その背筋が凍る感じは、目に覚えがある。そう。ルシアが絶望神へと人格が変わった時と同じ霧囲気だった。

「…私は…」

立ち上がったリサは無口で周りを見ながら喋った。

「絶望神メンデルゴス様に仕える者…絶望紳四天王の一人…リサ…リサニース…」

「な…何を言つてるんだ?リサニース?四天王?何を言つていいんだよ」

ボズが叫ぶ。何を言つているのかわからない。当然のことボズは声を大にして言った。

リサはルシアの方を向き、ひざまついた。

「メンデルゴス様…よくぞ復活を。心待ちにしておりました」

「…残念だが、僕は絶望紳ではない。確かに何かの人格が宿り信じられないが、メンデルゴスに魂を売る気はない」

ルシアは力強くリサの目を見て言った。

リサは少しも動じず、逆に微笑んだ。

「まあ、絶望紳様、まだ完全ではないのですね。ですが、もう少しだすわ。私も完全な目覚めはまだ先…、いつの日か、必ず、貴方の傍に…」

同時にリサは窓を割って飛び出した。

「うわっ！」

「ここがどけだけの高さかわかっているのか！」

この部屋は3階である。オーランドが窓から覗くとリサの姿は見当たらなかつた。地面に叩きつけられるだろう場所にも無残な姿は確認できなかつた。

「逃げた…の？」

ボズが静かに言つ。

オーランドは外にいる兵士に指示をした。

「リサが窓から飛び出した、捜索に行つてくれ  
城内が慌しく動き始めた。

「何があつたのか？」

カインドが城の騒ぎを感じ取つた。

「つむさくなつたね～」

退屈そうにシールが言つ。

「そいいえ…何かが割れる音がしたな。何があつたかもしれない  
ねえ、ねえ、カインド、今ならさ、逃げられるかもしれないよね  
？」

シールの言葉にカインドが頷く。

「そうだな…今なら…」

カインドは扉を開け、隣にいる兵士に話しかけた。

「大広間はどうちだ？」

兵士は無言で大広間の方向を指差す。

カインドとシールは大広間へ向けて歩き始めた。この大広間までの間に逃げ切らないといけない。脱出しないといけない。カインドの目は光り始めた。

つづく

リサが絶望神の配下だと名乗り、窓から脱出したために、城の中が慌て始めた。

ズッケルアの侵略にも気を配らないといけない状況で、1人の少女を探すために人数はかけられない。しかし、リサの不可解な告白を黙つて見過ごすことは出来なかつた。絶望神の存在はそれほどまでに脅威なのだ。

「いいか、見つけても危害は決して加えるな」

オーランドの命令で数部隊が動き出した。騒ぎを聞いてグリークスが駆け寄ってきた。

「どうした？」

「ええ…実は…」

オーランドは経緯を話した。グリークスは驚きを隠せない様子だった。

「あの子が…。絶望神の…？」

「信じられないでしようが、本人の口から出た言葉です。確かにその時の彼女は異様な圧迫感がありました」

オーランドの声に嘘は感じられない。本当に絶望神との関係があるのだとグリークスは思つた。食事どころではない。

「オーランドさん、グリークスさん、兵士さん達を呼び戻して」唐突にボズが震える声で進言した。

「ボズ？」

「僕が、リサを探しにいく」

「え？」

オーランドが、グリークスが、ルシアが、ステューが、更には、親を目の前で殺されそのショックで言葉を失つたボズの幼馴染であるアリシェでさえも、ボズの言ったことに反応した。

僅か7・8歳の子供が自ら危地へ行くというのだ。戦闘経験のあ

るパール族のステューならともかく、普通の子供であるボズがやるようなことではない。

「何を言つてゐるのか、わかつてゐるのか？ボズ」

グリークスが言った。

「わかつてゐる。オーランドさんの兄弟がいつ攻め込んでくるかといふ時に、大事な兵士さんの数をリサの搜索で減すわけにはいかないと思う。それに悔しいけど、ステューは戦える。今、僕に出来ることは、これなんだ。…これしかないと！」

切実なボズの提案に、反対する者はいなかつた。

グリークスがボズの両肩をしつかりと掴む。

「危険だぞ」

「わかつてゐる」

「死ぬかもしれんぞ」

「わかつてゐる」

「危ないと思つたら…」

「わかつてゐる、すぐ逃げるよ」

真剣なボズの眼差しにグリークスは納得した。

「…わかつた。いいな、必ず、自分の命を優先するんだ」

頷くボズの傍に今度はルシアが寄ってきた。

「ルシアさん…」

「ボズ…、僕の目を見てごらん」

「え…う、うん」

ボズはルシアの瞳を見つめた。ルシアの吸い込まれそうな綺麗な瞳の奥に光を感じた。その光は、輝きを増し、希望となり、ボズの身体に勇気として糧となる。

「…うん。いい目だよ、ボズ。大丈夫、氣をつけるんだよ

ルシアの一言でボズの緊張は和らいだ。ルシアには癒しの特別な力があるかのように思えた。

「ボズ」

オーランドが少し汚れた弓を差し出した。年季の入った弓で高

価な物に見えた。

「これは僕が小さい頃に訓練として使つてきた弓道具だ。汚れてはいるが、子供用として君にはぴったりだと思います」

「ありがとう、オーランドさん」

「敵に遭遇した場合、間違いなく接近戦は自殺行為だ。弓ならば、遠距離や逃げる時にもなんとかなるだろう。使い方はわかるかい?」  
オーランドは丁寧にボズに教えた。かつて先生であつたペッチエルの厳しい指導を思い出す。

準備が整い終わった頃に、ステュードが近寄ってきた。

「…」

「な、なんだよ」

寄つてきておいて相変わらずの無口さに不気味さを感じる。

「…敵はお前を見て、安心するだらう、お前のような弱々しい奴が弓で構えてたつて、何の恐怖も感じないからな」

口を開いたかと思うと腹の立つ憎まれ口にボズは憤慨した。

「つむさい、あっちへ行けよ!」

「……だが、それが、逆に勝利への道に繋がる…」

「…っ!」

ステュードはそのまま何も言わずに離れていった。

「…あいつ…」

ボズは大きな不安を感じながら、リサを追つために立ち上がった。

「じゃあ、いってきます」

手を上げたボズの目に、アリシエの心配そうな顔が映った。かすかに口が震えている。声を出そつと必死なのだ。

だが、声はない。

それだけで充分だつた。

ボズには聽こえた。アリシエの心の声が。

『気をつけて…』

ボズの勇気は何倍にも膨れ上がり、若さに満ちた身体は勇ましく城から飛び出した。

「…ねーねー、カインドオー、」ここ何処おー？」

「うつさいーあたしが悪いのか？あたしが悪いのか？シール、あんたじゃないのか？」

「ええ～僕はカインドの後を付いていつただけだよ～」

城内。

食事のある大広間へ向かう途中、リサのせいで騒がしくなつている状況に便乗して、カインドとシールはなんとか抜け出そつと行動を起こした。

…のだが。

どうやら、入り込んだ場所が悪く、更に監視役の兵士に怪しまれ、逃げるに逃げれなくなつてしまつた。

「くつそ、あたしとあらう者が、こんな小さな城の中で迷うなんてつ！」

「あはは～、やつぱ、迷つたんだ」

「え～い、うつさい！何か考えろ、何か！」

カインドはシールの頭を殴つた。

「痛あああああ！痛いよ～カインド～。じゃあさ、あの窓から逃げようよ」

シールは頭を触りながら、小さな窓を指差した。とてもじゃないが、人間の身体が抜けられる大きさではない。

カインドは溜息をつきながら、窓へ向かう。

「馬鹿シール、こんな窓、どうやつ……」

カインドの言葉が止まる。窓の外に目をやつた直後のことだった。シールは首を傾げる。

「どうした～の？」

「…シール、戻るよ」

「ええ～？逃げないの？逃げるつてゆつたじやん」

カインドはシールを横切つて部屋から飛び出した。

当然2人を探していた兵士達は瞬く間に2人を囲んだ。

「ほらみる～、ば、ば、ば、馬鹿力インド～！」

囲まれても全く焦りを感じずに、カインドは城内に響く程の大声で叫んだ。

「敵襲だ！」

同時に、爆発音が鳴り響いた。

♪第6章 それぞれの思惑 終 ♪ 第7章につづく♪

爆音と一緒に城が地響きを立てて震えた。

今この状況で、ズッケルアの軍が攻めてきたのだった。

「この音は…」

オーランドが叫んだ。

「ヒュアスとペッチャエルが真っ青な顔で慌てて駆けてきた。

「敵襲です、王子、砲撃です」

「それだけじゃないぞ、姿こそ見えんが、町の周りが異様な空気に感じられる」

「…なるほどな、砲撃で気を反らせながら、着々と周りを固めていくつてわけか…」

グリークスが独り言を始める。

「恐らく、砲撃隊はほんの数人で砲撃してるのだろう、町は既に奴らに囲まれているといつてもいいな、後は隙を見て、突入してくるつて寸法だ」

「どうすれば…グリークスさん」

オーランドが頼り切った目でグリークスを見つめる。

横から静かにルシアが喋った。

「砲撃は何処からきたのですか？」

その言葉にグリークスは頷いた。

「そうだな、味方同士の被害を避けるために、砲撃があつた場所の辺りには奴らはいないだろう、巻き込まれるからな。そこ以外を守ろう、城を中心にだ、町に侵入されることは仕方ない。至急兵をまとめるんだ」

「…うむつ、わかつた」

ペッチャエルが同意し、行動に出た。

「砲撃は、右の城壁にありました」

「ヒュアスが指差して言った。

「確かに、あの方角には丘があった。もしかしたら、そこに部隊がいるかもしない」

「だが、かといって、そこだけに兵隊を集めることにはいかん。砲撃隊討伐は最小限の数で行わねばならない」

グリークスは考え込むが、すぐに結論を導いた。

「そうなると、『暗殺』……だな」

視線がステューへ向けられる。

「……」

何も言わずにステューは頷いた。

「まつ、待ってくれ、私も連れて行ってくれ」

「ヒュアスが進言した。オークランドが驚きの表情を見せた。

「何を言っている二ヒュアス。お前は、戦闘向きの人間ではない。危険だ、認めない」

「ですが王子、私は悔しいのです。我が国のことなので、グリークス殿が手を貸してくれていい。更には、あんな小さな子供まで……」

ステューとボズのことを言っているのだろう。

「そこへ行くと私は何をやっているのだ。ただ、ここで指を咥えて、悪態をついているだけではないですか。私だって、国のために何か役に立ちたい。決して迷惑はかけません。どうか私を……」

「二ヒュアス……」

オークランドの肩にグリークスの手が触れる。

「決めるのはお前だ、オークランド」

「グリークスさん」

オーケランドはしばらく考えていたが、決断した。

「わかった。すぐに出発だ、準備をしろ」

「……っ！あ、ありがとうございます」

二ヒュアスは一礼をし、グリークスの傍に寄つた。

「今までのご無礼謝罪します。どうか……城を……よろしくお願ひします」

「す

グリークスは笑つた。

「硬いんだよ、あんたは。ここは任せろ」

ニヒュアスも笑顔を見せた。初めて見せた笑顔だった。

「カインド～、どうすんのぞ」

シールが言った。返り血を浴びている。

足元には兵士達の死体が転がっていた。

先程の砲撃で慌てた兵士の隙を突いて、カインドとシールは剣を奪い、一気に形勢を逆転させていたのだ。

「任務は続行だ、シール。グリーケスを始末する」

カインドは歩き出した。その顔は暗殺者の顔だった。

前の状況ではどうすることも出来ないために、逃亡」という選択しかなかつたのだが、今は違う。この混乱に乗じて目的を達成することができた。グリーケス殺害という目的を。しかも、既に城内である。こんな好機は滅多にない。

「あいあ～い」

カインドの後にシールが続いた。

リサは爆音などを全く気にかけず悠々と笑いながら歩いていた。高所から飛び降りたにも関わらず、無傷である。

リサはオーネランダ達と一緒に旅をしていたのだが、突如自分は絶望神の配下だと告白し、無口で何を考えているのかわからなかつたのだが、別人のようになってしまい、遂には逃げ出したのだ。

町の周りは確かにズッケルアの兵士が潜んでいた。

リサはまるで道端の石ころのような扱いで軽く兵士達を横切った。驚いたのは兵士である。いきなり出てきたかと思つと無視してすり抜けたのだから。

「おっ、おい、貴様、待…」

兵士達はリサを止めようと身体を掴んだ。

「私に…」

リサの瞳が青く変色し、兵士を睨んだ。

「触るな」

ホンの一瞬その場に青白い光が放たれた。叫ぶ間もなく兵士達の全神経は破壊され、意識を失い、倒れた。もはや一度と立ち上がるこいや喋ることや考えることは出来ないであろう。

「ふん」

リサはまた歩き出した。

その青白い光を見た者がいる。リサを連れ戻すために追っていたボズだった。

つづく

「あれは、あの光は……？」

リサを追いかけていたボズは青白い光を見て疑問に思つた。城からは飛び出したのはいいが、どこをどう向かえばいいのか皆見当つかなかつただけに、ボズの目にはあの光は一筋の光明に映つた。

ボズは光が放たれた方へ走つていった。

その光は、実際にリサが放つたもので、ボズの向かう道は正解だつた。

「うわっ」

ボズは行く道の途中で倒れこんでいるズッケルアの兵士達を見つけて思わず声を出した。死んではいないが、全く動いていない。

「な……なんだ……」

リサの放つた光は、人間の神経を破壊する光で、兵士達はその謎の光を浴びてしまつたために、動くことや考えることができなくなつたのだ。いわゆる植物人間になつてしまつたのだ。

グリークスがボズに言つた忠告として、『自分の身が危険ならば逃げる』ことがあつたが、ボズにはそんな気はなく、動かない兵士に驚きはしたが、その先に必ずリサがいると確信した。ボズは更に突き進んで行つた。

リサは足取り軽く歩いていた。

笑顔で歩く彼女の意識はまだ絶望神への配下であるリサニースなのだろう。

笑顔が止み、足が止まる。

「……誰……？」

リサが淡々と言つた。

森の影から1人の男が現れる。

「久しぶりだな、リサニス…」

男は笑うこともなくリサに話しかけた。

「お元気そうね、ヌアリス」

リサも男、ヌアリスを知っている。

絶望神四天王の一人、獣使いのヌアリス。先のガルド会議が絶望獸によつて襲撃されたが、その絶望獸を召喚したのはこの男である。聖国ドルコルドの人間として。

「ガシー・ベ国はお前が消えたということで大騒ぎだぞ」

「ふん、私の意志で消えたわけではない。もう1人の役立たずな私の行動だ」

三つ編みをしていた紐を解き、髪をかきあげる。

「我々は同族ゆえ、お前の場所は把握できたがな、何かあつたのか？」

ヌアリスが聞く。

リサは無邪気に笑顔を見せた。

「旅の一行に合流していらっしゃいのだがな、そこで、なんと絶望神様とお会いしたのだ」

「なんだと！ 本当かそれは！」

ヌアリスは驚いた。

「私と同じで、人間の身体に封印されていたのだが、間違いなく絶望神様の鼓動は感じられた。必ずいる」

「なるほど。ではマルーン教皇へ報告をしておこう。お前もこのままガシーベ国へ戻るがいい」

ヌアリスはリサの表情が一瞬変わったのを見逃さなかつた。それだけで全てを悟ることができた。

「そうだな…。だが、その前に、やることがある」

リサは振り返つた。

「うむ。ネズミがいるようだな」

ヌアリスもその方向を見つめる。

「見つかった」

ボズは恐怖で凍りついた。

そこまで近づいていない。ある程度の距離を保っていたはずだ。なのに。リサと得体の知れない男の2人はボズがいる場所を見ている。

よりによつて、リサだけではなく、もう1人いるなんて。ボズは考える。まずはその場から離れないといけない。攻撃をされたらおしまいだ。

弓を用意しながら、素早く動き始めた。

「動いたな」

ヌアリスはボズの動きを把握していた。

「何者だ？」

リサに聞く。

「旅を一緒にしていた奴らだとは思うが、誰かはわからないが、あの御粗末な動きは、子供のようだ」

リサは構わず歩き出した。

「とりわけ気にするような存在ではない」

ヌアリスは鼻で笑つた。

「そうだな、何も出来るわけがないだろうしな」

2人はボズの存在など気にもせずに歩きを始めた。ひゅつ。

同時に1本の矢が解き放たれた。

その矢は見事ヌアリスの背中に突き刺さつた。

蚊にでも刺されたような顔でヌアリスはリサを見た。

「ほう。ネズミはネズミでも牙を持っているようだな」

リサは感心し、ヌアリスの矢を抜いた。

「リサニス、ここは任せてもらおうか」

怒りもなくヌアリスが言つ。

「絶望獣でも召喚するのか？」

「いや、ジャムを召喚するには時間がかかりすぎる。たかがネズミ一匹自ら殺る」

ヌアリスの目が殺意に輝く。

オーランド陣営。

大砲の攻撃を繰り返し受けている状況で、恐らくは着々とズッケルア軍は進んできているだろう。城内は恐怖と不安で包まれていた。頼みはステューとニヒュアスが砲撃隊を叩き潰すこと。

それを前提として作戦を練らねばならない。

グリークスは集中していた。誰にも話しかけられない雰囲気を出していた。

「グリークスさん…」

オーランドが邪魔と思いながらも話しかける。

「今は、待つだけだ。砲撃が止んだ時、形勢は変わる。必ず…な」

グリークスは静かに言った。

「ニヒュアス、ステュー…」

オーランドは心配そうに丘を見上げた。

つづく

ズッケルアの砲撃部隊は、わずか3人の編成であった。弾を込んで、火を点ける。2人で本体を押さえる。残った1人は、ズッケルア屈強の戦士、ラクシードという巨漢の男だった。大槌を武器に部隊に攻め込んでくるであろう敵を迎えて討つために立ち塞がっている。

「やはり、3人というのは…心配なのだが…ラクシード殿」

2人の砲撃隊の内、1人が不安気に言い出した。

それを聞いたラクシードは大きな身体を揺らしながら笑った。

「ぐははは、何を言つておる。ここにこのワシがあるので、安心しているがいい。それにここでの討伐に大勢を費やすわけにはいかないはず、少数であれば、ワシの敵ではないよ」

自信たっぷりで豪快に笑うラクシードを見て、砲撃隊はほっと安心した。

ここに砲撃隊と同じくらいに、いや、それ以上不安な気持ちになつている人間がいた。

「…だ…大丈夫か…? あんな大男…」

この砲撃隊を討伐すべく出撃したオーランド側の2人。暗殺を得意とするパール族のステューと、オーランド側の政を担うニヒュアス。不安な声の主はニヒュアスだった。

なんとか役に立ちたいと、この討伐に立候補し、ステューに付いてきたのはいいが、戦争はおろか、戦うことすらも経験のないニヒュアスはラクシードの姿を見て完全に怖気づいてしまった。

「大丈夫とか、そんなことは、考えてはいけない。我々の目的はあの部隊を全滅させること。それ以外の感情は持ち合わせてはいけない」

冷静にステューが言つた。さすがにパール族として育てられただ

けあつて子供でも暗殺者としての心得はあるよ。うだ。

「時間がない。いくぞ！」

あつらかんとステューハは言った。

え？ いくこ

ヒュースが聞き直す。

「あの、大男は俺が倒す。あんたは砲撃隊の2人を倒せ！」

それだけ言うと、ヒュースの驚いた顔を横目にスティーヴンが飛び出

七  
十九  
二  
五

卷之三

「來たようだな

ラクシードは嬉しそうに言った。

砲撃隊の焦つた表情を見て、ラクシードは引き続き砲撃を続けることを指示した。

パキツ。

小枝を踏んだのが軽い音か鳴った

卷之三

「カシマの懲り」

二八二二 第一戸

だが油断はしていない。こんな大事な状況で襲撃にくるような者だ。例え子供でも何かある。しかもその子供は片腕なのだ。ラクシードには誰だろうと侮ることはない。

ステューの腕がキラリと光る。腕が刃に変化していた。

パール族は身体の一部を変化させることが出来る。暗殺集団、一

旅が差引されたのはそれが理由の一つですか

ガキン。

ステューリーを弾く。

「…お主…その腕…その刃…なるほどな…パール族か…」  
ラクシードはその一撃で全てを理解していた。

「…」

ステューはすっかり無口になっていた。以前は兄と姉の存在で安心している部分もあつたのだろう、子供として遊び心もあつたのだが、その兄姉の死で心を閉ざしてしまった。そのせいか、本来の暗殺者としての意識が芽生えたのは確かである。暗殺者は無駄口は叩かず、目的だけを遂行する。からうじてボズの影響で子供の部分が存在している。

「お主だけではなからう。恐らくお主はワシの足止めだな。もう1人…もう1人が砲撃手を狙う手筈か」

「…」

「ぐはは、子供とはいえ、立派な戦士の目だな。ワシも全力を持つてお主と対峙しよう」

ラクシードは大槌を振り回して構えた。

ステューは危険を感じていた。あの巨体に似合わず、素早い動き、大槌を簡単に振り回す力。全てにおいてステューが圧倒的に不利である。唯一勝てる要素は、早く動くことが出来ることだけである。

ニヒュアスはステューとラクシードを見ていたが、足がすくんで動けなかつた。

自分は戦いに向いていない。そう思わざる得ない。

ステューが戦っている間に砲撃隊を倒さねばならない。  
やるべき事がある。恐がつてゐるわけにはいかない。

ニヒュアスは震える足を抑えながら立ち上がる。  
行くしかない。腹を括つた。

「さあ、こい、パール族  
ラクシードは誘う。

「…」

それでも何も言わずステューは機を狙っている。  
狙いは決まっている。待つしかない。その一瞬を。  
ガサツ。

ニヒュアスが動き出した。

ラクシードの視線がそちらに動く。  
まさに、その時が、ステューの待っていた機会だった。  
ステューはラクシードに襲い掛かった。

つづく

ラクシードは油断していたわけではなかつた。感覚を研ぎ澄ませたのが仇となつたのだ。ニヒュアスの出現で無意識に視線が動いた。パール族の子供、ステューが狙つていたのはこの瞬間だつたということを理解した。

「うむ、賢いな」

ラクシードは感心した。大槌は破壊力はあるが懷に入られると思うように動けるわけではない。戦闘経験の多いステューは瞬時にそれを見切つていたのだ。

ラクシードの視線が他所に向かうまで辛抱したのはステュー手柄ではある。しかし、大槌を持つ戦士は懷に入ると脆いという考え方には、甘かつた。

「…！」

ステューの目にはラクシードの笑い顔が映つた。

ラクシードの大きな丸太のような足がステューの顔面を捉えた。グキッと鈍い音がして、ステューが大きく吹き飛んだ。

「ぐはは、狙いは良かつたがな。自分の弱点くらい自分で把握してあるわ。小さいお主が狙う所といえば一つしかない。ワシはいつでも反撃できるように準備していればいい」

ステューはヨロヨロと立ち上がつた。

「最も、ワシの視線が外れる瞬間に飛び込んでくるとは思わなかつたがな、おかげで致命傷まではいかなかつたようだな」

ラクシードはステューの様子を見た。足がガクガクと揺れている。脳が揺れていいるのだ。最早戦力にはならぬだろうと判断した。

「…であれば、もう1人の敵を排除する。」

ラクシードは砲撃隊の方へ振り向いた。

意を決して飛び出したニヒュアス。

訓練では何万回も扱つた剣。それが今、初めての実戦で剣を振るう。

城を砲撃で破壊される。これ以上好きにさせることは、例え同じ国同士の人間でも許すことは出来なかつた。

なりふり構つていられない。ニヒュアスは2人の砲撃手に襲い掛けた。

「うつ…うわああああ」

ラクシードへの絶対的な信頼のせいか、砲撃に集中していた砲撃手の2人はニヒュアスが襲つてきた時は全くの無防備だつた。

「うわあ！」

ニヒュアスの一振りで1人の砲撃手の首が飛んだ。ニヒュアスも狙つていたわけではなく偶然の結果で、勢いをつけて振つたためである。

「なんだ、貴様」

そのままの勢いでニヒュアスは横に剣を振り切つた。

剣は砲撃手の片腕を飛ばした。

「ぎやあああ」

砲撃手は叫びながらその場に倒れた。

ニヒュアスは見事初陣で2人の兵士を倒すことに成功した。

「や…やつた…」

興奮してニヒュアスはステューの方へ振り返つたが、そこにはステューはいるが、相手のラクシードがいなかつた。

突如ニヒュアスの頭上を覆う黒い影。

巨漢の大槌使いのラクシードだつた。

「…！」

言葉が出ない。

「貴様あ…よくも我が砲撃手をお

ラクシードは大槌を振りかぶつてニヒュアスの頭上へ振り落とした。

ズトン。

地面が揺れる程の音が鳴る。

「むう。すばしっこい奴め」

ラクシードが唸る。

間一髪ニヒュアスは大槌をかわしていたのだ。だが、腰が抜けて思つようにな動けない。次は間違なく殺られる。ニヒュアスは恐怖した。

「次で終わりだ！」

ラクシードの巨体が近づいてくる。地獄への使者に見えた。

何とか剣を構えて威嚇してみるが、一目でニヒュアスの未熟さに気付いているラクシードは鼻で笑う。

「ぐはは、切れるものなら、かかるて來い、貴様にこのワシが切れるのであればな」

ニヒュアスは死を覚悟する。思うは国の未来、世界の未来。オークランドの未来。王となるオークランドの姿を見たかった。

ニヒュアスはステューを見る。ステューと目が合つた。死を覚悟した人間の気持ちは考えられない力を發揮するのだろうか。ステューの脳裏にニヒュアスの考えが、覚悟が伝わった。

ステューは身体をなんとか建て直し始めた。

ラクシードはニヒュアスの前に立ちふさがった。

「覚悟はいいか？」

ラクシードは大槌を振りかぶった。

ニヒュアスが目を光らせる。

「今だああつ！」

ニヒュアスが叫んだ。

「なんだとお！」

呼びかける叫び。この場で呼びかける仲間は1人しかいない。

ステューだ。

ラクシードは身を翻してステューの攻撃を防ぐつとニヒュアスを背に振り返った。

「ぬうつ

だが、ステューは確かに動いている。しかし、先ほどの攻撃が回復してないのだろう、全く進んでいない。攻撃など出来る距離ではない。

ラクシードの太ももに激痛が走る。

「ぐぬつ

ニヒュアスがこの隙を突いて剣を刺したのだ。

「貴様！騙したのか！卑怯な奴めえ

「卑怯ではない、作戦と言え」

ラクシードは力の限り大槌を振り落とした。

「さらばです。オーランド王子

それが、ニヒュアスの最期の言葉だった。

ニヒュアスの身体は大槌によつて吹き飛ばされた。全身の骨が折れ、意識は一瞬で遠のく。即死だつた。

「ぐはは、どうだああ

刹那。

ラクシードは殺氣を感じる。ステューがいた場所から。

「まつまさか

全てはニヒュアスの作戦だつた。叫んだのも。太ももを刺したのも。自分が死ぬことも。全てニヒュアスの計算だつたのだ。

ステューが一気に距離を詰めていた。誰よりも素早く動くその能力を使って。そして、身体の一部を刃に変えるパール族の能力で切りかかった。狙うはラクシードの喉。

ラクシードは振り返つて反撃できる術はなかつた。太ももの深い傷はその巨体を支えるだけで精一杯だつたのだ。とても攻撃に転じるようなことは出来なかつた。

「やられたわい……

ラクシードはニヒュアスを思い浮かべ、笑う。

ステューの刃はラクシードの喉を貫いた。

つづく

「砲撃が…」

「やんだ…」

次々に口にする兵士達を見ながら、オークランドも同じことを考えていた。

ズッケルアの砲撃隊討伐に出たステューとニヒュアス。しばらくしてその砲撃が無くなる。それは討伐が成功したのだということを意味していた。

「どうやら、なんとか、やつてくれたようですね」

後ろからルシアが話しかけてきた。

オークランドは安心したように頷いた。

「ああ、ほっとしたよ」

ステューも心配だったが、それよりも実戦経験のないニヒュアスの方が心配だった。砲撃が止んだことにより、オークランドの気持ちが少し緩んだ。

その緩んだ気持ちを締め直すかの如く、グリークスが口を挟んだ。  
「安心してる場合じやないぞ、これから、ズッケルアの軍隊が怒涛のよう攻め込んでくる。防御の準備は大丈夫か？」

「うむ、大丈夫だ。配置は整つてある」

疲れきったペツチエルが自信を持つて答えた。

「大丈夫ですか？先生」

オークランドが気遣う。

「なあに、あのニヒュアスも頑張つておるのだ。弱音を吐くわけにはいかんよ」

ペツチエルは大声で笑つた。

現実とは憐いものである。砲撃が止んだからといって仲間が生きているとは限らない。事実、ニヒュアスは帰らぬ人となっているのだ。この悲しみをオークランドもペツチエルも知らない。今はズッ

ケルアの攻撃を凌がねばならないからだ。

ズッケルアの陣営。

「砲撃が止んだみたいですね」

戦士サー・ポーが軽い口調で言った。

続いて老騎士ブルガスが意外そうに口を開く。

「まさか、あのラクシードが殺られるとはのう…」

ズッケルア王子は憮然とした表情をしていた。

「大丈夫なのか？こんな調子で？」

「ご安心ください、王子。全ては作戦通りでござります」

指揮官のガルヌが自信を持つて喋りだした。

「元々、あの砲撃隊の配置は、オークランド王子の城を我らの軍が囲うまでの時間稼ぎのための配置。確かに止んだということは、砲撃隊やラクシード殿が倒されたはずです。勿論倒されることは予想外でしたが。ですが、囲いも完了し、これからが本番です。見ていてください」

ガルヌの顔が勝利を確信した満ち溢れた顔付きになっているのをズッケルアは見た。

「わかった。任せよう、ガルヌ」

ズッケルアは言った。

森林。

リサを追いかけたボズが、窮地に立たされている。

リサには仲間がいた。ガルド会議の混乱の原因であるヌアリストいう男。隠れていたボズはあっさりと見つかり、なんとか矢で攻撃を図るが全く効かず、逆に命を危険に晒している。

「ヌアリスト、さっさとカタをつけな」

リサが腕を組んで苛立たしく言った。

「わかつていいる、リサニス。まあ、少し待て」

ヌアリスは獲物を狩る狼のように余裕を見せながらボズとの距離と縮めていった。

一方逃げ回っているボズには、次の一手などがそろそろ思いつくはずもなく、同じ箇所をグルグル回っていた。

それがわかつていながら、ヌアリスは先回りをする様子もない。楽しんでいるのだ。絶対に、負けるわけがないと思つてゐるからだ。

「くつそ、馬鹿にして」

悔しがるボズの頭に、城から出る前のステューの言葉が蘇る。

『敵はお前を見て、安心するだろ？』だが、それが、逆に勝利への道に繋がる』

ボズが閃く。これしか思い浮かばない。引き返すつもりは初めからなかつた。命を賭けるというのはこういうことか。ボズは気合を入れる。

ボズは森林の中から飛び出した。リサが立つてゐるのが見えた。状況からいってリサが加担することはないと踏んだ上である。

一緒にヌアリスもゆっくりと茂みの中から現れた。

「…覚悟を決めたのか」

残念そうにヌアリスは言った。もっと狩りを楽しみたいといったふうだ。

「うつうわああああ！」

ボズは矢を取り出して、何度も何度も矢をヌアリスへと放つ。力がなく、訓練をしていないボズにとつていきなりの弓矢は至近距離でないと威力はない。力いっぱい弓を引くことができないからだ。間合いをとつてゐるヌアリスに威力のない矢など効くはずもなく、簡単に素手で弾き返される。

かろうじて、ボズの認めるべき点は、狙いだけは外すことなくヌアリスの頭、喉へと放つてゐる。これは故郷ゲルニア国でボズの唯一の仕事であるガイという魚を捕る時に狙いを付けながら取ることが日課だったためだ。

「ふん、本当にただのネズミだな…つまらん」

「さつ、最後の一本！！！」

ボズは叫んで弓を引き狙い付ける。だが、足を滑らせてボズは倒れこんだ。同時に矢は虚しくも空に向かって真上へ大きく放たれてしまつた。

「ああつ…」

「終わりか…もう少し楽しませてくれると思ったがな…」

ヌアリスは溜息をついてボズへと近づいた。

「あつ、ああ、たつ、助けて！お願い助けてよ！」

ボズは土下座しながら拝むように懇願した。

「情けない、子供とはいえ、お前には誇りがないのか」

呆れたようにヌアリスは最期の止めどボズに手を下そうとした。その時。

「待て、ヌアリス」

突然のリサの声。ボズの身体が強張る。

「どうしたリサニス」

「その子供…ふふん…小賢しい。短剣を隠し持つているぞ。お前も、油断しそぎだ。もつと注意しろ」

「……つ！」

ボズは絶句する。

「…ほう、そういうことが、俺が近づいてくるのを待つて、短剣で攻撃か…なかなか考えているじゃあないか」

感心したようにヌアリスが鼻で笑う。

「だが、タネが見えた以上、もはや何もないだろう。終わりだな。死ぬがいい」

再度ヌアリスが止めを刺すためにボズへと近づいてきた。

「…結…、お…、油…、した…だ」

ボズが何か口走った。リサとヌアリスには聞き取れない。

「…何か言つたか？それとも死ぬ恐怖で狂つたか？」

「…結局、お前は、油断したんだ。僕を甘く見たんだ。だから気付

かなかつた。気付くわけがなかつた。僕が狙つてやつたなんてこと  
は、認めないはずだから」

「何？」

「ドン！ ツ！」

ヌアリスの首後ろに衝撃が走る。1本の矢が深く突き刺さつてい  
た。

ボズは目の前にいる。なぜ後ろから矢が飛んでくる？ まさか他にも  
仲間が？ いや、気配はない。なぜ？ 後ろから？

ヌアリスは愕然とした。違う！ 後ろではない。上だ。空から矢が  
落ちてきたのか。さっきの最後の1本。空へと誤つて放つたあの1  
本が勢いを増して落ちてきたのだ。こんな偶然が… 偶然？ いや… 狙  
つていたのか！

ボズは素早く短剣を出し、それを矢の代わりとして弓を引いた。  
切つたり刺したりするよりも矢の代わりにした方がよっぽど威力が  
あることを理解していた。

「ここの距離なら… 僕の力でも！」

「貴様…！」

ヌアリスは叫ぶ。

「狙いは… 狙いだけは… 自信あるんだあ！」

ボズの咆哮と共に解き放たれた短剣はヌアリスの額目掛けて襲い  
掛かった。

ガキンッ！

しかし、短剣は、ヌアリスの尋常ではない腕の動きによつて、額  
に刺さることなく、弾き返された。

起死回生で放つた短剣は、乾いた音を立てながら地面に転がつた。

「…ぬう」

ヌアリスは首後ろに刺さつていた矢を抜いて、真つ青に絶望の顔  
をしているボズを見下ろした。

「あつはつはつ、やられたねえ、ヌアリス」

大笑いしてゐるリサをヌアリスは睨む。

「貴様……名前を聞こい」

「あ……う……ボ……ボズ」

名前を聞いたヌアリスは満足そうに頷いた。

「お前のその勇気に敬意を払つて、お前を生かしておいで。またいつか戦うこともあるだろう、その時こそ、命を貰い受ける。強くなれ、ボズ。そして、これから世界へ伝染する絶望といつづの渦に立ち向かつてくるがいい」

「んじゃあね、ボズちゃん、絶望神様によろしくね」  
リサとヌアリスは森の闇へと消えていった。

「う……く……」

ボズはその場に仰向けに倒れた。疲れがドッと溢れ出た。脂汗が留め止めもなく身体中を流れる。

「……なんだよ、逃げられてるじゃないかよつ、僕の馬鹿野郎！」

自分で自分に悪態をつきながら、ボズは少し眠るために目を閉じた。

ついで

オークランドの元に兵士がやつてきた。

「王子、兵の配置完了です。問題はありません」

「わかった」

オークランドはグリークスを見る。何も言わずにグリークスは頷く。

砲撃の攻めと一緒に城内へ攻め込んでくるズッケルアの作戦をなんとか防いだとオークランドは思った。砲撃隊を止め、各方向に兵士を配置する、いつ攻め込んできても迎撃できる態勢は整った。

「長期戦になりますが、なんとかなりそうですね」

オークランドは言った。

だが、グリークスは考え込んでいる。何かを思い出すようじっと集中していた。

不安要素があるのだろうか？ オークランドには思いもつかない。

「…」

突如、グリークスの顔から血の気が引いた。

その異様な表情に、ルシアとオークランドは気付く。

「どうしたのですか？」

ルシアが聞いた。

「…しまった…」

グリークスは呟いた。

「えっ？」

何のことと言っているのかわからない。オークランドは聞き直す。

「馬鹿だ、俺は」

悔しそうにグリークスは自分の拳を壁に叩き付けた。

その音で、兵士に指示を出していたペツチエルも駆けつけた。

「なんだ、何か問題でもあつたか？」

「問題なんてもんじゃない。致命的な事になりそなんだ。くそつ、

俺のせいだ

「グリークスさん、説明してください。今までは何がなんだか

…

オーランドが悔しがるグリークスを止める。

「……砲撃隊は右の城壁からの攻撃だったな…」

唇を噛み締めながらグリークスは話出した。

「ええ」

その場にいた全員が首を縦にふる。

「それで、俺たちは砲撃隊を討伐するために、ステューとニヒュアスを送った。結果、砲撃が止んだ。彼らがなんとかしてくれた。そこまではいいな…？」

「もちろんだ。わかりきってるではないか」

早く本題に入れとばかりにペッチャエルが荒々しく言った。

「では聞くが、砲撃隊が一部隊だと…誰が決めたんだ?」

唐突なグリークスの質問に言葉が出ない。

「僕達です」

ルシアが冷静に言った。既に理解をした顔である。

「その根拠は? 城の周りを事前に調べたか? 砲撃隊が潜む場所はあの丘以外にはもうないのか? ……そう、全部僕達の先入観だつたんだ。砲撃が止めば、もう、砲撃は『2度とない』という勝手な思い込み…」

「つまり…」

オーランドが言いかけた時、左城壁から、先ほどと同じ爆発音が響いた。

「砲撃隊は、2部隊用意していたのだ  
ズッケルア陣営。

指揮するガルヌが満面の笑みでしてやつたりと誰に言つてもなく口を開いた。

「さすがだのう！ガルヌ殿」

老騎士ブルガスが賞賛する。

「今です！全軍、突入してください！」

ガルヌが叫ぶ。

「おっしゃああ～！血が滾るわい！」

ブルガスが喜び勇んで戦場へと向かった。

「見事、ガルヌ」

ズッケルアが言う。

「ありがたきお言葉」

ガルヌが礼をした。

「では、私は指揮をするために、もう少し、前線へ行きますので…」「うん、わかつた。気をつけてな」

「サー・ポーお前はズッケルア王子の身を命に代えても守れ。いいな」

「わかつてますって」

余裕たっぷりにサー・ポーが言った。

「ぬううつ！なんてことだ！砲撃部隊がもう一隊潜んでおるとは…」

ペッチャエルが唸る。

「攻め込んでくるぞ！迎え討つんだ！」

グリークスが指示を飛ばす。

もう一つの砲撃隊を討伐に行く時間も人もいない。危険だが、城の中に入れないと対抗するしかない。その間に手を考える。全ては自分の責任だ。城の中には町の民がいる。殺させるわけにはいかない。グリークスは可能性の低い展開に絶望を感じずにはいられなかつた。

「む…迎え討てえ！」

ペッチャエルが兵士達の士気を上げようと猛然と走り出した。

オーランド側の兵士は完全に浮き足立っている。安心しきつていたところへの砲撃である。慌てないという方がおかしい。

「オークランド、ルシア、君達は早く安全な場所へ」

「待つてください、グリークスさん。こんな状況で隠れるわけにはいきません」

「何を言つているんだ！お前がやられたら終わりなんだぞ。なんとかすると言つた以上、ここは俺の責任だ。必ずなんとかする。早くお前達はここから離れる！」

グリークスはオークランドの身体を追いやるように押した。

その時、オークランドの視界に入る影が2つ。見た事のある2つ。覚えのある2人。絶望が輪をかけて絶望をいう事態を大きくする。

「グリークスさんっ！後ろ！！」

オークランドの叫びに、振り返る。

そこには。迫つてきているのは。

グリークスの命を狙つていた、あの2人。男女。

オークランドの兄ミストラスの命を奪つた2人。グリークスの父デスペラドの命を奪つた2人。

赤い髪のカインドと金髪のシール。

「こんな時につ

グリークスが言つた。

「こんな時だからこそだよ、グリークス。あんたの命貰い受ける」カインドが短剣をちらつかせて襲い掛かる。

「覚悟だぞ～！！！」

シールも楽しそうに飛び掛つた。

「ぐつ…」

焦るグリークスの横で剣を抜き構えるオークランド。

「なつ、お前…何をしてる？」

「これでは、隠れるわけにはいかなくなりましたね。一度に2人は無理ですよ、グリークスさん。僕も戦います」

「ば…馬鹿なこと…を…」

グリークスは言葉を途中で切つた。オークランドがここで素直に自分を見捨てて逃げるような男ではないことを知つてゐるからだ。

「気をつける」

「はい」

グリークスとオークランドは戦闘態勢に入った。

カインンドとシールの最初の一撃を2人はなんとか跳ね除ける。

「ふん、時間の問題だよ」

カインンドが吐き捨てるように言つ。

それどころではない焦りがグリークスの脳裏を駆け巡る。今、城内は大変なことになつていてははずだ。砲撃とズッケルア軍の攻め、それを迎え討つペッチャエル率いるオークランド軍。戦力は明らかにズッケルアの方が上だ。こんなところで足止めをくらつている場合ではない。なにか、方法はないのだろうか…。

2人の戦いを見ていたルシアが歩き出した。その先は戦場である。「おつおい！」

「ルシア！？」

オーケランドとグリークスが叫ぶ。

カインンドもシールも何事かとルシアを見る。

「僕の身体に、神が宿っているのなら。今こそ、それを發揮する時です。僕がなんとかします。2人はそつちの戦いに集中してください」

淡々とルシアは言い、再び歩き出した。

「それは駄目だ、危険すぎる！」

真っ先にオーケランドが反対した。あの時の恐怖を目の当たりにしているからだ。

ルシアの身体に2つの神が宿っている。1つは太陽神、もう1つは絶望神。2つの相対する神が1人の人間の中に宿っているのだ。いわゆる3重人格。ルシア自身もよくわかつていのその力をオーケランドはこの旅の途中で目撃している。その計り知れない圧倒的な力は何もかもを滅ぼしてしまう力。そんな力を使わせるわけにはいかない。

だが、ルシアは止まらない。オーケランドの制止を無視して先へ

と進む。

「よそ見してる暇あるのかい？」

カインドが詰め寄るが、オークランドは素早く構え直す。

「ぐつ…ルシア…」

様々な状況が、様々展開を見せる。

砲撃隊討伐したステューとニヒュアス。

壮絶な戦死を遂げたニヒュアス。

リサを追いかけたボズ。

仲間又アリスと一緒に逃げたりサ。

攻め込むズッケルア軍。

対するオークランド軍。

グリークスの命を狙うカインドとシール。

迎え戦うグリークスとオークランド。

そして。ルシアの力。

事態は後戻りの出来ない最終局面へと進み始めた。

／第7章 王位継承の争い 終／ 第8章へつづく

## 第8回　いぼれ話

いつも読んで頂き、来て頂き、覗いて頂き、ありがとうございます。

第3部の第3章が終わった時以来です。

確か、3月くらいでしたから、もう4ヶ月近くぶりですね。間違いないと黙つていいほど、自己満足の世界へと突入しているわけですが。

皆さんにわかつてもらえるように、しつこく、クドいくらいに、ウザイくらいに説明文を書いたりしているわけです。

人の名前ばかりは、読み直してもらわないといけません。

ひょつひとつと出てきますから「誰?」っていう人が多いと思います。

さて、第3章でああこうことになりますし、これでどうやって最終部まで引っ張ろうかと頭を悩ませています。

まだまだ先ですかね。

そこで、第4章。

登場させる予定は全くなかつた、グリーグスがいきなり登場。

「やべつ、考えてない。この先何も考えてない！」

あからさまな展開ではありますがない。

そのまま第5章。

ここでは、戦争が始まりますが、グリーグスのカツコイイ指揮を披露させるために書いたのですが……あれ?おい。助けてもらつてんじゃん!

……まあ、彼もまだ発展途上といつことだ……。

## 第6章。

少しの休憩とこれから展開の準備期間で早めに第7章へ行くようにしてました。

第7章が一応の最終章だつたんですが…。

ステュードボズの子供コンビが活躍しそぎて、この中でおさまりませんでした。

そもそも次回の第8章へ続くのです。

ボズが大好きです。頑張れ～。ちゃんと次回も活躍させるからね。てゆ～か、7歳の行動じやないぞ～！

忘れている人もいるかと思いますが、このタイトルは「七英雄物語」です。同名のPCゲームがあるそうですが、一切関係ありません。

ルシアという主人公を守る7人の戦士（英雄）達が力を合わせて悪と戦います。

では、7人の英雄とは？

現時点で決まっている英雄達です。変更はかなりアリですけど（・・おい！）

白髪の剣士、ハッシュ。

ゲルニア国の元将軍、ファミリストン。  
そして、無実のお尋ね者、グリーケス。  
以上の3人です。

第3部の最後で4人目も判明します。

てゆ～か、もう皆さんの想像通りだと思いますが…。

長々とすみませんでした。

それでは、第8章をお楽しみ？にしていてください。

ムニシベテ！

「隙だらけだよっ！」

カインドが勢い良く襲い掛かった。

グリークスはかわす。短剣のおかげで間合いは十分余裕がある。

「オークランド！ここは任せてルシアを追え」

グリークスは叫んだ。

本来であれば、ルシアの後を追いたい。あの驚異的な力が発動すれば敵味方関係なく極めて最悪の展開になるようオークランドは想像していた。だが、しかし。ここでグリークスを1人できるわけがない。

「2人は無理です、グリークスさん。ここは早く切り抜けてルシアを追いましょう」

「へえ、あたしたちも見ぐびられたモンだわ」  
カインドが舌打ちした。

ルシアは淡々と歩いていた。向かう先は、砲撃の行われている戦場。まさに、今、ズッケルアの兵士が雪崩れ込んでくるのをオークランド軍が必死に抗戦している最中である。

そんな場になんの装備も持たない者がいるだけで邪魔であるし、あつという間に巻き添えを食らって死ぬことになるだろう。

それがわからないルシアではない。

自分の命よりも、この城を、オークランドを守るためにルシアは覚悟を決めた。

大きな砲撃の音で、すぐにボズは目を覚ました。まだ思うように身体が動かない。ゆっくりと起き上がり、辺りを見回す。リサとそ

の仲間のヌアリスの姿は当然なかつた。

元々はリサを連れ戻すための行動だつたのだが、結局は連れ戻すどころか、逃がしてしまい、ボズ自身も危険な目にあつことになってしまった。

「なんだよ、この音は…」

地鳴りがするほどの音が響く。砲撃の爆音である。ボズのいる場所はズッケルアが用意したもう一つの砲撃隊の近くであつた。

「くつそ、城がやられてるじゃないか」

ボズはフラフラしながら、歩き出した。

そこへ、影が1つ。

驚いたボズだったが、恐怖は簡単に消えた。影の正体はステューだつた。

「あ、ス、ステュー」

「…無事だつたか…」

ステューは静かに言つ。

「…リサは…」

言われたくない事を突かれて、ボズは下を向いた。その素振りを見てステューは察し、何も言わなかつた。

「今から、あそこの大砲隊を排除にいく。來たければ…こい」

そう言つとステューは走り出した。

「あつ、おい、待てよ」

ボズが来ないなどと思つはずがない。ステューの後を追いかけた。

「ぬおおおおおおつりや あ！」

「おおおおおつりや あああ！」

ズッケルア側の老棋士ブルガスと、オーランド側の戦士ペッチエルの互いの雄叫びが激突した。剣と剣が交差する。2人の一騎打ちが始まっていた。それを横目にズッケルア軍の兵士が怒涛のように攻め込んでいく。

「ぬぬつ、久しぶりの対峙だのう、ペツチエルよ」  
ブルガスが旧友との対決を心待ちにしていたのか、嬉しそうに言った。

「お前は、仕える者を間違えたみたいだな、ブルガス」  
ペツチエルは同じように笑顔で返す。

「何を言うか！ 我が王子、ズツケルア様を愚弄するな」

「まあいい、どちらが正しいかはいずれ分かる。このワシの剣によつてな」

ペツチエルは大きく剣を振り回す。

「それはこつちの台詞じゃああああ

ブルガスの剣もうねりを上げる。

お互いの信じる者の思いを背負いながら剣を交える戦士2人。この後決するであろう争いの行方を今は分る者は誰もない。

### 森の奥先。

リサとヌアリスは無言で歩いていた。

「まだ戦つているな」

ヌアリスが呟いた。オーネクランドの城で始まっている争いのこと

を言つてゐる。

「どつちが勝つと思う？ リサニス」

ヌアリスがリサに聞いた。

リサは全く考へることもなく言つた。

「何を間抜けなことを聞くのだ、ヌアリス。絶望神メンデルゴス様がいるのだぞ。負けるわけがないではないか」

ルシアの身体に宿つている絶望神が負けるわけがない。それは、オーネクランド側勝利を予言してゐた。

「…ああ、そうだな、失言だった」

ヌアリスは軽く笑う。

「俺はドルコルド国へ帰ろうと思つ。マルーン教皇に報告せねばな。

お前は、ガシーベ国へ戻るのか？」

「ああ、生憎そこしか居場所はない。あたしも完全ではないし、苛立たしいが、戻るとしよう」

ヌアリスの質問に、憎しみを込めてリサは言った。リサもまた、無口な少女の身体に宿っていたのだ。ガシーベ国に戻ることは、また無口な少女へ戻ることを意味していた。事を荒立てないために、仕方ないことではある。

「ところで、絶望神様の状態はどうなのだ？」

「順調だ。あまりに順調過ぎて、宿っているルシアとかいう人間の身体を再起不能にしかねないくらいの力だ。ここで見た時は危険だったでの、あたしの力で抑えはしたが」

「ふふ、もうすぐだな」

ヌアリスは不気味に笑う。

「ああ、もうすぐだ」

つられてリサも楽しそうに笑った。

カインドとシールの執拗な攻めをなんとかグリークスとオークランドは防ぐ。

攻撃をさせる暇を与えない攻めは圧倒的に勢いを増していく。

「耐えろよ、オークランド」

「はっ、はい」

2人の武器が短剣だったこと。結果運が良かつたと思わざるを得ない。間合いが短い分踏み込まれることがない。これがもし、同じ剣であれば、命はなかつたのではないだろうか。

それでも劣勢なグリークス達。ジリジリと後退していく。このまま続くと、カインドが言っていた通り、時間の問題である。

「おっ、お前、なんか魔法とか出来ないのか？」

たまらずグリークスがオークランドに問う。

「すみませんっ、僕は回復系の魔法しか使えないんです。それもそ

んなに連續で出来ないし」

申し訳なさそうにオークランドが謝る。

「ほりほらほらほらああ～！」

シールが無邪気に攻め立てる。段々と気持ちが昂つてきているようだつた。

「油断すんな、シール！」

それをカインドが厳しく止めた。

「もういいよ、面倒臭いよ、飽きたよ、一気に決めるよ～」

シールが片手の掌を地面に押さえつけて、力を込めた。

「…ばっ馬鹿、シール、ここでやるな～！」

カインドが青ざめて叫ぶ。

鋭い悪寒がグリーケスとオークランドの背筋を貫く。危険だ。本能が脳を刺激する。

「いけええええ～！」

シールの身体が金色の光に包まれた。

つづく

「あ…あいつ、何か力を隠し持つていたのか…」  
グリークスが絶叫する。

「危険です、グリークスさん、何かわからないですが、危険です」  
オークランドの意見にグリークスも同意だった。  
だが、どのような力なのかわからぬだけに、どのような防御を  
施せばいいのか見当がつかない。

「とにかく、身をかがめて、最小限に留めるんだ」

2人は身体を丸めて、地面に這いつぶばる格好になつた。

「無駄だね、そんなことしても、無つ駄さー！」

シールの光が更に輝きを増す。

「…つ…くつ」

カインドが大きく振りかぶつて拳をシールの頭に振り下ろした。  
ガツン。鈍い音がする。

シールの金色の光は薄れて、消え去つた。

頭を抱えて蹲つていたシールは泣きそうな顔で叫んだ。

「痛いー！カインド、また殴つたー！これ、ホントに痛いー！」

「うっさい！状況考えてやれ、あたしも一緒に殺す気か？！」

「うー、死なないよー、カインドは強いモン、僕のこと殴るし」

「そういう問題じやない」

呆れ顔でカインドが言う。

その一部始終をグリークスとオークランドの2人は見ていた。

「な…なんか助かったみたいですね」

オークランドが苦笑いを見せた。

「そんなんに、凄い威力なのか？」

グリークスが続いて口を開いた。仲間であるカインドが焦つて止  
めに入るくらいの力。ここで使つと巻き込まれるからだ。それほど  
の力。グリークスはぞつとした。

「…今だ、逃げるぞ、オークランド！早くルシアの所へ急げ！」

「えつ？あつ、はい」

グリークスとオークランドは走り出した。カインド達とは逆方向へ。

「あつ！」

「ほらあ～！カインドのせいだ！僕を止めたから！逃げたじゃないか！」

「うつさい！追いかけるぞ、立て！ほら！」

カインドとシールは見えなくなっているグリークス達を追つた。

ステューとボズは、もう1隊の砲撃隊の位置を確認した。

慎重にステューは辺りを探る。ラクシードのような手強い敵がいると厄介である。あの時も二ヒュアスが命を捨てなければ勝利することは不可能であった。

今度は砲撃手だけで、戦士はない。

「俺が一気にいく。お前はそこで待つていろ」

遠まわしであるが、これはステューなりの気遣いだつた。後遺症になるような傷は見当たらないが、体力的にも精神的にもボズは限界だというのに、ステューの判断だったのだが、それがボズは気に入らなかつた。

「何言つてるんだよ、僕だつていいくよ

「……することはないぞ」

「うるさい！お前一人に良い格好させてたまるかつてんだ」

ステューはため息をついた。

「まあ、好きにしろ」

そう言うと、ボズを置いて飛び出した。

それからは、早かつた。

ステューの人間離れした動きは、あつという間に砲撃手達を倒し、見事こここの砲撃も止めることに成功した。

「す…すごいな」

さすがにボズも感心するしかなかった。

砲台。玉。閃きがボズの頭の中を通過した。

ボズは砲台に駆け寄り、照準を動かした。ボズの意図を察したステューリーも玉をこめる。

「発射ああああ！」

砲撃は一転、ズッケルア軍目掛けて放たれた。

何度目の爆音であろうか。だが、この爆音は戦況をひっくり返すだけの、重要な砲撃だった。

ドオオオン。

その砲撃は今まで通り、オークランドの城ではなく、ズッケルアの軍に直撃した。混乱したのはズッケルア軍。予想だにしなかつた攻撃に慌てふためいた。

オークランド側からすればこの状況の流れを変えるのは今しかなかつた。士気が炎のように燃え上がる。

「怯むな！押せ！」

ズッケルア側の指揮をしているガルヌが怒鳴り声で指示をした。

「ありや～、展開が変わつてきましたねえ、王子」

ズッケルアの側近戦士であるサー・ポーが言った。

「そうだね、これは、何か手を考えないといけないな」

ズッケルアが冷静に話した。

何かを思いついたように、サー・ポーが不適に笑う。

「こうなつたら王子も前線に出るしかないですね。そうすれば士氣もあがりますし、何よりも、やっぱしオークランドと決着をつけなければいけないっすよ」

それを聞いたズッケルアは頷いた。

「つむ、やうだな。…いくが、サー・ポーよ」

ルキボルという国の中で、同じ国の人間達が、それぞれの王子のためとはいえ、どうしてここまで殺し合ひをしないといけないのだろう。

ルシアは歩きながら悲しく思つ。争いは時には必要なかもしない。だが、こんな争いは無意味だとルシアは唇を噛み締めた。自分の中にいる、その強大な力を持つ神が本当にいるのなら、真っ先にこの争いを止め、平和な世界を作るべきではないのか。

戦場の前に出てきたルシアはその光景に目眩を覚える。  
オークランドの軍とズッケルアの軍の殺し合ひ。殺戮。見るに耐えない。

「や…止めてください…」

精一杯叫んだはずのルシアの声は興奮した兵士達の怒声にかき消された。

その瞬間。

ルシアの横から、確固たる強靭な意志の声が高らかに響いた。  
「我がオークランドの名の下に命令する！ルキボル国の精銳なる戦士たちよ！争いを直ちに止めよ！」

「…オークランドさん…」

カインドとシールの追跡を振り切り、なんとかルシアに追いついたオークランドが叫んだのだ。今までの頼りない男ではない。その表情は決意が満ち溢れていた。自分の命を捨てても止めなればならないと覚悟を決めた顔だった。

その顔こそ、王と呼ぶに相応しい希望の光だった。  
後ろでグリークスが満足気に笑みをこぼしていた。

つづく

「…なんかさあ…ややこじこになつたよねえ。カインンド?」  
シールが呟いた。

逃げたオークランドとグリークスを追つてきたのはいいが、完全に機を逃している感があった。

状況は一変している。飛び込んでグリークスの命を奪うのは容易いかもしない。

だが、ここには邪魔をするべきではないとカインンドの本能が身体を止めていた。

今は、王を決める國の存亡を賭けた戦いの核である。一つの歴史の瞬間。その瞬間の間に割り込んで潰すことはカインンドには出来なかつた。

「…黙つて見てるんだ、シール」  
カインンドは言つた。

「もう一度言う。戦いを直ちに止めるんだ!」

オークランドの声は、兵士達の頭の中に直接語りかけたかのようにな響いた。

1人の兵士が攻撃を止め、相手の兵士も攻撃を止める。  
それを見た兵士が攻撃を止めて…と連鎖反応を起こし始めた。

「戦いが…止まる」  
グリークスが言つた。

「王子」「オークランド様」

次々に兵士が戦いを止めていった。

「止めるんだ、ルキボル国に戦士よ。我らは戦うために生まれてきた筈ではない。人の命を救う医学を向上させ、世界へと羽ばたくためにはいるのだ。こんな所で無益な戦いをすることは間違っている」

オークランドは厳しく言った。弱々しい彼の姿はない。覚悟を決めた真の男の顔がそこにある。

その迫力に押されてかズッケルアの兵士達も動きが止まる。ステューとボズが砲撃隊を倒して逆にズッケルア軍を狙っていたのだが、玉がなくなつたのか、砲撃は完全に止んだ。

老騎士のブルガスとペツチエルの2人も一騎打ちをやめてオークランドを見つめていた。

一瞬の静寂が訪れる。しかし、それは簡単に引き裂かれた。

「何を言うか！」

ズッケルア軍指揮官ガルヌだった。絶対的にズッケルアを信じているガルヌの使命はズッケルアを国王にすること。そのためには、ここでオークランドを排除しなければ勝利はない。

「惑わされるな！皆殺しにされるぞ！攻めるんだあ！」

力の限りガルヌは叫んだ。

「そこまでして争いがしたいのか？」

それを搔き消すオークランドの言葉がガルヌを貫く。

「ぐつ」

ガルヌも争いはないほうが良いに決まっている。その思いのなかで思い通りにいかないから力で抑えるしかないと考えていた。直接に聞かれると返事に詰まる。

「後戻りは出来ないのですよ、オークランド」

ガルヌは後ろから聞こえた声に反応し、振り返った。辺りが更にざわつく。

残った2人の王子。オークランドの弟であるズッケルアが、なんどここまで出てきていたのだ。声の主はズッケルア王子だった。

「お…王子…」

ガルヌが答えた。

「ここまできたら、どちらが滅びなければ…決着がつきません」

ズッケルアは冷静に言った。

「そんなことはない、ズッケルア。僕がお前に王位を譲れば済むこ

とだ

「済みません。兄、ミストラスが戦死した今、我々だけが簡単に和解することなど無理です」

ズッケルアはオーランドを睨んだ。

オーランドは手を大きく振った。

「違う、ミストラス兄さんは、死する最期、自分の行為を後悔して死んでいった。それが兄さんの本心だ」

「それがどうした！争いで始まつた王位継承のこの戦争。そもそも、オーランド、お前は継承には参加しないはずだったではないですか！それを、今頃になつて、当然のように戦火の渦中にいる。話が違うではないか！」

ズッケルアは捲くし立てた。

「…そうだな」

オーランドは呟いた。

「ズッケルア…最後の質問だ。その返事で僕はこの戦争から手を引く。責任で僕が死ななければならぬのであれば、この命捧げよう」「なつ、いけません王子！」

ペッチャエルが怒鳴つた。

「いいんだ、ペッチャエル…いや、先生。僕が決めることです。それでこの意味のない戦争が終わるのであれば…」

苛ついたズッケルアが間にに入る。

「そんな茶番劇はいりません、その質問とやらを早く言え」

オーランドは息を少し吸つた。

「…ズッケルアに問う、お前は王になつて、何がしたいのだ？」

よるある質問に、兵士達は度肝を抜かれた。こんな質問のために、自らの命を捧げるなど誰が出来るのか。

「はつ！何を聞いてくるかと思えば、そんな質問か、馬鹿めオーランド！王になつて何がしたいかだと？答えてやるとも！王になつたら……」

ズッケルアの身体が止まつた。

「王になつたら……」

何も浮かばない。ズッケルアの脳裏には何も思いつかない。自分が王になつたらやることやるべきこと。何がある?いや、あつたはずだ。したいことはあつたはずだ。だが、思い出せない、思いつかない。今までどんな思いで戦つてきたのだ。卑怯なことまでして、何のために戦つてきたのだ。全ては王位。王の座に就くためだらう。ならば何かあるはずだ。何があるはずなんだ……。

ズッケルアは頭を抱えた。

「ぐつぐつぐぐつぐ」

「お…王子?」

ガルヌが心配そうに近寄つた。

「あ…ああああ…あがががががががつが~!」

突然ズッケルアが奇声を発した。狂つたとしか見えない程の危行だつた。

「サア～ポオ～オオオオオ～！」

ズッケルアは呼んだ。側近戦士サー・ポーの名を。

「はい」

サー・ポーの声はオー・クランドの死角から聞こえた。剣を抜いたサー・ポーがオー・クランドを襲つた。

「オツ、オー・クランドオ！」

グリークスの叫び虚しく、剣は深々とオー・クランドの腹に突き刺さつた。

つづく

### 第3部 第8章 煙く王子 その4

その場の全ての時間が止まっていた。

オークランドに刺さった剣が残酷な現実を突きつけていた。溢れる血。剣から手を離したサー・ポーが返り血を浴びている。

剣を抜き、血の止まらない腹を押さえながら、崩れ落ちた。僅かな時が一夜明ける程の時に感じる。

全員の言葉が出ない。

ただ1人、暴走したズッケルアの笑い声だけが響いていた。

「あ～はっはっはっは～！ ビョウだあ～！ オークランド～！ あ～ははははは」

「そんなん！ 王子！」  
ペツチエルの叫び。

「オーケランドオオオオ～！」

グリークスがオーケランドを抱き上げた。

「回復だ！ オーケランド！ まだ間に合う！ 回復魔法を使え！」

医療大国ルキボルの王家の者は回復の魔法が使える。「兄のミストラスは使うことが出来なかつたが、オーケランドとズッケルアはその資質があつた。

実際ガルド会議でグリークスの父デスペラードが襲われた時にオーケランドは回復魔法を披露した。残念ながら、デスペラードは既に死んでいたためにその魔法は無駄になつたが、今は違う。回復魔法は傷を治すのだ。瀕死ながら生きているオーケランドは間に合うはずだとグリークスは考えていた。

「オーケランド！ 穰張れ！ 魔法だ！ 詠唱しろ～」  
「…………がふつ」

オーケランドが血を吐いた。魔法の詠唱が出来ない。基本的に詠唱が出来ないのであれば、魔法を発動することができない。回復だろうが、攻撃だろうが、詠唱できなければ意味がない。

つまり。

詠唱が出来ない今、オークランドの助かる道は皆無に等しい。

「くそ、くそ、オークランドオ！」

「サー・ポー！グリークスも邪魔だ！排除するのだ」  
ズッケルアはグリークスを指差して命令した。

「はーい」

サー・ポーは脇に差していた短剣を出して、グリークスに襲い掛かる。

「あつ、あつ、いいの？いいの？カインド？」

シールがそう言い終わる前に、カインドは動き出していた。

「くそっ！あいつを殺すのはあたしの役目だ！貴様などに殺らせるか！」

カインドもグリークスの方へ向けて走り出していたが、遅い。  
「ちつ、間に合わない」

サー・ポーはグリークスへ短剣を振り下ろした。

ぱあん。

破裂音が響く。

この状況でどこから発生した音なのか。

それはすぐにわかつた。

「うぎやあああああああああ」

サー・ポーの悲鳴によって。

あの軽くて動搖もしない調子者のサー・ポーが青ざめてのたちまわっている。

何故なら。サー・ポーの両腕が弾け飛んでいたからである。短剣を持つた右腕と左腕がサー・ポーの身体を離れて転がっている。大量の血が流れる。先程の破裂音はこの音だったのだ。

「な……なんだ？」

グリークスは訳がわからない。……と思つたが、すぐにある確信へと考えが達した。これまでの話の中で、こんなことが出来るのは「彼」しかいない。

グリークスが見た方向。その先には。

ルシアがいた。

「……ル……ルシア……？」

グリークスは咳く。

一度その現場を見ていたズッケルアはガタガタと震え出した。

「ま……まさか……」

ルシアは、据わった目をしていた。同じ冷静さでも全く違う。別人の目だと誰もがわかる。落ち着いているという目ではない。なにもかも悟っている目だった。

『私の眠りを再び覚ましたのはお前達か』

姿形は明らかにルシアである。だがしかし。その声、声に乗る威圧。間違いなくルシアの中に宿っている「何か」の存在だった。

「ほ……本当に……」

グリークスはルシアを見上げながら呆気に取られていた。

ズッケルアが言った。

「た……太陽神……」

その場の兵士が騒ぎ出した。

『……お前は……覚えている。私の宿りし者の命を救おうとした者だ』  
太陽神ルシアは血だらけのオークランドを見た。ミストラスによって裁判にかけられ、弓矢で射抜かれた時、ルシアの命を助けるために、無実の罪を被るうとしたことを覚えていたのだ。

『英雄である者よ、お前の命を助けよう』

ルシアの手が輝き、その手をオーカランドへ掲げた。

「き……傷が……」

グリークスが驚いた。それもそのはず、手を掲げただけでオーケランドの傷が塞がっていくのだ。顔に生気が蘇る。

グリークスは神の成せる業を見た。

「う…」

「オークランド…気が付いたか！助かったぞ…」

グリークスの喜びを背に、ルシアはサー・ポーの方へ歩き出した。サー・ポーの目は恐怖で怯えていた。腕はもつ自分の意志では動かないし、腰が抜けて立てないでいる。

『……』

「なにを…？」

グリークスの肩を掴み、オークランドは無理矢理に自分の身体を起こした。

「や…やめさせてください、グリークスさん。いけない。このままじゃあ…」

いきなりのオークランドの言葉にグリークスは理解出来なかつた。

「なんだ？ オークランド」

「今のルシアは神なんです。古より僕達は教えられてきました。神とは尊いもの。神の言葉は絶対です。つまり神に逆らうこととは許されない。それが太陽神だろうが、絶望神だろうが。…であれば、次にすることとは…」

『私を守る英雄の命を脅かす者よ、死してその罪償つがいい』

「待つ…」

オークランドの声をかき消す破裂音が響いた。サー・ポーの身体が跡形もなく消し飛んだ。

つづく

敵味方関係なかつた。その場にいた全員が改めて認識した。もはや疑いの余地はない。

このルシアという少年に、神が…太陽神アルニヴァースが宿つているのだと。

「サ…サー・ポー」

ズッケルアは絞り出すように言った。

部下が、目の前でなす術なく文字通り消されたのだ。魔法でも奇術でもなんでもない。現実の出来事だった。

動けないのはズッケルアだけではない、ガルヌ、ブルガス、今ここに立ち会っている全ての者が身動きとれなかつた。

『首謀者はお前か…』

太陽神ルシアはズッケルアへ向き直つた。

「あ…ああ…」

ズッケルアは後退りした。

「ぬう…王子！」

老騎士ブルガスが飛び出した。

「と…止まるのだ、ブルガス」

先程までブルガスと一緒に打ちをしていたペッチャエルが制したが、間に合わなかつた。

『……』

人間は神には勝てない。力の差がありすぎる。どうにかなる世界ではない。

止めに入つたブルガスはサー・ポーと同様の運命を辿つた。破裂音と共に焼き消された。

人の命がいとも簡単に消え去つていく。どうしようもない裁きにズッケルアは覚悟するしかなかつた。

『死してその罪を償うがいい』

ルシアがズッケルアを消そうとした時。

「待つて下さい」

ヨロヨロとオークランドが間に割つて入ってきた。

「オークランド…」

意外そうにズッケルアが見上げた。

『なぜ止める』

ルシアがオークランドを見据えた。

オークランドは威圧感ある目に圧倒される。しかし、ここは引き下がれない。それが例え神だとしても。この場で殺されたとしても。

「こ…これ以上は…もう、止めてください」

『なぜだ？ 私やお前の命を脅かす者だぞ』

「確かに… そうです。多くの命が奪われた。全ては僕の… 僕達王家の責任です。このくだらない争いに幕を閉じます。ですからこれ以上は… お願いします」

オークランドは言葉を詰まらせた。

「こ…の民も、兵士も、敵も味方もない。まして、ズッケルアは僕の弟なんです…」

「…つ…」

ズッケルアは絶句する。神に逆らっている兄の姿を見て、本当の、真の、国王の姿を垣間見た。

オークランドは、懐から紙を取り出した。それは、父である王がオークランドに託した物、遺言状である。それを開いた時、うつすらと遺言状が輝いた。

周りがざわつく。

遺言状には王家の魔法が施されていた。中身は白紙である。父王の最期の魔法。死を覚悟した人間のなせる業。オークランドは輝いた理由を悟った。

王には3人の兄弟の誰が即位しても良かつたのだ。誰かを特定している訳ではなかった。本人の心の中に確固たる決意が芽生えた時に遺言状が反応し、輝きの魔法が発動したのだった。その輝きこそ

が、王の証だつた。

オークランドは、遺言状を、高々と、空に、掲げた。

「ルキシー・ボル・フォン・オークランドの名の下にー」の國、この世界の平和のために、この身、この命、果て死えるまで、医療大国ルキボル國[王として人生全てを賭けることを、ここに宣言するー。」

「引き上げるよ、シール」

カインドが口を開いて踵を返した。

「ええっ！ ちょっと…、カインドいいの？ グリークス倒さなくていいの？」

シールが慌てて後を追いかけながら言った。

「こんな状況じや、もう無理だ。次の機会を狙つよ。次は逃がさない。必ず、グリークスを仕留めてやる」

カインドは悔しそうに呟いた。

「そうだね、今襲つても、あのルシアって子に消されちゃうかもね、恐い恐い」

シールは楽しそうに笑顔で言った。

「うつさい。とにかく、これからもグリークスの後を付けるよ。その前にマルーン教皇に報告だけしないとね」

「あいあ~い」

2人は煙のよじにその場を離れた。

「…な…なんか凄いことになつてるな」

ボズが言った。

城の近くまでステューと一緒に戻つてきていた。オークランドの宣言がちょうど耳に入つてきたのだった。

「と…とにかく早く戻るぞ、ステュー」

「そうだな、お前がリサを結局逃がしたことも言わないとな」

珍しくステューがボズをからかつた。

「…なんだと、ステュー！おつおい待て！」

ボズの怒りを他所にステューはスタスタと歩き出した。

これが少し前の弱々しいオークランドなのだろうか。力強く希望に満ち溢れてる。

「ズッケルア軍は2週間の謹慎、階級の剥奪に処す。指揮に当たつていたガルヌは1ヶ月の独房、軍法会議にて罰を決定する。最後に首謀者であるズッケルア、ガルヌ同様2ヶ月の独房、身分の剥奪とする以上を持つて、この戦争を終結する」

オークランド宣言で、拍手と大歓声が巻き起こつた。罰を言い渡されたズッケルアの兵士ですら喜びで讚えている。ガルヌ、ズッケルアも笑みを浮かべていた。

ここで厳しい処分をすることが、太陽神へのケジメだつた。全員の命を、ズッケルアの命を救うためにはこれしかなかつた。それがわかつてゐるからこそ、兵士達は喜び、ズッケルアは笑つてゐるのだ。

オーケランドはルシアを見た。

その瞳は、爽やかで、澄んでいて、見つめられると誰もが生を感じる瞳だつた。

「…僕の、王としてのケジメです」

『…私は…永い眠りのせいで勘違いをしていたのかもな』

ルシアが優しく喋りだした。

『太陽神とは、人間を守ること。世の中に平和をもたらすこと。力や恐怖でねじ伏せるのであれば、絶望神と変わらない…。礼を言つぞ、お前のおかげで思い出せた』

「いえ…そんな…」

『だが、悲しいことに、戦争は無くならない。時には必要とさえする。更には人の気持ちを無視する闇、絶望神の存在』

「負けません。僕は、この信念を貫くだけです」

ルシアは笑顔で目を閉じた。ルシアの中にある太陽神の意識が抜けていくのをオークランドは感じた。

『やはり…お前は…英雄…だな…』

「え？」

そのまま、ルシアは倒れ、深い眠りについた。

オークランドは大きく息をした。まさに『神の怒り』を鎮めたのだ。

「オークランド…」

後ろからグリークスが話しかけてきた。

「グリークスさん、ありがとうございました」「成長したな、ガルド会議の時と全然違うぞ」顔を見合わせて笑つた。

長かつた政権争いが、今、終わりを告げた。

### 第3部 癒しの瞳に奇跡輝く エピローグ 英雄2人

若干の落ち着きを取り戻したルキボル国。再建への準備を着々と始めていた。

そんな中、別れもやつてくる。

「気をつけるのだぞ」

ペッチャエルが心配そうに言った。

「大丈夫だよ、ペッチャエルさん。俺は強いんだぜっ！」

ボズが偉そうに言った。隣には相変わらず喋らないアリシェがいる。

「…リサを逃がしたくせにな…」

ステューが呟いた。

「この…何度も何度も…」

ボズが憤慨するのを、グリークスが止めた。

「落ち着けボズ、仕方ないじゃないか、お前はよくやつたよ、皆わかつてる」

「だつて…グリークスさん」

ブツブツ言っているボズにルシアが優しく声をかけた。

「そうですよ、ボズ。よくやりましたよ、尊敬します」

ルシアは笑顔を見せた。ボズはルシアの笑顔に弱い。

先の争いで太陽神となつたルシアだが、目覚めた時にはいつもルシアに戻つていた。しかし、突然のきっかけで宿つている神が現れるかと思うとグリークス達はこれから旅に不安を覚える。何か制御する方法を見つけなければならなかつた。

グリークス、ステュー、ボズ、アリシェ、ルシアの5人は今日、ルキボル国を離れる。アーガス国に戻るのだ。クラシェイカの予言通り、グリークスという英雄を連れて。

そして。

英雄は…もう一人…。

「あなたも気をつけるのですぞ、王子…いや、国王」

「大丈夫、ペツチエル先生。それよりも、留守を頼みます」

オークランドが言った。

オークランドが6人目として、ルシア達一行に加わるのである。王が国を留守にすることで城内では反対はあったが、ルシアがオークランドを英雄だとお願いしてきたことと、世界の平和を望むオーケランドにとって絶望神の復活は阻止せねばならない。

オーケランドは旅に同行することにしたのだった。ルシアに宿つている太陽神と絶望神が気がかりなのだ。

「もし、留守中に行き詰ることがあれば、独房にいるズッケルアやガルヌに聞いてください。もう彼らは大丈夫です。信頼できると思います。…それでは…いつきます」

オーケランドの美しい白き愛馬ストラングにアリシェを乗せて、6人は出発した。

これから待つ世界の存亡を賭けた聖なる戦いのために。英雄達は運命の糸を少しずつ手繕つていく。その先にあるのは希望か絶望か。それはまだ誰にもわからない。

## 第9回　いぼれ話

いつも読んで頂きありがとうございます。

新年から始まつた第3部。約8ヶ月経ち、ようやく111で、無事終了しました。

その間、この七英雄物語は連載開始から1周年となり、『継続は力なり』という言葉を強く感じています。力になつてているのかどうかはわかりませんが…。

まず4日毎の更新が、都合で1週間毎になつてしまつたのが、ここまで長くなつた理由かと思います。

4日毎を続けていれば、2ヶ月は早く終わつていたと思います。

それと、話が予定以上になつてしまつた。

僕の中では第6章で第3部は終わるはずだったのが、第8章まで続いてしまい、大変でした。その分非常に濃い話になりました。

この第3部はターニングポイントです。

ルシアという主人公の本格的な登場。いきなりルシアの謎。核となる部分が早くもわかるという展開。文章的に非常に辛かったです。しかも、ますます読み難かつたのでは?と不安になります。

毎回毎回読者に分り辛く申し訳ありません。極力分りやすいように書いているつもりです。

それと書いていて仕方なかつたのですが、主人公のくせにルシアの活躍がなさすぎる。

いくらオーランドの話とはいえ、ここまで活躍しない主人公はいかがなものか。

更には、ルシアが（ネタバレなので伏せますが）オールマイティー的なことになり、こいつの力があればなんでも出来るじゃねーか、英雄いらねーじゃねーか。と突っ込まれる始末。

これに関しては、今後オールマイティーにならなように考えます。

登場人物もあまりにも大勢出しそぎた第2部の失敗からか、主要メンバー以外は書かないようにしました。

でもそれでも多かつたですけどね。

…すみません。忘れ去られてもいい…僕は大勢出すのが好きなんです。

さてさて、第4部。

順番でここにはハッシュショやファミリストンの登場かなと。しかし、そうなるとまた主人公のルシアが出てこない。かといってルシアとハッシュショを合流させれば…また登場人物がゴチャゴチャになる…。

考えどころです。

とりあえずは、仕事の都合上充電期間を取ります。ある程度のまとまりをこの盆休みで作成して、盆明けくらいに書き出して掲載しようかなと。

そうなると、充電期間は第2部～第3部の時と同じで、約2週間を予定しています。

8月19日、20日の第4部開演を目標に進めよつと思います。充電中に次回の展開などの予告がわかれば、ご案内します。

それでは、皆さん、しばしの別れです。

また第4部でお会いしましょう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3577b/>

七英雄物語 3

2010年10月8日12時24分発行